
俺、ツインテールになります。9
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。９

水沢　夢
イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。9
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


観束総二
結翼唯乃
トゥアール
津辺愛香
イースナ
神堂慧理那


俺様のポニーテールは
――不滅だ!!

目次

俺、ツインテールになります。9

水沢夢 ［イラスト］春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

津辺愛香（つべあいか）

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

観束未春（みつかみはる）

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

イースナ

善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

結翼唯乃（いわばねゆの）

フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

桜川 尊（さくらがわ みこと）

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

8巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

四頂軍・死の二菱の戦士の力で過去に飛ばされた愛香だったが、総二のためのツインテールへの想いを強めたことで、最強形態・エターナルチェインに進化。時空を超えた死闘の末、死の二菱の副将オーガギルディに勝利した。

アルティメギル組織図

？ アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。後に離反し、テイルブラックとなる。

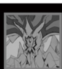
アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

一の部隊 ？ 詳細不明

死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）
隊長：ティラノギルディ
右牙（ライトファング）の副将：プテラギルディ
左牙（レフトファング）の副将：トリケラトップギルディ

美の四心が倒されたことでついに侵攻を開始する。

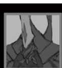
貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。アルティメギル組織内の爪弾き者の集まりだが、結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーの着任と共に総二たちの世界を侵攻する残存部隊に合流した首領直属軍の一角。長きにわたりツインテイルズと激闘を繰り広げたが、総力戦の末に完全壊滅した。

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊
隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。



リヴァイアギルディ部隊
隊長：リヴァイアギルディ



クラーケギルディ部隊
隊長：クラーケギルディ

・**タイガギルディ部隊** 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ　世界を統すべる者。

　星の数ほど、と喩たとえられる時がある。
　広大な大宇宙に遍あまねく存在する、無数の星々──その数に比するほど、と。

　人は星の数を、数値の極点として思い描く。
　自分たちが認識し、そして空想できる、地球を中心とする〝世界〟の極点として。
　理解を超えた尺度だからこそ、それは安易に用いられるのだろう。
　膨ぼう大だいな数を表す時、全幅の信頼を寄せてそう喩えることができるのだろう。
　だがそんな無限にも似た大宇宙もまた、たった一個の星に過ぎないと知った時。
　極点と信じていた数値が、更なる極点の一端でしかないと知った時。
　人は変わらず、最果ての世界として宇宙に思いを馳はせ続けることができるだろうか。
　異世界は、そんな理解の慮りよ外がいをさらに遥はるか遠く越えた先に存在するのだ。
　神ですら統治を諦あきらめる超絶の尺度、異世界。
　たった一人……たった一体。
　その星々の瞬またたきさえ超越した尺度に君臨する者がいる。
　平行世界として無限に等しく存在する異世界の全てを統べると、信じて疑わない者がいる。
　アルティメギル首領。
　全てのエレメリアンの頂点にして、最大最強の存在──。

◇

　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの左右の副将が敗れたことで、隊長であるティラノギルディは不可侵の神域である首領の間へと再び足を運んだ。
　絶対の戦闘力を誇る首領直属部隊、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス。
　美の四心ビー・テイフル・ハートを壊滅させたツインテールの戦士の存在する世界へ、勢い勇んで乗り込んだまではよかったが、蓋ふたを開けてみれば連敗続きだ。
　どれほど空気が読めずとも、将としての責は果たす。
　たとえ厳しい罰を受けようとも、戦況報告は必要であろうと。
　マルチバース・キューブ。
　アルティメギル首領の間が存在するとされる、多次元宇宙空間の最奥。
　数兆とも目される通路の組み合わせに守られたその全次元最難の迷宮へは、首領が許可しない限り辿たどり着くことは不可能。さらにそこで首領の機嫌を損ねようものなら、途端に帰路を断たれ、永遠の迷宮の中で果てることになる。
　首領との謁えつ見けんは、望むだけで命懸けだ。エレメリアンは誰だれもが、そう深く肝に銘じている。
　だが、首領直属部隊の長おさであるティラノギルディでさえもが、知るところではなかった。
　命懸けで戦う組織の戦士たち……その終始に、首領は微み塵じんの興味も示していないと。

「フッ……またそれか」
「□□□□？」
　ティラノギルディが戦況を報告し終えると、首領は嘲ちよう笑しようするようにそうぼやいた。
　自分より先立って、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦局を伝えにここを訪れる者がいるはずはないが……。
　地平の彼方かなたすら見えない、星空にも似た神秘的な空間の僅わずかな一角が、神殿の如ごとく厳おごそかに四方を囲われている。そこには、オーロラ状のカーテン──聖布ヴエールが冷厳に煌きらめいている。
「たかが一世界の侵略、余は急せかしはせぬ。それとも……」
　聖布ヴエールの奥に茫ぼう洋ようと揺れる影を前に、ティラノギルディは恐きよう悚しようしていた。
「急せいておるのはお前の心か？　ティラノギルディよ」
　男声なのか、女声なのか。ともすれば、目の前に座しながらにして肉声か合成音かすらも聞き惑う。首領の声こわ音ねは幾いく重えにもぶれて反響し、相対する者の心の真ま芯しんを的確に抉えぐり穿うがつ。
「め、滅相もございません……」
　恐縮するティラノギルディの眼前に、光を押し固めたような透き通った座卓が出現する。
「斯か様ように未さ来きを憂うならば、一つ余が占じて遣わす」
　そして、首領の思念が半実体化した五指が卓の上に現れ、縦長のカードの束を配した。
　──タロットだった。
　積み置かれたタロットカードが、踊るようにシャッフルされていく。
　カットし、再び重ね、それを繰り返し……全てのカードが途端に浮き上がって、月を表すように輪を描き。かと思えばまたそれを山に戻して、シャッフルの速度が増していく。

タロット占いというよりは、トランプマジックの様相を呈してきた。
首領が半実体化させた仮初めの指が指し示して合図すると、タロットは奇々怪々な動きをピタリと止め、卓の上に裏返しで扇状に配置された。
「選ぶがよい、ティラノギルディよ」
一枚だけ明らかに、目印のように取りやすく突き出ているカードがある。
露骨に狙ねらった一枚を取って欲しそうに見えるが、気のせいだろう。
格好をつけてタロットにかぶれた思春期の少年少女なら、あえて「愚ぐ者しや」のカードとか好んじゃう俺かっこいい、私マジ魔女、などと陶とう酔すいしそうなものだが、今タロットを操っているのは全知全能たるアルティメギル首領なのだ。全ては運命のままに平等であろう。
ティラノギルディは意を決し、突き出ているカードを抜き取り、そして裏返した。
興味深そうに、聖布ヴエール越しにカードに視線を送る首領。

「──ほう、これは面白い。…………愚ぐ者しやのカードか」

「うぐしゃあっ!!」
ストレートな驚声でダメージを訴え、胸を押さえてよろめくティラノギルディ。
「何事か」
慌てて取り繕つくろうティラノギルディ。否定するように頭を振ったせいで、自分の真横に薄紙が浮かんでいるのに気付いてしまった。
タロットカードの絵柄、名前と、おそらくは簡単な説明文だろう、それらが見やすく記載された一覧表──タロットのカンペのように見えた。

　それが占う側である首領から見えやすいように浮かんでいる……そういえば、選んだカードが愚者だと告げる直前、少し言い淀よどんだような。

「首領様……この紙はいっ……」

　言い終える寸前で気づき、押し黙るティラノギルディ。相変わらず空気が読めていない。

　幸い、首領には聞こえていなかったようだ。

　首領はタロット占いを続ける。

「しかも、逆位置の愚者……。それは失敗や困難、挫折……選択の過ちを意味するのだ」

　一転、ティラノギルディは緊張に戦慄わななく。

　わざと引かせたカードがそれを暗示しているということは……首領は、お前がそうであると言外に怒りを露あらわにしているのでは──と。

　焦あせるティラノギルディに、首領はさらなる試練を与え給たもうた。

「何をしておる、早く残りの四枚を引くがよい。ただし、ドローは二度までである」

　タロットって占われる側が五枚も選ぶんだったっけ、とか、そもそもポーカーのように再選択ドローなんてしていいんだっけ、など些さ末まつな疑問こそ浮かぶものの、迷っていても仕方がない。

　ティラノギルディは素早くノルマの四枚を選択し、首領へと提示した。

　もちろん、ドローはしない。

「女じよ教きよう皇こう、法王、隠者、恋人……そして、先の愚者。これが、お前を脅おびやかす存在の暗示だ」

「は……？」

　首領が占うのは自分自身のことと早合が点てんしたが、最初に引いた

愚者も含め、全てティラノギルディの直面する障害の存在を暗示していたということだ。遠回しに失態を諌いさめられているのではなかったことには安あん堵どするが……脅威の数が多すぎる。
「逆位置は愚者と恋人か……。女教皇と法王、隠者は完成を見たが、その二つは未いまだポテンシャルを持て余しているということだ」
「逆位置の恋人は……何を意味されるのですか」
「過失や後悔……そして復ふく讐しゅうを暗示する。フッ……まあ、恨みは買い慣れておろう、帝王よ」
　明らかにカンペを見ながら、自信満々に答える首領。卓上の愚ぐ者しゃのカードの前に具現化した手を移動させ、カードの端はしを指でぴん、と弾いて回転させた。
「だが心せよ、ティラノギルディよ。こうして正位置となれば──愚者は、その純粋さゆえに究極の可能性をもたらすのだ」
　強く弾きすぎて一回転し、逆位置に戻ってしまっているが、とりあえず正位置と思って話を聞いておく。
　正位置の愚者……可能性の暗示。
　それは果たして、自分たちに何をもたらすというのか……。
「首領様……ありがたき幸せ。此こ度たびの一いつ占せん、身の髄ずいまで刻みたく」
　恭うやうやしく礼をし、ティラノギルディは首領の間を後にした。

　基地への帰途で、困惑のままに思案するティラノギルディ。
　タロットが暗示した障害が、当面の難敵ツインテイルズだとすると数が合わないが……ツインテイルズの詳細は、首領には誰だれも伝えていないはず。人数を違えるのはむしろ当然だ。
　順番でいけば最後の恋人のカードだけは、レッド、ブルー、イエロー、ブラックの誰にも当てはまらないということだ。

　だがもし、五枚のタロットカードが正しく敵の数を示しているとしたら。

　あと一人━━ツインテイルズの他に、彼女たちに比肩する脅威が存在するということだろうか。

「……復讐……」
　逆位置の恋人がもたらす暗示が、ティラノギルディの脳裏を過よぎる。
　障害ならば、もう一人……いやもう一体だけ心当たりがあったからだ。
　何を血迷ったか、無敵を誇るアルティメギルに反旗を翻ひるがえし、未いまだ生き存ながらえている存在が。
　処刑人ダークグラスパーが倒し損ねたという、稀き代だいの反逆者━━。
「……落らく伍ご者が復讐とは、片腹痛いわ……!!」

　大おお仰ぎようにマントを翻し、ティラノギルディは決意を新たに歩みを進めた。

第一章　絶望のアルティメギル。

　──ツインテール触りたい……。

　願いを天に届けるように、俺は空を振り仰ぐ。
　秋も深まってきた今日この頃ごろに珍しく燦さん々さんと輝く朝日が、悪念を咎とがめるかのように照りつけてきた。俺ははっと我われに返り、勢いよく頭を振る。
　無意識に何を……一日の始まりにだらしない。
　通学路を歩く俺と愛あい香か、トゥアール……その中で一番足取りが重いのは、明らかに俺だ。
　数か月ぶりに袖そでを通した、制服のブレザー。
　たった一枚分増えただけの着衣の重さすら、ずっしりと身体からだにのし掛かるようだ。
「うぅ……」
「大丈夫、そーじ。顔色よくないけど……」
　隣を歩いていた愛香に心配げに覗のぞき込まれ、俺は努めて平静を装う。
「ああ、平気。またちょっと寝不足なのかもしれない」
　最近また一段と、身体の倦けん怠たい感かんが強くなってきている。
　体育祭の前あたりから、度たび々たび俺の覇は気きの無さを愛香に指摘されていたが……こうして心配されるまでに長引いては、そのうち元気になるだろう、と流してもいられないだろう。
「愛香は大丈夫か、疲れてないか？」
「うん。すっごい調子いいよ」
「…………」

　思わず愛香のツインテールに触れそうになり、俺は自分の左手で右腕をはたき落とした。
　先日、トリケラトップギルディ──死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの副将の力で、過去に飛ばされるという危機に直面した愛香だったが……この世界に帰還した時、また一段と頼もしさを増していた。
　当然、ツインテールもだ。
　長さは一ミリも変わっていない。結び位置も同じだし、色艶つやも一見何の変化もない。
　それでも、そのツインテールは見違えるほど輝きを増したように思える。
　一方、その成長したツインテールには、愛香自身の疲労が顕著に浮かんで見えた。
　俺に気を遣い強がっているのかもしれないが、先の激闘の疲れが残っているのだろう。
　愛香のツインテールは、いわば休養中。いつものように軽々しく触るわけにはいかない。
「ね、ねえそーじ、具合悪いなら欠席した方が……」
　愛あい香かがしきりに気にかけてくる。俺の顔色がよほど悪いのだろうか。
　これ以上、愛香を不安にさせたくないな。
「大丈夫だって。……あまり情けない姿を見せてちゃ、俺の中のツインテールに笑われちまうからな……!!」
「全然平気じゃなく見えるんだけど!?」
　かつて俺を叱しつ咤た激げき励れいしてくれた、俺の中の光り輝くツインテール。
　自分自身の中にツインテールが在あるというのに、ツインテール不足を感じるなんて……あいつに合わせる顔がない……!!

　俺は両りよう頬ほおを手の平で叩たたいて、気合いを入れた。
　今年は夏バテもなく過ごせたが──ツインテールバテでも起こしたのだろうか。
　いや、この渇望感はツインテール不足……ツインテール欠乏症とでも名付けるべきか。
　だが何な故ぜ、ツインテール成分が不足する……？　世界にツインテールが溢あふれる昨今、視覚的には十分補給できているはずだが……。
　こうして早朝の通学路を眺めるだけでも、ツインテールの子は結構いる。
　カメラの笑顔認識機能のように視界のツインテールをポインティングしていると、それぞれのお母さんに手を引かれて歩く二人の小さな女の子に行き当たった。
　そして、今朝はやけに静かだと思っていたトゥアールも、俺たちの一歩後ろから慈愛に満ちた目でその子たちを見つめていた。
「うふふふ……」
　あまりに愛が溢れすぎて、古式ゆかしい少女漫画のように瞳ひとみに星を煌きらめかせている。
「わー、みゅーちゃんもツインテールにしたんだー！」
「えへへ、ママにむすんでもらったの！　はやくあーちゃんみたいに、じぶんでできるようになりたいな！」
　陽よう月げつ学園の付属の幼稚園生の子かな？　並んで歩く二人の女の子は、互いのツインテールを褒ほめそやしている。微笑ほほえましい光景だ。
　あーちゃんと呼ばれていた子は自分で結んでいるらしいが、肩上に揺れるツインテールは子供ながらなかなか手慣れている。……テイルレッドのぬいぐるみ──お母さんのお手製だろうか──それを抱き締めてい

た。

「かわいいよ、みゅーちゃん！」

「ありがとー！」

　もう一人の女の子──みゅーちゃんと呼ばれていたな──その子はもう少し長めの髪で、察するに今日初めてツインテールにしたのだろう。

　結んであげたのは、彼女の隣を歩いているお母さんか。早く早くと急かされながら髪を梳すいてあげている微笑ましい光景が、俺の脳裏にありありと浮かぶ。

　左右でややずれているのは、お母さん自身はまだツインテールに慣れていないからだろう。ツインテールを結んでいるゴムも、少し緩めに見える。あともう一巻きくらいした方が、収まりがよくなるはずだ。

　だがその加減には、慣れなさよりも、娘さんへの深い愛情が見て取れる。

　ツインテール・プロファイリングにより浮かぶ母娘おやこの絆きずなに、俺は温かい気持ちになった。

「そーじ!!」

「はっ!?」

　愛あい香かに怒鳴られ、気をつけをして姿勢を正す。

「あんた今、トゥアールみたいな目だったわよ!!」

「何ッ!?　トゥアールみたいな目だって!?」

　夜空の星を局所的に再現した輝く瞳ひとみで、トゥアールが見つめてくる。

「お目々がペアルックですね総そう二じ様！」

　この邪悪を超越した聖なる瞳と似ていると言われれば動揺もやむなきことだが、嬉うれしそうにしているトゥアールに失礼なので黙っておく。

　反省して歩いている間も、その女の子たちの無邪気な会話は続く。

「レッドちゃんのおにんぎょうさんも、かわいいね！」
「うん、わたしね、大きくなったらテイルレッドになるの!!」
　あーちゃんが、元気よく宣言する。
「レッドちゃんって、わたしたちのなんさいくらいおねえさんなのかなー？」
　みゅーちゃんの疑問を受け、さらにあーちゃんが続けた。
「ツインテール、ながいもんね！　わたしもおなじくらいかみはのばすんだー！」
　お母さんと手を繋つないだまま、元気よく飛び跳ねるあーちゃん。
　彼女の夢に応こたえるように、ツインテールが可愛かわいらしく揺れた。

　目端はしに滲にじんだ涙がこそばゆく、俺は手の甲で力任せに拭ぬぐった。
　なれるさ……きっと。
　君が、ツインテールを愛する限り──。
　心の中でしか言えないのは歯は痒がゆいが……俺は、未来の後輩ヒーローにそっとエールを送る。
　疲れたとか、体調が悪いとか言ってられないぜ。これからも俺は、全てのツインテールを守るために戦っていくんだからな。
「…………」
　希望溢あふれるツインテールを見つめているうちに、また頭がぼーっとしてくる。

　──ツインテール触りたい……。

　再び脳裏を抑え難がたい衝動が掠かすめ、俺はぬぎぎっと歯を食いし

ばった。
　自分の手首に、頑丈な構造の手錠が三つも四つも重ねて塡はめられているイメージをする。
　律しろ……本能を、衝動を、理性で封じ込めるんだ!!
「…………」
　だが、手に枷かせをしても、足は止められない。
　俺は無意識のうちに、子供たちに吸い寄せられるように近付いていき――
「何やってんのよあんたはあああああああああああああああああああああ!!」
「はっ……ぐあだだだだだ!?」
　愛あい香かが肩の関節を砕かんばかりの勢いで羽交い締めにしてきたおかげで、正気に戻った。
「あぁ!?　また愛香さんは懲こりませんねえ、おっぱいないくせにおこがましい！　貧乳の羽交い締めなんて背もたれが柔らかくない分、ジェットコースターの安全バーにも劣りますよ!!」
「懲りなくてごめんなさいねえ……お詫びにコーヒーカップに乗せてあげるわ」
　トゥアールの両足首を脇わきに挟んで固定し、力任せにブン回す愛香。
「ぎゃおおあああああああ遠心力で内臓がフリーフォールあああああああああああああ!!」
　ほんの数度の始動回転でＭＡＸの回転速度に達する愛香のジャイアントスイングは、ヘリコプターのジャイロを思わせた。
「すまん愛香、助かった……。むしろ、俺はあのまま肩を砕かれるべきだったかもしれない」
「普通に押さえただけでしょ、大おお袈げ裟さに言わないの!!」

トゥアールの耐久力に慣れすぎて、力加減が際限なくなってきてる愛香もあるいはそうかもしれないが……とにかく俺は、自分の深刻さを痛感した。
疲れがツインテールの始源的な渇望に直結するなんて、どうしようもないな俺は……。
「愛香さんが暴れたせいで、あの子たちが早足で行っちゃったじゃないですか！　幼稚園帽の風ふ情ぜいもわからないアバズレはすっこんでいてください!!」
コーヒーカップと化してブロック塀に叩たたきつけられたはずのトゥアールが、早くも復活して愛香に詰め寄る。
通学路に突如としてグランドオープンしたのが、遊園地は遊園地でも人間遊園地じゃあ、お母さん方もそりゃ足早に立ち去るわなあ……。
「トゥアールはこの通り治療不可能だから放っておくとして、そーじ！　いくらツインテール好きだからって、超えちゃいけない一線ってもんがあるでしょ!!」
愛香の叱しつ責せきが身に染みる。ぐうの音も出ない。
「私に言わせれば、愛香さんの方が今日は変ですね」
トゥアールは肩をこきこきと鳴らしながら、不服そうに愛香を見つめた。
「何がよ」
「私を塀に叩たたきつける時、最後の最後で回転を殺しましたね？　技の派手な見た目ほどダメージがありません。手加減をするとは、どういう風の吹き回しですか」
トゥアールが叩きつけられたブロック塀を観察する。めっちゃヒビ割れてるんだが……乗用車が正面衝突したぐらい破損してるんだが……これが、手加減……？
「ブレザーの加護を再び胸に得て、気が緩みましたか？　心の胸までは

隠せませんよ」
「心にまで胸があってたまるかああああああああああああああああああああああああ!!」
「あっちょっと本調子かもごはああああああああああああああああああああああああ!!」
　もはや愛あい香かのバイオレンスに対するソムリエになりつつあるトゥアールに感動さえ覚えていると、通学路の途中で合流した慧え理り那なと桜さくら川がわ先生に声をかけられた。
「ごきげんよう。、観み束つか君、津つ辺べさん、トゥアールさん」
「観束……と、何だ、二人は朝からコーヒーカップか？　おはよう」
　後輩が道端でアトラクションを披露していても、高貴な笑顔は絶やさない。それどころか、二人が仲良くしているならば自分もと、慧理那はツインテールを掬すくい上げた。
「どうぞ、観束君」
　据すえツインテールを触らぬは男の恥。俺はありがたく慧理那の差し出したツインテールを手の平の上に乗せさせてもらい、結構なお点て前まえを賛さん嘆たんした。
　現金なもので、先ほどまでの疲労が大分和やわらいだように感じる。
　やはり原因はツインテール不足か……？　テイルレッドに変身して自分のツインテールを触り続ければ、永久機関が完成するだろうか。
　安らぎに身を委ゆだねていると、登校中の生徒たちが俺と慧理那に十人十色、悲ひ喜き交こもゞごも、様々な視線を向けながら通り過ぎていく。
　……いや、後ろで女の子がブロック塀にめり込んでいるんだけど。注目度で言えば確実にそちらの方が上のはずなのだが……。
「！　ちょっと会長！　おはよう！　急に何やってるの⁉」
　きちんと途中に挨あい拶さつを挟みつつも、愛香は体力ゲージが一メ

モリになったトゥアールを放って俺たちに駆け寄ってきた。
「観束君がツインテールを触りたそうでしたので、わたくしのツインテールを、と」
　心遣いをありがたく思っていると、朝顔の蔓つるが棒に巻き付くように、慧理那のツインテールのカールがいつの間にか俺の手首に巻き付いていた。
　……あ、あれ。普通に触っていただけのはずなのに。……そよ風さんのいたずらかな？
「さすが慧理那さん、ご主人様の望みを敏感に察知する犬スキルが増大していますね」
　ＫＯ寸前の体力ゲージーから瞬時に全快するという理不尽を見せるトゥアール。
「あたしだって知ってたわよ!!」
　桜川先生の姿が見えないと思って辺りを見回すと、後ろで神しん堂どう家のメイドさんたちに取り押さえられていた。桜さくら川がわ先生一人対大勢のメイドさんで、何とか膠こう着ちやくしている状態だ。
「観み束つかがツインテールを触りたそうにしてるじゃないか、私も……!!」
「そこはお嬢様に譲ってくださいメイド長！　いいですか、やるなとは言いません！　割り込みじゃなく前の人が終わってから誘惑！　社会のルールです!!」
「誘惑って何だー!!」
　女学生二人が大地を割り、メイドさんが乱闘を繰り広げる。
　元気なみんなとの対比で、余計に俺は自分に危機感を募つのらせていた。
　疲労と比例して増大する、ツインテールへの飢き餓が感かん。

一度、みんなの前で相談した方がいいかもしれないな……。

◇

悲嘆の先にあるもの──それは、絶望。

長き戦いの果てにビートルギルディが倒され、美の四心ビー・テイフル・ハートが壊滅したことで……総そう二じたちの世界に侵攻している混成アルティメギル部隊は、一度は撤退を決意した。

それほど彼らは、ツインテイルズとの戦いに勝機を見み出いだせず諦てい観かんに包まれていたのだ。

しかし、新たなる首領直属軍・死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが合流したことで、希望の光が見えた。

二度と怖おじ気けに巻かれたりはしないという誓いを拳こぶしに握り締め、彼らは再起したのだ。

だがこの世に、希望を抱いた直後に絶望を突きつけられるほど残酷なことが、他にあるだろうか。

再起した彼らを待ち受けていたのは、現世地獄とでもいうべき悪夢だった。

その悪夢の具現こそ、テイルブルー・エターナルチェイン。

パワーアップしたトリケラトップギルディ──オーガギルディとの激闘を、テイルブルーは辛からくも制した。その戦いにおいて、彼女もまたパワーアップを遂げてしまったのだ。

「映像は残っていない。何人も立ち入れぬ死闘であったのだろう。トリケラトップギルディ様が送られてきたのは……〝テイルブルーが恐るべき進化を遂げた〟……そして、〝我われらの能力を戦いの最中さなかに体得するまでに至った〟、その二つの情報だけだ」

スパロウギルディが切々と語る情報を、戦士たちは震ふるえながら聞

いていた。

　恐怖はびこるホール内でただ一体、威風堂々と玉座に座する戦士。さすがは帝王ティラノギルディ──戦と友もの敗報を、粛しゆく然ぜんと胸の裡うちに沈めている。

　映像も詳細な情報も無い理由は、オーガギルディの戦士としての矜きよう持じ。自分の迂う闊かつさにより異世界へと飛ばしてしまった愛あい香かに借りを返した形なのだが、そんな事情を何も知らないこの基地の戦士たちには、恐怖を助長させてしまう形となった。

　トリケラトップギルディほどの戦士が、今いま際わの際、指で床に血文字をしたためるかの如ごとく、「テイルブルーがパワーアップした」という情報だけしか送れなかった……今のテイルブルーは、それほどの強さなのだと……。

　戦闘力だけで見るなら、レッド、ブラック、イエローと順調に戦力増強を重ねる中、むしろ他のメンバーに水を開けられていたブルーがようやく追いついた。ただそれだけに過ぎない。

　だが、恐怖とは、相手の単純な戦闘力のみでもたらされるものではない。

　テイルブルーの恐ろしさは、戦闘力ではなくその凶悪さであることは、周知の事実。

　かつてダークグラスパーはアルティメギルに闇やみの処刑人として君臨していたが、彼らにとってはテイルブルーこそが畏い怖ふすべき処刑人エグゼキューターなのだ。

「進化したテイルブルーの想像図を映す」

　スパロウギルディが、部下のエレメリアンに操作を指示する。そのエレメリアンは深々と頷うなずきはしたものの、ボタンに添えた指が動かない。

「くっ……動け！　動くのだ、俺の腕よ!!」

　エレメリアンは己おのが不ふ甲が斐いなさを嘆くように肩を震ふるわせ、ゆっくりと膝ひざをついてしまった。
　気持ちが痛いほどわかるのだろう。忸じく怩じたる思いを面おもてに滲にじませ、スパロウギルディが代わりにモニターの映像を切り替える。
「「「ひっ……」」」
　とうとう憚はばかることなく、ホール内の戦士たちは悲鳴を上げ始めた。
　想像図──イラストで描かれたテイルブルーは、皮肉にも彼女を打倒するためかつてビートルギルディの指示で始めたＣＧ修行で構築されたテクニックが遺憾なく発揮され、ハイクオリティで再現描写されていた。
　それはまさに、絶望の化身。
　暴走時のように目を紅あかく血走らせ、吊つり上がった口角からは鋭い牙きばが覗のぞく。
　長いツインテールは角のように逆立ち、全身の装そう甲こうからは地獄の針山を思わせる鋭利な棘とげが無数に屹きつ立りつしている。それでいて、胸は引き続き小さい。
　テイルブルーが、ぎりぎり保っていた人の範はん疇ちゅうをついに超越してしまったのだ。
「…………」
　帝王っぽさを演出するためわざわざホール内に用意させた玉座にどっかと腰を下ろしたまま、腕組みをしてモニターを見つめるティラノギルディ。
　畏れ多くもその巨大すぎる玉座を邪じや魔まに思っていた戦士たちも、その剛胆さを目まの当たりにしては悲鳴を止めようというものだ。
　不ふ遜そんと余裕に彩いろどられた帝王の口元から、ぼそりと呟つぶやきが漏もれた。

「………………………怖いよう……」

　静まり返ったホール内では、溜ため息いきでさえも響く。何かの間違いかと、近くに座っていたエレメリアンが思わずティラノギルディに呼びかけた。
「ティラノギルディ様……？」
　部下たちの声にはっと我われに返り、ティラノギルディはやおら立ち上がるとその豪腕を振りかぶった。
「ディユリァ──────────────────ッ!!」
　でやあ、なのか、Ｄｅａｒ百ゆ合りなのか──ともあれ独特の掛け声ではあったが、その裂れつ帛ぱくの気合いは葬式ムードで消沈する戦士たちの横よこ頬ほおを平手で張るかのように、ホールを激しく震ふるわせた。ティラノギルディが突き出した拳こぶしの風圧で、テイルブルーを映していたモニターの中心に大穴が空く。
「フッ……見よ、テイルブルーのあの憐あわれな胸を」
　握り拳から親指だけを突き出し、モニターを指し示すティラノギルディ。
　彼が放った拳けん圧あつは、過あやまたずテイルブルーの胸部を穿うがち貫いていた。
「ああして胸が虫食いになっても、まるで変わって見えぬ。いささかの支障もない！　その程度の存在ではないか、テイルブルーは！　何を恐れておるか、貴様らも存分に笑え！　うわっはっはっはっはっはっは!!」
「しかし、ティラノギルディ様……〝あの〟テイルブルーが、パワーアップしてしまったのでございます……」
　精一杯の勇気で部下のエレメリアンが進言するも、ティラノギルディ

は涼しい顔で返した。
「それがどうした？」
　──この隊長は、本当に空気が読めない……。
　高笑いをするティラノギルディの背後で、破損したモニターがバチッと大きな音を立てて火花を散らした。ビクリと肩を竦すくませて振り返るティラノギルディ。
「…………す、すいませんテイルブルーさん……」
　部下の視線が突き刺さるのを感じ、ゲフン、と咳せき払ばらいをすると、ティラノギルディは殊こと更さらに大声を張り上げた。
「俺はテイルブルーなど恐れぬ！　何な故ぜなら、テイルブルーも乙女なのだからな！」
　ほんの六秒前に零こぼした囁ささやきなど白亜紀の彼方かなたに置き忘れ、ティラノギルディは力強く拳こぶしを握り締めた。
「乙女ならば誰だれもが百合になれる！　たとえどれほど胸が小さかろうと、どれほど凶悪な修羅であろうともだ!!」
　修羅をも百合に誘いざなうその度量。
　部下たちは、不器用にも高らかに声をあげる彼の心中を慮おもんぱかった。
　右牙ライトフアングの副将プテラギルディに続き、左牙レフトフアングの副将にしてティラノギルディの盟友であり最大の理解者だったトリケラトップギルディが倒された。今、一番消沈したいのは彼のはずだ。
　戦友との友情にかけて、仇かたきであるテイルブルーを恐れることなどできないのだろう。
「俺がツインテイルズ同士でちゅーをさせよと命じている理由、腑ふ抜ぬけの貴様らでも理解できたであろう！　崇高なる百ゆ合りを以もつて、恐れは士気へと裏返るのだ!!」
　部下たちの沈黙を是と受け取り、ティラノギルディは再び玉座に腰を

下ろした。
「この俺自ら発破をかけてくれる。戦闘員アルテイロイドども、セットを用意せよ!!」
　こんな時でも元気よくモケー、と返事をし、戦闘員アルテイロイドたちがティラノギルディの周りで何やら準備を始めた。ビデオカメラ、三脚、レフ板──。そして、玉座の背後にはものものしい背景が描かれた衝つい立たてが。撮影の支し度たくを調ととのえていることが次第にわかり始める。
「メインライトはあと五ミリ左に傾けよ。そうだ、この牙きばがよおく輝いて見えるようにな!!」
　ティラノギルディは戦闘員アルテイロイドに細かく調光の指示を出しながら、ホールのエレメリアンたちへの説明も続けた。
「よいか。かつてダークグラスパーがアイドル活動を以て眼鏡属性グラスの拡散に尽力したように、我われらもこれよりは頭を使って動かねばならぬ！　いまこそ革新の時だ!!」
「ティラノギルディ様──」
　唐突に改革を宣言するトップ……組織が瓦が解かいする黄金パターンを打ち出されたことに危機感を抱いだいたのか、思わず呼びかけるスパロウギルディ。しかし、二の句が継げない。
　ティラノギルディの言わんとすることを悟り、一体のエレメリアンが慌てて立ち上がった。
「我ら武人に策を弄ろうせと仰おつしやるのですか⁉」
「おお、そうだ！　存分と弄するのだ!!」
　刃やいばのような眼光を射返され、そのエレメリアンは腰を抜かすように座り直した。
「小娘一匹に怯おびえ縮こまっている腰抜けどもが武人を名乗るとは、片腹痛い！　貴様らは小こ賢ざかしく立ち回るが分相応よ!!」

　何も言い返せず、黙りこくる戦士たち。その通りだ。そして、戦果を挙げずこれからも玉砕を続けるだけでは、それこそ散っていった上官や仲間たちに申し訳が立たない。

　脚を組み、ポーズを整えたティラノギルディ。あ、あ、と軽く発声練習をし、カメラに向かって唐突に語りかけた。

「人間どもよ……」

「モケッ」

　まだカメラが回っていない、とジェスチャーする戦闘員アルテイロイド。

「違う、テストだ。帝王のスピーチには、ただの一ひと噛かみも許されぬのだからな！　人間どもよ……俺の名はティラノギルティ……あっ」

　自分の名前さえ噛むティラノギルディに一抹の不安を覚えながらも、エレメリアンたちは帝王の晴れ姿を固かた唾ずを呑のんで見守っていた。

◇

「というわけで、今日のツインテール部の活動は、最近そーじが変になってきてることについての話し合いです」

　その日の放課後。ツインテール部部室で、愛あい香かは唐突にそんなことを口にした。

　ここで会議をするにしてもだいたい議題提示はトゥアールなので、何気に珍しい光景だ。

　トゥアール、慧え理り那な、そして桜さくら川がわ先生は疑問符を浮かべている。だが、朝のこともあって悩んでいた俺にとっては、よくも悪くもタイムリーなテーマだった。

　まさか、俺からみんなに相談する前に、愛香が議題に挙げてしまうとは……。
「唐突だな、津つ辺べ。観み束つかはいつも通りツインテールのことだけ考えてるように見えるが」
　全員分のお茶を準備しながら、桜川先生はそんな風にフォローした。
　愛香もホワイトボードに箇条書きで要点を書きながら、議題提起を続ける。
「ここ最近ずっとだるそうだし……疲れて頭が回らなくなって、より思考がツインテールに直結してるみたいなんです」
「うーむ。確かに最近、観束は疲れが取れていないようだが」
　桜川先生までそう感じていたのか。やっぱかなり顔に出てんのかな、俺……。
「今朝なんて、道歩いているツインテールの女の子の傍そばまでフラフラって歩いて行ったのよ！　ここでちゃんと治しておかないと‼」
　ホワイトボードに書かれた〝治す〟の文字が強調フキダシで囲まれる。病気か……。
　間かん髪はつ容いれずにトゥアールが反撃した。
「はい！　早速異議ありです！　小ちっちゃい子を見て目尻が下がるなんて、生物として当然の反応じゃないですか！」
「……こうなっちゃうと手遅れなんで！」
　トゥアールをボードペンで指し示しながら、慧理那と桜川先生に同意を求める愛香。
「果たしてそうでしょうか？　議題として緊急性を要するのは総そう二じ様ではありません。愛香さんです……！」
「なんであたしなのよ⁉」
「いい機会だから慧理那さんたちにも聞いてみましょう。過去世界から帰還してからというもの、愛香さんはどうにも腑ふ抜ぬけてしまってい

ると思えませんか？」
　何となく面白くなさそうに、頬ほお杖づえをついて愛香を糾弾するトゥアール。
　今朝の登校中にもそう言っていたが、よっぽど気になっているようだ。
「まだ言ってるのあんた？　腑ふ抜ぬけるどころか調子いいわよ、あたしは」
　音を立てずにティーカップをソーサーに置く慧え理り那な。まじまじと愛あい香かを見つめ、嬉うれしそうに微笑ほほえんだ。
「津つ辺べさんとトゥアールさんは、いつも通り仲良くされているように見えますわ」
　薄笑いを浮かべて立ち上がるトゥアール。
　つかつかと俺の背後まで歩いてくると、俺の手をわっしと摑つかみ──
「突然のおっぱい!!」
　そのまま自分の豊かな胸へと埋うずめさせた。
「うおわあっ!?」
「何してんのよ痴ち女じよが────────────────ッ!!」
　俺が手を引っこめようとするよりも先に、飛びかかってきた愛香がトゥアールをアッパーカットで打ち上げる。
　だが、いつもなら天てん井じようように頭から埋まって収穫間近のヘチマのように揺れるはずのトゥアールが、天井に両手をついて、肘ひじのクッションで激突を回避。むしろ勢いを倍加させて反転し、床に着地すると、誇らしげに白衣を翻ひるがえした。
　スローモーションでじっくり見直したいキレッキレの体術を目の当たりにし、慧理那が拍手を送る。
「ほら、何ですかその雑ざ魚こパンチは。そんなんじゃせいぜい車のフロントガラスブチ抜くのが関の山ですよ!!」

……女の子が自動車のフロントガラスを素手でブチ抜いても賞賛してもらえないのか……。これからの格闘技界の水準は、大幅に底上げされてしまいそうだな。
「あんたがアホみたく耐性ついてきてるだけじゃないの⁉　あたしは普通に空まで届けって念を込めて殴なぐってるわよ‼」
　そしてこの返し。何かが……何かがおかしい。二人のガールズトークは……。
「以前なら私が総そう二じ様の後ろに立った時点で警戒していたはずです。明らかに愛香さんは気が緩んでいます」
「そんな、大統領のＳＰじゃあるまいし四六時中気を張ってどーすんだ俺に……」
「でも、総二様も見抜いてらっしゃるでしょう？　愛香さんの打撃が精彩を欠いているのを」
　まあ確かに……疲れているであろうことを除外しても、あくまで他の女の子と比較をしないという前提で考えれば──最近の愛香のトゥアールへの突っ込みには、翳かげりが見える。
　条件反射で拳こぶしを繰り出した刹せつ那な、意識がギリギリで追いつき、トゥアールに着弾するコンマ数秒前に力を弱める……愛香は、努めてトゥアールに手加減しようとしているんだ。
　素直に口にはしないけど、時間移動の一件でトゥアールに感謝してるからじゃないかな。
「ツインテイルズにはそれぞれ役割があるはずです。テイルブルーの使命は、エレメリアンに恐怖を植え付けて侵略頻ひん度どを抑止すること！　テイルブルーが殺気を錆さび付かせたと悟られれば、その分出現するエレメリアンも増えるかも知れないんですよ‼」
「増えたら増えたで、片かたっ端ぱしからブッ飛ばしてけばいいでしょ」

　自分の席に戻り、拳こぶしの具合を確かめるように握ったり開いたりを繰り返す愛あい香か。
　ノータイムでこの回答が出る時点で、全く錆び付いてるとは思えないんだが……。
　そもそも、テイルブルーはいつからそんな使命を帯びていたんだ。
「とにかくそーじ。見ず知らずの人のツインテール、触ろうとしちゃ駄目だからね」
　愛香は頬ほおを赤らめて口を尖とがらせ、ちらちらと俺に視線を投げかけてきた。
「ツインテールを触りたくなったら、あたしのを触れっていつも言ってるでしょ。へ、変に遠慮されて、そーじが犯罪に走る方が困るし……」
　気持ちはありがたいが、だからといってずっと愛香のツインテールに触れ続けているわけにもいかない。俺が心をもっと強く持たなければ。結局はこの結論しかないよな……。
「ええ、遠慮しないでくださいね。わたくしのツインテールは自分のものと思って」
「そうだぞ観み束つか。別にツインテールを触るぐらい、許可なんて取らなくていい。触って気分が紛まぎれるなら私のも触れ。そして私はお前に婚こん姻いん届とどけを渡す……真っ当な流通システムだ」
　知らぬ間に流通革命を起こしている桜さくら川がわ先生はともかく、二人の気遣いが身に染みる。
　慧え理り那なと桜川先生の追随に、愛香の口調から見る見る勢いが消えていく。
「え、ええとね、あんまり分散はしないで、一極集中……した方が……いいかなって……」
　ホワイトボードに記された箇条書きと愛香とを交互に見比べ、トゥアールは顎あごにＬ字に伸ばした指を添えた。

「はっは――――――――ん会議だ何だと遠回りしましたが、要は自分の欲求不満を総そう二じ様に転てん嫁かしようとしているだけじゃないですか、愛香さんは!!」
「欲求不満になってんのはあんたでしょうが！　そんなに手加減されて不満なら全力でブン殴なぐってやるわよ!!」
「私はその性せい癖へきじゃありませんと何度言えおあああああああああああああああああ!!」
　転嫁というより愛香の闘争本能に点火してしまったトゥアールが、繰り出される連続技に跳はね上げられていく。
　技の間かん隙げきに、「やっぱりまだ何か違うなあ」と真顔で思案するトゥアールが垣かい間ま見えるのだが……。俺は、トゥアールが強くなりすぎているという愛香の意見の方に分があると思う。
　過去に飛ばされた愛香をトゥアールが懸命に助けようとした一件で、だいぶ距離が近くなったと思っていたけど……やっぱりいつもの二人だ。
　もっとも、ずっと前から、もう詰めようがないほど距離は近かったのかもしれないな。
「まあ、観束にしろ、津つ辺べにしろ、自分では何とも思わなくても疲れているということは充分にありえるんだ。あまり無理をするんじゃないぞ」
　桜さくら川がわ先生が大人らしいまとめで場を収める。
「わかりました」
「気を……つけ……ます！」
　俺に続き、トゥアールを攻撃する合間に返事をする愛あい香か。
　俺たちも子供じゃないんだ、周りに心配をかけないよう、自己責任で体調を管理しなきゃいけないということだな。
「ちなみに転てん嫁かという字は、嫁に転じると書くんだぞ、観み束つ

か」
「それはちょっとわかりません」
　慧え理り那なは、自分の後ろに控える桜川先生を頼もしげに見つめた。
「観束君、津つ辺べさん。もし疲れた時は、これからは尊みことも変身できるのですから。無理をなさらないでくださいね」
　ぐったりとしたトゥアールを席に放り捨てる愛香。
「そうだ……桜川先生。改めて、ありがとうございました。あたしの代わりに戦ってくれて」
　愛香は、姉の恋れん香かさんに正体を勘付かれそうになったことがきっかけで、一時桜川先生にテイルブルーの代打を頼んだ。桜川先生が変身できたことは意外だが……ともあれ、桜川先生はしばしの間、もう一人のテイルブルー……アナザーテイルブルーとして活躍したのだ。
「うむ。お姉さんに正体がバレそうなのはもう大丈夫そうか？」
「はい、もうすっかりテイルブルーのことは頭にないみたいで……まあ、近いうちに別の話し合いが必要ですけど」
　そういえば、恋香さんも自分がツインテールにしたのを見て愛香が何な故ぜかショックを受けたことについて悩んでいたけど、それも姉妹で話し合って解決したのかな？
　二人の会話を聞いた慧理那は自分のテイルブレスを可視化させると、桜川先生の腕に抱きついた。
「尊！　今度はアナザーテイルイエローになりましょう！」
「……そ、そうですか……」
　否定も肯定もできず、苦笑する桜川先生。
「観束君さえよろしければ、アナザーテイルレッドにも……！」
　賛同……しようとして、俺は言葉を呑のんだ。
「……ありがとう、慧理那。でもこのブレスはもう俺と一心同体だか

ら……たとえ戦えないくらい弱っても、手放せないんだ」
　ブルーやイエローのブレスは違うというわけじゃないが、これはトゥアールが俺に託してくれた魂たましいだ。洋服を貸し借りするみたいな気軽さでは預けられない。
「そうですわね。すみません……トゥアールさんがどんな思いで託されたか聞いていましたのに、わたくしったら……」
「いや、でも慧え理り那なの言うとおり、もしもの時に桜さくら川がわ先生が戦ってくれるって思えば、何より心強いよ」
　もちろん、これ以上桜川先生に迷惑をかけるつもりはないが……万一の時に交代要員がいてくれると思えば、みんなの精神的負担は軽くなる。
　さりげなく窺うかがうと、何な故ぜかトゥアールが頰ほおを赤らめていた。
「……お嬢様、私もテイルレッドになるのだけは……。あの格好をして戦えば一般人にどれだけ抗議を受けるか、容易に想像がつきます」
　ははは、と和なごやかな笑いが起きる。
　椅い子すに座って回復に全力を傾けていたトゥアールが、桜川先生に真顔で忠告した。
「尊みことさん、アナザーテイルイエローも危険性はあります。万一脱ぎ癖ぐせがギアに蓄積されていたら……二九歳アラサーの脱衣なんて、テイルレッドの格好とはまた別の意味で放送禁止です」
　ははは、と一人乾いた笑いを浮かべ、桜川先生は俺に婚こん姻いん届とどけを連射してきた。
　桜川先生の代わりにとばかりに、愛あい香かがトゥアールに手刀を連射する。
　しばらくみんなのやりとりを見ていると、俺の制服のポケットでトゥアルフォンが震ふるえる。

「それ、イースナ専用のバイブですね。……言葉にすると何かエロいです」
　トゥアールが震え方だけで送信主を見抜く。着信量が多すぎるので、トゥアールがイースナからのメールは数十通に一回にまとめて通知されるよう機能を更新してくれたのだ。
　トゥアルフォンを取り出し、最新のメールだけを閲覧する。
「……えーと、今日予定してた仕事がキャンセルになって時間ができたから、部室と基地のどっちに行けばいいかだって」
　要点はそれだけのはずなのに、際限なく着信していく。
　メール未読数を表すアイコン上の数字がストップウォッチのように増えていくのが恐ろしくなり、俺はトゥアルフォンをポケットに仕舞った。
　トゥアールは、ふむ、と頷うなずくと、
「総そう二じ様。イースナには地下基地に来るよう伝えてください」
　珍しくイースナへの返答を指示してくれた。いつもはイースナに予定を聞かれても有う耶や無む耶やにしているが、どの道地下基地には侵入しようとするので、観念したのだろうか。
「今日はエレメリアンも現れないようですし……いい機会です。ツインテイルズの現状を把握しておきましょう、全員で」

◇

　帰宅して地下基地に集まったツインテール部一同。程なくイースナも到着した後、トゥアールに変身を促うながされる。
　説明もそこそこに転送ゲートから向かった先は──見覚えのある場所だった。
「あ、ここは……！」

「ええ、思い出の場所ですわ!!」
　思わず声を上げる俺に、イエローが嬉うれしそうに答える。
　慧え理り那ながイエローとして完全に目覚めた特訓の地……使用されていない採掘場だ。
　俺──テイルレッドと、ブルー、イエロー、ブラック、そしてメガ・ネが、四方を岩壁に囲まれた窪くぼ地ちの中心に並んで立つ。
　俺たちから離れた場所では母さんと桜さくら川がわ先生、トゥアールが待機している。
　ツインテイルズのフルメンバーでここにやってきた理由を、トゥアールが仮面ツインテールのマスクをつけながら俺たちに通信してくる。
『先日テイルブルーがエターナルチェインへ進化したことで、ツインテイルズは全員パワーアップを遂げました』
　トゥアールに目線を送られ、ブルーが頷うなずく。
『イースナがブラックとして加入した後は少し戦力分析がおざなりになっていましたので、この機会にあらためて現状をしっかり把握しておこうかと』
　なるほど、そういえば戦闘以外でこうして変身した俺たちが勢揃いするなんて、久しくなかったもんな。
『それとこの採掘場、神しん堂どう家の私有地になったということですので、前以上に遠慮なく暴れていいそうです。慧理那さんに聞いてから、虎こ視し眈たん々たんと機会を窺うかがっていました！』
「ホントか、イエロー!?」
　イエローは照れくさそうに頷いた。
「ここが初めて観み束つか君をご主人様と呼んだ思い出の場所だとお母様に明かしたら、是非に、と……」
　この辺一帯、丸々買い上げたってことか……。トゥアールも大概金銭感覚がブッ飛んでるけど、神堂家もスケールが違うな。

　理事長はツインテイルズの活動を知ってからも、母さんのように地下基地に来ることはないし、色々と詮索をしてもこなかった。忙しい人だし、むしろツインテイルズとは距離を置きたいのかとも思ったけど、ちゃんと娘の活躍を見守ってくれているってことだよな……！

　つむじ風の舞う採掘場に並び立つツインテイルズ。
　録画しているようだし、あとで映像を見せてもらおう。絶対に絵になるぞ。
　イエローも……うん、同じことを考えているみたいだな。ツインテールを見ればわかる。
『まずは基本の五人……。テイルレッド、ブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネさん』
　……メガ・ネのこともさん付けで呼ぶようになったのか。イースナ以外みんなさん付けだな、トゥアールは……。俺なんていつまで経っても様付けのままだし。
　結局愛あい香かを呼び捨てにしたのも一度だけで、さん付けに戻ってるしな……。なんか、すごくいいな、って思ったんだけど。照れくさいのかな。
『この五人が、今のツインテイルズの主戦力です』
　トゥアールの通信を受け、俺たちは互いを見やった。
『そして、先の一連の戦いで、サブメンバーとして尊みことさんも変身できることがわかりました』
『まあ、あくまで補欠としてな』
　いつの間にか緑の仮面ツインテールのマスクをかぶり、仮面ツインテール二号となった桜さくら川がわ先生が補足する。
　今日は一番使用頻ひん度どの高い銀と白のマスクをしている仮面ツインテール一号、トゥアール。

　さらにその隣にいる母さんは、当然のようにいつもの女幹部コス。
　仮面、仮面、コスプレ。
　……どうしよう、岸壁をバックに立つあの三人のシュールさは尋常じゃないぞ。
『今までぶっつけ本番でコンビネーションを発揮してきましたが、今後戦いはもっと厳しくなっていくはずです。仲間の戦力を知り、いざという時に活いかせるようにしましょう！』
　続けて俺たちは、それぞれの強化変身を見せていくことにする。
「まずは俺だな……。プログレスバレッター‼」
　プログレスバレッターをフォースリヴォンに合体させる。
　攻撃特化の強化形態、ライザーチェインと、速度特化の強化形態、フォーラーチェインを続けてそれぞれ披露する。もっとも、パワーアップは俺が一番最初だったから、このメンバーもそれなりに見慣れているだろう。
　ちなみにフォーラーチェインはただ立っているとツインテールが地面についてしまう。戦闘時のように常に動き続けるわけにはいかないので、代替措置として自分で毛先を手に持った。
　次はブラックの番だ。
「よし、ゆくぞメガ・ネ！」
「ＯＫ、インフィニットコンバインやな！」
　神ゴツド眼め鏡がねのフレームをブラックがなぞると、インフィニットシステムが発動。
「恋人と互いの母が揃ったいい機会じゃ！　総そう二じの母君にわらわたちをアピールせねば‼」
「おかんか、ウチ⁉」
　珍しいパターンのボケツッコミを見せつつメガ・ネのボディが分割し、イースナのグラスギアへと次々に合体していく。

　二人の絆きずなが生み出した姿、テイルブラック・インフィニティチェインの完成だ。
　俺はツインテールを結び直し、基本中結形態ノーマルチエインにチェンジする。
　イエローが待っていましたとばかりに手を挙げる。
「次はわたくしが！　アブソリュートリング!!」
　イエローが黄金に輝く首輪を取り出し、表情をとろけさせながら自らの首に装着した。イエローにガン見されながら俺はツインテールを結び直し、ライザーチェインにチェンジする。
　イエローの全身が激しいスパークに包まれ、テイルギアが加積変形していく。
　ツインテイルズ最強の火力を誇る超重爆撃戦士、テイルイエロー・アブソリュートチェインの完成だ。
　俺はツインテールを結び直し、基本中結形態ノーマルチエインにチェンジする。
　訝いぶかしげに俺の変身を見ていたブルーだが、順番が来て露骨に嫌そうな顔で名乗り出た。
「んじゃ、最後はあたしね……」
　まだ不慣れなのだろう──ブルーは手探りをするように両手をぶんぶんと振り、何とか先日手にした進化装備エヴォルブアームズを出現させることができた。
「えーと……エターナルパッド!!」
　胸パッド型のデバイスを、素早く胸のアンダースーツの隙すき間まからスロットインする。
　瞬間、ブルーのテイルギアから蒼あおき閃せん光こうが迸ほとばしる。
　全身にブレードを搭載し、さらに攻撃的なフォルムへと変へん貌ぼう

したブルーの最強形態、テイルブルー・エターナルチェインが降臨した。
　俺はツインテールを結び直し、フォーラーチェインにチェンジする。
「さっきからポンポン変わって忙せわしないわよレッド⁉」
「仕方ないだろ二二秒しか変身が保もたないんだから！」
　とうとうブルーに突っ込まれてしまった。全員順番に並び立とうとすると、時間制限のある俺はこのように頻繁にチェンジを繰り返す必要が出てくるのだ。
『いや～壮観ねえ、パワーアップしたツインテイルズ揃い踏み！　もう向かう所敵無しって感じじゃない⁉』
　遠くで見物している母さんが歓声を上げる。
　トゥアールと桜さくら川がわ先生と違い仮面ツインテールのマスクをしていないので、小型通信機をもらっているのだ。……俺の母さん、超科学デバイス使いこなしすぎだろ……。
　ブラックはエターナルパッドが融合装着されたブルーの胸に、哀れみの視線を投げかけた。
「………………戦闘中に乳ポジを直さなければいかんとは、難儀な最強変身チエインエヴオルブじゃのう……」
「別に胸の位置なんて直してないっての‼」
『そうです、口を慎つつしみなさいイースナ。この採掘場の広大な地面と互角のフラットパーセンテージを誇る胸に、直すべきポジショニングは皆かい無むです！　愛あい香かさんに失礼ですよ‼』
「あんたがね……‼」
　体操服属性ブルマの反重力で巨大な岩石が勢いよく打ち出され、的確にトゥアールだけを巻き込んでそのまま転がり続ける。エターナルチェインはこのようにノータイムで属性玉変換機構エレメリーションを使用できるのが大きな強みだ。

――――――、という絶叫が採掘場にはよく反響する。
　トゥアールがマスク越しに、またもや不満そうな顔をしている。俺は、愛あい香かがトゥアールに手加減をするようになったのは、愛香なりの不器用な感謝なのだと思っていたが――
「……ブルー……」
　原因がそれだけでなく、手加減をせざるを得ない状況にある、としたら。
　考えすぎかもしれないが、ふと気になった。
「おのれ蛮族、またもやトゥアールにあんな仕打ちを!!」
　ブラックは神ゴッド眼め鏡がねのブリッジを指で押し上げ、ブルーへと向き直った。
「……そうじゃ。戦力を測るならば手っ取り早い方法があるぞ、トゥアール」
　提案には答えられず、大岩に巻き込まれたトゥアールはまだ転がっている。
「いつぞやの約束……忘れてはおるまい、ブルー？」
　ブリッジから指を離すと、闇やみの大おお鎌がま・ダークネスグレイブが出現。華麗に一いつ旋せんさせたあと、挑発するようにその刃やいばをブルーへと向けた。
「貴様がパワーアップするまで待ってやったのじゃ……。わらわと貴様、どちらが強いか、ここで決着を着けようではないか。もう誰だれも止めはすまい」
　いや進化するなんて絶対事前にわかってなかっただろ。
　ちらりとブルーを窺うかがうと、当然のように不敵に笑っていた。
「あたしは最初からＯＫしてるじゃない、殴なぐり合お、って」
　……俺の周りの女子は何な故ぜみんなこうも好戦的なんだ……。
「今の二人の力で戦ったら洒落しやれにならないぞ、止めよう、イエ

ロー」
「今度こそ加入イベントですわ！　信念を懸けて戦い、二人は分かり合うのです!!」
　イエローは目を輝かせて二人を見守っていた。
　うーむ、喧けん嘩かなら止めるけどこういう体ていでならＯＫなんだもんな、慧え理り那なは……。
「…………む」
　ブラックはブルーをしげしげと見つめ、再び神ゴツド眼め鏡がねのブリッジを押し上げた。
「いや、やはりもう少し待ってやろう。まだ最強変身チエインエヴオルブに不慣れだったと負け惜しみを言われては困るからのう」
「どっちなのよあんたは!!」
　……何だ、妙に唐突に引っ込んだな、ブラック……。
　ブラックの神ゴツド眼め鏡がねは全てを見通すとの触れ込みだが、何か発見でもしたんだろうか……。
「ところでレッド」
　揃い踏みは果たしたので俺は一足先に形態変化チエインカスタムを解除していたが、先ほどの早変わりを見てブラックは気になっていたようだ。
「その姿になってから随分と経たつじゃろうに、未いまだに時間制限の弱点は改善されぬのか？」
「弱点っていうか、これは仕様だからな。慣れたら制限時間が延びるわけでもないし」
「しかし、これからさらなる強敵を相手にしていく中、二二秒では心こころ許もとないぞ。わらわを助けてくれた時のように、限界暴走オーバーロードしてしまったらと思うと……胸が切ないのじゃ……」
　その時の抱ほう擁ようを再現するかのように、ブラックが俺の顔を自

分の胸へと抱き込んだ。
　実際に制限時間を越えた限界暴走オーバーロードを目まの当たりにし、リスクを実感してしまったからこそ不安も大きいのかもしれない。
……ところで。
〈イースナちゃん、合体したままレッドちゃん抱き締めると……〉
　うん、ブラックの胸に合体しているメガ・ネの頭が、俺の頬ほおに当たる。
「何じゃメガ・ネ！　レッドとちゅーする気か!!」
〈何やこの理不尽!?　ほんまにしたろか!?〉
『ブルー！　そこの胸と一緒に股も切なくしている小娘を止めてください!!』
　トゥアールの指示にやけに素直に従い突進してくるブルーを、ひらりとかわすブラック。
「でもまあ、そうだな……」
　この制約は当然のものとして受け容いれて、如い何かに時間制限の中で立ち回るかに重きを置いてきたけど……何か対策は考えておいた方がいいのかもしれない。
　さらなる強敵、か……。俺の脳裏を過よぎったのは、テイルギアＴＹＰＥ-Ｐを装着したポニーテールの少女。フェニックスギルディの最終闘体、結いわ翼ばね唯ゆ乃のだった。

　イエローとブルーは、トゥアールの提案で属性玉エレメーラオーブを試していた。
「ブルーがエターナルチェインになっていても、わたくしは普通に属性玉エレメーラオーブを使えますわね」
「でもイエロー、もうそれだけ全身の武装が強くなったら必要ないでしょ……」

　属性玉エレメーラオーブを瞬間発動できるだけで全て取り込んでいるわけではないようで、エターナルチェインに進化している間も、他のツインテイルズも属性玉エレメーラオーブを使えるのは変わらないようだ。
　全身に七つの属性玉変換機構エレメリーションを備えたエターナルチェインは、属性玉エレメーラオーブの使用に特化したテクニカルバトルの頂上型だ。当然、そこを突き詰めて分析しておく必要があるのだろう。
『アー、ソウダー、属性玉エレメーラオーブを完かん璧ぺきに使いこなせるエターナルチェインなら、今まで使えなかった巨乳属性ラージバストとかも使えるんじゃないですかネー』
　通信機の故障を疑いかねない棒読みで、ブルーを煽あおるトゥアール。
「それよトゥアール！　この姿なら使えるはず……！　巨乳属性ラージバスト!!」
　一旦属性玉エレメーラオーブを取り出して再装そう塡てんするという、属性玉変換機構エレメリーション特有のアクションがパワーアップ後には不要になるため、発動の可否が分かりづらいのだが……巨乳属性ラージバストの効果である弾性を備えた防壁が出現しないということは、引き続きブルーには使えないままのようだ。
「使えないの!?　あたし何のためにパワーアップしたのよ!!」
　巨乳のためにパワーアップしたのか……!?
　どこまで成長しても、巨乳はその先へと逃げていく。進化の果てになお巨乳に拒絶され、ブルーはがっくりと膝ひざをついた。不ふ憫びんに思ったのか、桜さくら川がわ先生が通信で話題を逸そらす。
『津つ辺べ、あれはどうだ。私は使えたぞ、母属性マザー』
「そ、そうだ、あれも苦手だったんだった……せめてこっちは！　──母

属性マザー！」
　高速化をもたらす属性玉エレメーラオーブ、母属性マザーを発動するブルー。今までなら相性からか能力に振り回されていたが、巨乳という呪のろいレベルの拒絶と違い、さすがにこっちは──
「ギャ────────────────────ス!!」
「何っ……ブルーがギャースだと!?」
　よほど混乱しているのか、普段ならトゥアールが上げそうな叫び声と共に、ブルーが採掘場の地面を全身で擦こすって滑走してゆく。
　属性玉エレメーラオーブの相性は、最強変身チエインエヴオルブを以もつてしてもそう簡単には補えないということか……。
『ゲハハハハハハハハ、凹おう凸とつがないから俯うつぶせだと綺き麗れいに滑りますね……ってこっちこないでくださのおおおおおおおお!!』
　トゥアールというたった一本のピンをストライクするブルー。
「エターナルチェインも、完全無欠ってわけじゃないみたいだな」
　次の戦闘前に弱点を列挙できたのだ、今日のトゥアールの提案は大正解だった。
「別の属性玉エレメーラオーブと組み合わせて使えば、相性の問題をクリアできるかもしれませんわね。今のブルーなら」
　早速解決方法を模索しているイエローは、さすがだ。
「そうじゃドM、パワーアップを解除してちょっと脱いでくれんか？」
　ダイレクトすぎる呼称でイエローを誘うブラック。
「え？　そう言われましても……よろしいですか？　ご主人様」
　俺に同意を求めてくるイエロー。トゥアールが通信で声を震ふるわせた。
『……イースナ……次はイエローに目移りですか!?　回転率早すぎますよ!?』

「違ーう！　メガ・ネ、わらわたちも合体解除じゃ」
　ブラックはメガ・ネと分離し、ブルーとイエローにもパワーアップの解除を提案した。
「お前たち、武器を合体させる技があるじゃろう。わらわの武器も貸してやるぞ!!」
「イースナちゃん、あの〝仲良し武器〟羨うらやましがってたんや。交ぜたげたってくれへんかな？」
　メガ・ネに耳打ちされてブラックの本心を知り、俺は三つ編み属性トライブライドを発動した。
「ひゃふんっ」
　図らずもブラックの提案通りイエローを強制的に脱衣パージさせ、俺のブレイザーブレイド、ブルーのウェイブランス、そしてイエローの合身巨大砲ユナイトウエポンが合体。
　三位一体の武器、フュージョニックバスターが完成した。
「レッド、わらわのダークネスグレイブも合体させよ！」
　鎌かまを振り回して催さい促そくするが、俺がどう念じても望み通りの結果にはならなかった。
「三つ編みの属性だから、四つ合体はできないんでしょ」
　ブルーのわかりやすすぎる指摘にブラックは何も言い返さず、唇くちびるを噛かんで俯うつむいた。
「……ああっもう、何でそこまで凹へこむのよ!!」
「う、うるさい！　わらわは一人でも十分なのじゃ、できぬなら別にどうでもよい！」
「ほら、鎌貸しなさい！　この辺の隙すき間まに刃はぁ通せば何とか合体できるでしょ！」
　世話焼き気質が刺激されたのか、ブルーはダークネスグレイブを取り上げると、フュージョニックバスターの大半を占める合身巨大砲ユナイ

トウエポン部分にぐいぐいと押し込み始めた。
「合身巨大砲ユナイトウエポンが壊れますわ!?」
「き、気安くダークネスグレイブに触るでないわ貧乳が伝う染つる!!」
　言葉とは裏腹に、ブラックはどこか嬉うれしそうだ。メガ・ネも微笑ほほえましそうに見守っている。
「あんたの乳だって、四捨五入すりゃ無いも同じでしょうが!!」
　魂たましいがこもっているからだろうか、ブルーの胸絡みの名言製造機の歩ぶ留どまりは夢の一〇〇％を叩たたき出すな……。
「ブラック……追加戦士が合体武器に交ざれないのは宿命です！　そこで先人たちは、武器ではなく放った技を着弾前に融合させるという素晴らしき方法を編み出してきたのですわ!!」
「それは互いの攻撃が干渉して空中爆発するのではないか？」
「大丈夫ですわ！　ブラックにはもう正義の心があるのですから!!」
　イエローも、ヒーロー知識でブラックを元気づける。
　俺はふと気になって、仮面ツインテール……トゥアールを振り返る。仮面に隠れて表情は窺うかがい知れないが……ブラックを、苦笑交じりに優しく見つめているような気がした。
　現状の戦力分析ももちろんだが、トゥアールはイースナがもっとツインテイルズに馴染めるようにと今日のこの場を取り持ってくれたのかもしれない。
　本当にいいチームになってきたよな……俺たち。

◇

　特訓から帰宅した愛あい香かは、自宅のリビングでぐっと伸びをして肩を鳴らした。愛香らしからぬぽきぽきという不健康な音が、無人の室内に響く。

キッチンに移動し、冷蔵庫から取り出した牛乳をコップいっぱいに注ぐと一気に飲み干す。
一息ついて振り返ると、そこには愛香の姉・恋れん香かが立っていた。
「お、お姉ちゃん。ただいま」
「……おかえり、愛香」
総そう二じの目を釘くぎ付づけにしたツインテールは、たった数日で解ほどいてしまっていた。
「お姉ちゃん、ツインテール……どうしてやめちゃったの？」
手を胸の前で重ね、申し訳なさそうに目を伏せる恋れん香か。
「……愛あい香かを本気で悲しませたいわけじゃないから……。ごめんね……お姉ちゃん、ちょっとふざけすぎちゃったみたい……」
幼い日──姉の恋香に総二の好意が向かぬよう、ツインテールにするのはやめて欲しいと愛香は懇願した。それから一〇年、ずっと守られてきた約束は突如として破られ、こともあろうに恋香は愛香の困り顔が愛いとおしいと、目を血走らせてはあはあした。その戦せん慄りつの本性が、今は片へん鱗りんすらも感じられない。あれが夢か幻だったのではないかとさえ思えてしまう。
「あ、あたしは……！　もう、気にしてないから……」
「愛香を焦あせらせて、総くんにアタックできるように、って……余計なことしちゃった……」
「お姉ちゃん……あたしのために、あんなこと……」
愛香はリビングに戻り、ソファに腰掛けた。恋香にも、隣に座って欲しいと伝える。
「お姉ちゃん。あたしの友達、ヘンな人ばっかりなんだ。……きっと、あたしもね」
変人決定戦のワールドランカーが結集したかのような交友関係。友人

どころか、その親族までもが変人トーナメントでスーパーシードに位置するクラスの人ばかりなのだ。
　そして過去に飛んで自分と向き合ったことで、愛香もまた素直に自分も変わり者だと認めることができるようになった。心にゆとりができたのだ。
　恋香の豹ひよう変へんに大きくショックを受けたのは真実だが……いい意味でも悪い意味でも、愛香は変人に慣れてしまっていた。
「お姉ちゃんのこと……ずっと完かん璧ぺきだって思って憧あこがれてたから、ちょっと安心したトコもあるんだ。あんな一面もあるんだな、って」
「私の方が、愛香に憧れているわ。一途に総くんのことを想い続けて……本当に素敵だもの」
　立ち直りが早かったのは、慧え理り那なの苦悩を目の当たりにしていたからかもしれない。
　完璧さにずっと憧れていた肉親の、意外な一面を知った時……深く落ち込んで、そして立ち直った一部始終を、愛香は目にした。同じ状況に、自分は直面したのだから。
　愛香にとって、一番気がかりなのは姉が特殊性癖を秘め隠していたことではない。
「ねえ、お姉ちゃん……ホントはそーじのこと、好きなの？」
　自分を焚たきつけるというだけでは説明がつかない、ツインテールの見事さ。
　一〇年もの歳月を総二と総二の愛するツインテールに捧げた愛香だからこそわかる。
　あれは、一いつ朝ちよう一いつ夕せきでできるツインテールではないと。当然総二も同じ感想を抱いだいたはずだ。
　恋香は膝ひざの上に置いた細い指を、きゅっと握り締めた。

「好き、って言ったら……どうする？」
　覚悟していたはずの答えだったが──愛あい香かは、震ふるえを隠すのが精一杯だった。
　ソファに並んで座った二人。互いに俯うつむいたまま、しばしの時が流れる。
「そ、それは……あ、あたしが止める権利なんてないし……」
　やっと絞り出した答えは、愛香らしからぬ尻すぼみな言葉。
「……あるでしょ。愛香は、ずうっと総そうくんのことを想ってきたんだから」
　恋れん香かは、愛香のツインテールをそっと指で掬すくった。
「お姉ちゃん、もちろん総くんは大好きよ。でも、愛香も大好き。だから、二人が幸せになってくれるのが、一番の望みなの」
　姉の優しさにあらためて触れ、愛香はうん、と微笑ほほえんだ。
「愛香が早く総くんと結ばれてくれれば、お姉ちゃんも諦あきらめがつくんだけどなー」
「もう！　未練あるってこと⁉」
　いろいろな友達ができていなかったら。変態たちと日々戦い、耐性がついていなかったら。
　いつかは訪れていたであろう姉の真実を知る日、自分は立ち直れなかったかもしれない。
　心に余裕のなかった自分が成長できたのは、高校に入学してからの激動の半年間のおかげだ。
　総そう二じが、全ての出会いや経験にいつも感謝しているのが、今ならわかる。
「わかってる。……ううん、最近わかった。いつまでも、ただの幼おさな馴な染じみじゃ駄目だって……」

「応援してるわ。早く総くんと結ばれてね、愛香」

　　　◇

　姉との仲直りにほっとし、二階の自室へと向かう愛香。
　変人の友人を思い描いたことで、まずその筆頭にトゥアールが浮かぶ。
　苦笑しながら自室のドアを開けると──全く同じ顔の女が、ベッドの上で脚を組んで座っていた。

「お邪じや魔ましてます」

「呼び鈴りん押して玄関から入ってこいって言ってんでしょうがあああああああああああああ!!」
　トゥアールがシュタッと上げた右手を絡からめ取り、背負い投げをする愛香。
　床に叩たたきつけられながらも、けろっとしてダメ出しをするトゥアール。
「あの愛香さん……先ほどお姉さんとやっていたようなラブコメ、私的に需要がなさすぎて横おう隔かく膜まくがつりそうなので、やめてもらえませんか？」
「不法侵入の次は盗聴!?　横隔膜フーセンガムみたいにされたいの!?」
　リビングにまで声が届いてはまずいと、慌てて部屋のドアを閉める愛香。
「というか愛香さんは、お姉さんがやたらと総二様と深い関係になるのを煽あおることに疑問はないんですか……」
「仕方ないでしょ。お姉ちゃんは何も進展しないあたしたちをずうっと

見てきたんだから」
「…………うん、じゃあいいです……」
　奥歯に隕いん石せきが挟まったような煮え切らなさで、トゥアールは話題を打ち切った。
　そして間かん髪はつを容いれず、愛あい香かが予想もしない指摘をする。
「――過去の世界で……幼い総そう二じ様に会ってきたんですか？　愛香さん」
「んなななななななななななっ……!!」
　座ったが早いか、勉強机の椅い子すから転げ落ちる愛香。
「何よ藪やぶから棒に!?」
　唐突ではあるが、トゥアールの目は確信に満ちていた。
「当てずっぽうじゃありません、いくら時空間の暴走に巻き込まれたからといって、縁も所縁ゆかりもない時代に飛ばされるよりは、合理性がありますからね。それに私が小ちっちゃい子に近付いたらいつも理不尽に襲いかかってくるのに、今朝のあの腑ふ抜ぬけ具合……明らかに、小っちゃい子を愛することに理解を深めましたね……!!」
　トゥアールは床に尻しり餅もちをついた愛香ににじり寄る。
「過去で何を見てきました……!?　愛香さんのことだから絶対ショタ総二様とお風呂に入ったでしょう！　その粗末な身体からだを見せつけたんでしょう!!」
「か、仮にそうだったとしても別に今さらじゃない。元々あたしとそーじは、小さい頃ころ一緒にお風呂に入ったことなんて何度もあるんだから」
　若干優越感を滲にじませた言葉に、トゥアールはぐぬぬ、と歯は噛がみする。
「まさか、交換条件とか自己弁護して総二様のこともガン見した

り……！」

　まるで現場で見ていたかのような鋭い指摘に、愛香は持ち前の演技力で否定する。

「……見てない」

　焦あせりゆえか、相当に精度が落ちているが。

「嘘うそ偽りなく答えて下さい！　この会話は品質向上のため録音させてもらいますからね!!」

「何でそこまで疑われなくちゃいけないのよ!!」

　やましさはなくても、受話口からそう聞こえてきたらサポートへの電話を中断したくなるほど警戒心を抱いだかせる口上と共に、ヒートアップしたトゥアールが愛香の手首を握り締め、そのまま壁に押しつけた。

「っ……！」

　ただそれだけで、苦く悶もんに顔を歪ゆがませる愛香。

「私のか弱い握力で顔を顰しかめるなんて、乙女ごっこがブームなんですか？」

「どこがか弱いのよ、あんただって十分バカ力ぢからだっての」

　そのままの体勢で、互いを見つめ合う二人。

　目を逸そらした方が負けだ、という意地の張り合いで、一歩も退ひかずに視線が絡み合う。

「……」

「……」

　折れて溜ため息いきをつくのも、二人同時だった。

「筋肉痛ですか」

「まあね」

　トゥアールは身を離し、ぶっきらぼうに言い捨てる。愛あい香かの返答もぞんざいだった。

「……愛香さん。エターナルチェインには本当にピンチの時以外はなら

ないでください」
「何でそこまで話が飛躍すんのよ、ただの筋肉痛よ？」
「私の目は誤ご魔ま化かせないと言ったはずです。……相当身体からだにきていますね？」
　感謝からの、トゥアールへの無意識の手加減。もちろんそれもあるだろう。
　だが愛香は……本当に、いつも通りの力を出せずにいたのだ。
「何よ、あんたに感謝して手加減してやってる、って体ていは気に入らないの？」
「ええ、気に入りませんね。あまり、と言ったでしょう？　失礼ですが、総そう二じ様でさえ愛香さんが無理をしていることは、薄々勘付いています。自分を棚たなに上げて総二様の不調を心配しないでください」
「……」



「イースナも愛あい香かさんの不調に気付いたようですよ」
「わかってるわよ。だから今日特訓してる時、あたしと戦おうとしてやめたんでしょ」
　愛香は大の字でベッドに寝転がり、天てん井じようを見つめながら語り始めた。
「オーガギルディと戦った時……。パワーアップそのものか、あいつの時間移動能力を使ったことか、どっちが原因かわからないけど……変身を解いた後、それまでとは疲労が桁けた違いだったわ」
　おおよそ見当がついていたのか、それを聞いて嘆息するトゥアール。
「立ちくらみがして……そーじたちにばれないように家まで帰ってきたけど……ベッドに横になったら、今度は正座した後の足の痺しびれが全身に回るような感覚になって」
「愛香さん、よく暴走してブッ倒れてたでしょう。その時以上ですか？」
「全然。それは寝れば治ったし……今回は、寝て起きたら数日続く筋肉痛の始まりよ？」
「……皆さんのパワーアップは、私の想定を完全に超えています。イエローもブルーも、テイルギアを完全解放ブレイクレリーズして限界以上の力を引き出している状態……安定した出力で安全に戦うためのテイルギアのリミッターを解除したのですから……リスク無しはありえません」
　リスクがないのだからどんどん強化形態を使っていく、と嬉うれしそうに語る慧え理り那なの顔を思い浮かべる愛香。
「慧理那さんだって嬉しさが勝っているとはいえ、自覚はしているはずです。総そう二じ様の体力を吸収しても関係なく、アブソリュートチェインの使用で段違いの疲労に襲われると」
　そういうことだ。だが、慧理那や自分は強化を果たしてからまだせい

ぜい一か月から数日。
　より深刻なのは、その規格外の力を奮ふるい、長きにわたり戦ってきたテイルレッド。
　──総二だ。
　愛香はベッドから身体からだを起こし、窓のカーテンを少しだけ指で開いた。隣の家の、幼おさな馴な染じみの部屋──今は部屋にはいないようで、カーテンは開けっ放しだ。
「夏休みからこっち、限界を超える戦いが続きすぎました。そろそろ大きな休息をとらせて差し上げないと……」
　今日の唐突な特訓提案の一番の理由を悟り、愛香は苦笑した。
「そうね。いろいろ考えて戦っていかないと」
　テイルレッドに負担をかけず、当面をどう乗り切るか──トゥアールはそれを模索したかったのだろう。もっとも、自分の強化変身とて、ともすれば仲間の負担になりかねないのだが。
　もはやここ最近の総二は、溢あふれるツインテール愛だけでは自分を騙だますこともできないほど、疲労が極まってしまっている。
　だが、休めと言って聞かないことも、十分承知している。ならば、疲労も分かち合うだけだ。
「楽勝ムードを作るのも結構ですが、今やこの世界は全ての平行世界の中で間違いなくトップクラスの激戦区でしょう。油断なさらずに」
「わかってる」
「……私は愛あい香かさんの体調管理までするつもりはありません。使い方の荒いテイルギアのメンテナンスで手一杯ですから」
　その心遣いを充分に汲くみ、愛香は悪いた戯ずらっぽく問いかけた。
「つーかさ、もう愛香って呼び捨てにしてくれないの？」
「絶対嫌です、これ以上距離感を縮めてたまりますか」
「はいはい……」

　愛香はトゥアールを見つめて笑みをこぼす。いつからか、このつれなさが心ここ地ちいい。

　トゥアールははっとして後あと退ずさり、オーバーに身体からだを掻かき抱く。

「……っていうか、何ですかこの空気!?　冗談じゃありませんよ、何か愛香さん、パワーアップして守備範囲までパワーアップしたんじゃないでしょうね!?　ショタから女まで！　怖い怖い、愛香さんに純潔奪われる前に早く総そう二じ様に捧げないと!!」

「守備はともかく攻撃範囲は現状維持よこんなふうにねッッ!!」

「のあああああああああああああああああああああああ筋繊せん維いを超越する原始蛮族!!」

　純潔ではなく命を奪う、筋肉痛を無視した全力攻撃。

　トゥアールはその身に受ける攻撃に、どことなく安あん堵どを覚えたようだった。

キャラクター名鑑 031



DATA

身長：310㎝

体重：515t

属性力：百合属性（ガールズラブ）

死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）の隊長。自らを帝王と豪語してはばからないが、意外に小心者。百合をこよなく愛し、目に付く女性を片っ端から百合シミュレーションする癖がある。アドリブに弱く、よく滑り、空気を読めないという三重苦を生来備えており、しかも五大修練の一つを修めたことでそれらが加速してしまい、今や人望のなさはアルティメギル幹部随一。だが、その実力は首領でさえも認めるほどだというが、現在のところ全く真価を発揮できる気配はない。

第二章　帝王、動く。

　エレメリアンが現れず、数日が過ぎた。
　平和なのはいいことだが、経験則からこれが嵐の前の静けさであることは明白なため、逆に神経を使う日々だ。

「それじゃあ始めてください～」
　その日の帰りのホームルームの時間。担任の樽たる井い先生の間延びした声で、クラスでの話し合いが始まった。
　一〇月は、一年でも指折りのイベントである学園祭……〝陽よう月げつ祭〟が控えている。
　今日からその全校準備期間が開始となり、まずは自分たちのクラスの出し物を決める運びとなったわけだ。
「適当でいいですから、今日中に決めてくださいね～」
　相変わらずマイペースな樽井先生。黒板の横に置いた椅い子すが定位置となっている。
「あ、あの……とりあえず、意見を……。最後に、多数決にします……」
　クラス委員長の女子は、じゃんけんで決まっただけで、リーダーシップを発揮するのが得意ではない控えめな子。週に二度くらいツインテールにしているのが印象的だ。
　ぽーっとしている担任の代わりに教卓の前に立ち、そのクラス委員長を補佐しているのは、副担任の桜さくら川がわ先生だ。
「婚活パーティー会場とかどうだ？　需要あるぞ」
　生徒に先んじて、ニーズが超個人的に限定された出し物を提案する副担任。

「出会い喫茶ならともかく、何で婚活なんですか……」
　委員長が控えめに抗議するも、桜川先生は揺るがない。
「出会いだけじゃスタート地点だろ、結婚というゴールを目指さなくてどうする」
　迷いの無さは、言葉に何ものにも勝る説得力を持たせる。
　二九歳を迎え、吹っ切れた桜川先生にはもう躊躇ためらいは無かった。
「有力な意見が出なかったら、婚活パーティー会場で決まりだぞー」
　これは意見をどんどん出さなければやばいと、みんな次々に挙手をしていく。
「教室の中を低重力にして、月面再現とかどうだ⁉」
「壁と床と天てん井じようを水槽にして、水族館にしてみない？」
　なまじノリがいいばかりに、無茶苦茶な提案が大おお真ま面じ目めに続く。このクラスでただ一人白衣を羽は織おっている少女の手にかかれば、欠伸あくびをする間に制作できてしまうだろうが……。
「先生、何でテイルレッドたんを主題にした出し物がＮＧになってんですか⁉」
　全員に配られた準備要項のプリントを見て、クラスの男子の一人がぼやく。
「他校の文化祭で『テイルレッド喫茶』とか『テイルレッド展覧会』とかやたら出し物が偏かたよってしまった事例を鑑かんがみてな、お嬢様……生徒会長が決められたのだ。制限がなかったら、学園祭じゃなくテイルレッド祭になってしまうだろうが」
　桜さくら川がわ先生の説明で全員が納得する。メインに据すえずおまけ要素としてならＯＫという慧え理り那ならしい柔軟なフォローもあり、制限があることで逆に工夫を凝こらすことが見込める。
「観み束つか君は、何か意見はないんですか～？」

　船を漕こいでいたかと思えば、樽たる井い先生は急に俺へとパスを放ってきた。
「何で名指しなんですか!?」
「次期生徒会長でしょう？　観束君は～」
「いや俺立候補した覚えないですけど!?」
「えー、だって、体育祭の賞品で神しん堂どう会長ゲットしたじゃないですか～」
　この担任はいつも唐突に、何を言い出す……!!
「……………………………………………………よかったな観束、みんな祝福してるぜ」
　テイルレッドに夢中で、他人の交友関係には興味を示さなかったクラスの男子たちだが……憧あこがれの生徒会長である慧理那だけは別のようだ。
　突き刺さるような視線を受け、俺は冷や汗交じりに固まる。
「何な故ぜ慧理那さんなんですか！　何故私が転入してきた時にその憧れの学園ラブコメが幕を開けなかったんですか────っ!!」
　トゥアールがべしべしと机を叩たたいて咽むせび泣いている。
「何やってんの愛あい香か、最近もう完全に校内で祝福ムードになっちゃってるのよ!?」
「前に会長がエロ本のこと聞いて回ってたの、観束君のためだって納得されちゃったし!!」
「私、登校中に会長が観束君に首輪差し出してるの見たわよ！　愛香もやりなさいよ!!」
　そしてクラスの女子が次々に、愛香と肩を組んだりして耳元で何か囁ささやいている。
「観束君と愛香、絶対相性はいいんだから……観束君にそれをわからせないと駄目!!」

　今日は何故かみんな少し目が怖い。愛香は為なされるがまま、ううう、と呻うめいていた。
　いかん、そっちに気を取られてる場合じゃない。指名された以上、俺も意見を出さないと。
「ふ、副担任の先生がメイドさんだし、メイド喫茶……とか……」
　俺は頑張って発言してみたが、男女総ツッコミで今時それは……と一蹴された。
　そりゃそうだ、ド定番なのに今の今まで意見としてすら出なかったんだもんな。
「観束はホント、ツインテールのことじゃねえと全然言葉に覇は気きがないよな」
　見抜かれている……。
「でもよう、観み束つかなら真っ先にツインテール喫茶って言い出しそうなもんなのに」
　クラスメイトから鋭い指摘を受け、俺は無難に誤ご魔ま化かした。
「これだけ校内にツインテールにしてる子が多いんだ、目玉にはならないだろ」
「それ言うならメイド喫茶だって……メイドさんも普段からめっちゃ見るぜ、校内で」
　さらにごもっともな正論が続き、俺は素直に謝った。桜さくら川がわ先生だけじゃなく神しん堂どう家のメイドさんたちが普通に校内を歩いてるからなあ……。そこまで考えが及ばなかった。
　もちろん、本来なら全ての思考を卓越して俺の意志は真っ先にツインテールを選択する。
　男子女子の垣根を越えて全員が一丸となってツインテールになる喫茶店……出し物としては素晴らしい。
　だが、それだとトゥアールだけが裏方に回らなければならない。

　何も知らない女子に、「どうしてツインテールにしないの？」と聞かれた時……きっとトゥアールは、寂しい笑顔ではぐらかすんだろう。
　トゥアールが悲しむかもしれないのに、私情でツインテール喫茶を提案する理由は無い。
　その後も意見は出るものの、決め手に欠けるまま時間だけが過ぎた。既出の意見から多数決で選ぶかとなりかけた時、愛あい香かと肩を組んでいた女子が唐突に挙手をした。
「はい！　占いの館がいいと思います!!」
　男子からは不満が出たが、その女子はこれまでの意見と違い詳細にビジョンを説明し、しかも男子に向けたフォローまで考えられていた。
「女子がコスプレして客寄せするから！　あと、テイルレッドちゃんとの相性も占うっておまけもつければ、男子もたくさん来るでしょ？」
　そう言われれば男子のモチベーションも上がる。意見は一気に占いの館に傾いた。
「うむ、生徒の意見を尊重することが一番だしな。それに占いなら、私も得意なのがある」
　やや不穏当な締しめなのが気になるが、桜川先生もからっとした表情で引き下がり、樽たる井い先生は当然全く干渉はしない。これで決まりのようだ。
　おまけでテイルレッドを据すえたとはいえ、ノリのいいクラス……女子にしては、結構オーソドックスなところに落ち着いたな。やっぱり、女子は占いが好きだからだろうか？
「……愛香、私たちがサポートするから……観束君との相性全部一〇〇％にするから、ここで決めるのよ！　そのために占いの館にしたんだから!!」
「うう……」
　愛香の席の周りに女子が集まって、また何やらひそひそと話してい

る。愛香は申し訳なさそうに身を縮め、トゥアールはそれを見つめながらべしべしと机を叩たたいていた。

　やるからには本格派を目指す。膨ぼう大だいな数の占い方法を取りそろえると意気込み、クラスの出し物は決定した。

　　　◇

「今日から学園祭の準備が始まりましたが……観み束つか君たちのクラスは何か決まりましたか？」
　ホームルームが終わり、俺と愛あい香かとトゥアールがツインテール部部室に着くと、程なくして慧え理り那なと桜さくら川がわ先生もやって来た。さっそく慧理那は、出し物の進しん捗ちよく状況を尋ねてきた。
「占いの館だってさ。題材は地味な方が他のクラスとかぶらないし、内容で凝こる、って」
　飲食関係は競争相手が多そうだからな。それに、うちは占星術同好会といった占い関係を出し物にしてきそうな部活動がないということも想定してのことらしい。
「ふふ、今年も楽しい学園祭になりそうですわね。素敵な特別ゲストもいらっしゃいますし」
「特別ゲスト？」
「ええ、わたくしに……生徒会に直接打診がありましたの。きっと皆さん、驚かれると思いますわ」
　慧理那にしては珍しく、悪いた戯ずらっぽくはぐらかす。当日のサプライズってことか、楽しみだ。
「それよりも、最近全校生徒が総そう二じ様と慧理那さんを公認カップ

ルみたいな扱いにしています！　生徒会長が風紀……いえ、性を乱していることはどう思っているんですか!?」
　トゥアールがテーブルの上で流りゅう麗れいにパンツを見せながら倒立し、慧理那に詰め寄った。
　最後の言い直しは必要だっただろうか。
「そ、それは仕方がありませんわ……お母様が皆様の前で宣言されてしまったのですし……」
「……会長、否定しようと思えばできるでしょ!?　仕方なくないでしょ!?」
　愛香も押し強く続く。桜川先生がどんなに止めても、二人は聞く耳を持たない。
　けれど慧理那は、そんなふうに詰め寄られることを喜んでいるようだ。
　いつも、愛香やトゥアールとの距離を縮めたいって言っていたもんな。
　その時不意に、耳みみ障ざわりなノイズ音が部室中に響き渡った。穏やかな放課後が、一気に緊張を迎える。
　すぐに出所がテレビだと察知して注視すると、黒画面が稲光のように激しく点滅し、思わず目を背そむける。再び画面に目を向けた時、そこには大おお仰ぎような玉座に坐す、見たことのないエレメリアンが映っていた。
『人間どもよ──俺の名は百ゆ合りを愛する戦士、ティラノギルディ』
　俺たちは五人一斉にテレビの前に詰め寄る。
「アルティメギル！　あいつら、また……!!」
　一学期の終業式の頃ころ以来だから、実に数か月ぶりの奴やつらのお家芸、全世界電波ジャックだ。
　俺は思わずテレビのフレームを握り締める。

　ティラノギルディ……。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士なのは間違いないが……こうして矢や面おもてに立つところを見ると、隊長である可能性が高い。
　黄金こがね色の無数の鋭い牙きばが戦いくさ兜かぶとの如ごとく頭部を覆おおい、その奥には紅ぐ蓮れんの双そう眸ぼうが輝く。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは二体の副将それぞれに左右の牙の名を冠していたが、その上に立つのを象徴するかのように、左右の肩それぞれに何物をも嚙かみ砕かんとする巨大な顎あごと牙を備えている。
　画面を隔へだてていながらも伝わってくる、太古の最強生物・ティラノサウルスを彷ほう彿ふつとさせる攻撃的な存在感。爪つめと牙に彩いろどられた屈強な全身から漲みなぎる、覇王の威容。
　百ゆ合りという言葉から連想する可か憐れんさとは、あまりにも真逆だ。
　ドラグギルディの世界侵略宣言。
　ビートルギルディの一時休戦宣言。
　今度は、世界に向けて何を発信するつもりだ……!!
　息を呑のんで見守る俺たち。おそらくは、世界中の人間が今そうしているだろう。
　だが、画面の向こうのティラノギルディは名乗りの後に控えているであろう衝撃の宣言を、いつまで経たっても続けない。
『お、お邪じゃ魔まします……いや違う！　その愚かな双眸に、えーと、帝王の勇姿を焼き付けるがいい！』
　それどころか、妙にもたついている。
『俺は……だな、ツインテイルズに、言いたいことが……』
　どうも、普通にテンパっているように見えるのだが……。初見の泰たい然ぜん自じ若じゃくとした印象から、早くも乖かい離りし始めた。
　それからたっぷりと一分は経っただろうか、

『テ、テイルレッドは……好きな子はおるのか？』

　やっとのことで出した呟つぶやきは……前後の文脈が全く繋つながっていなかった。
　画面に収まりきらないほどの巨漢が、もじもじと指を突き合わせ、照れ交じりに尋ねてくる。
『例えば……ツインテイルズの中に……とか……』
　何を。
　何を言ってるんだ、こいつは。
　何を世界に向けて発信しているんだ、こいつは。
『あっ……あ、明日！　俺の部下が出撃するから、よろしく！　ふ、ふふふっ……ふんは……おふっ……!!』
　終わりよければ全てよし……とばかりに最後に高笑いを上げようとして、途中で引きつったようだ。
　うおおおおおお、と雄おた叫けびを上げて玉座ごと派手に転び、フレームアウトするティラノギルディ。
『こんなはずでは！　こんなはずではなかったのだ！　俺の軽快な帝王トークが炸さく裂れつするはずだったのだ！　おのれ、何日も何日も練習したというのに!!』
　無人となった画面……カメラのレンズの外から聞こえてくる、野太い自己嫌悪。
『それにつけても貴様ら……雁がん首くび揃えてだんまりとは、気のきかぬことよ！　会場笑いがあるかないかで、番組の盛り上がりは俄が然ぜん変わってくるのだぞ!!』
『も、申し訳ありませぬ！　どう声をかけていいものか……』
『だから笑えばよかろう笑えば!!』

『お言葉ですがティラノギルディ様、我わが稚ち拙せつなお笑いセンスではどうしても面白ポイントを見つけること適かなわず……!!』
　仕舞いには応対した部下に八つ当たりを始めたのか、カメラが倒れ、妙な部屋が映る。
　数秒の後、スイッチを切られたのだろう、映像は消え──テレビ画面は黒一面に戻った。
　盛り上がりって、番組……のつもりだったのか……？
「結局あいつ、何が言いたかったんだ……出撃予告!?」
　支し離り滅めつ裂れつな放送を目の当たりにし、ツインテール部メンバーの反応は様々だ。
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長はアホのようですね。これまでのような透過ホログラフィーの形式ではなく、スタジオ風味……。派手な背景を映したくてか衝つい立たてを置いていましたが、カメラが倒れて部屋が映り込みました」
　トゥアールが手にしていた小型端末を操作し、先ほどの映像を早くも分析にかけている。
「アルティメギル基地の有用な内部映像が手に入りましたよ、皆さん」
　……さ、さすがだ、トゥアール……ぽかんとしてて全然そんなところまで気が回らなかった。
「まさか、ああやってアホキャラ演じて一般人を油断させようって作戦じゃ……」
　こちらも愛あい香からしい反応だ。ティラノギルディの慌てぶりを演技と疑っている。
「いいえ、見ていればわかります。あれは愛香さんのように腹黒く計算されたキャラ作りではありません、間違いなく天然の滑り芸です！」
「あたしだってキャラ作ってないってーの!!」
　そして桜さくら川がわ先生の心配は、今一番現実的なものだった。

「しかしな、あんなふうに予告するのは……まずいんじゃないか？」
「まあ、明日というだけで正確な時間も場所も指定していませんからそう騒ぎにはならないと思いますが……明日確実に現れるという予告は、ちょーっとまずいですね」
　トゥアールもその意見に同意する。俺は想定される危機に歯は嚙がみした。
「一般人にパニックを引き起こしてしまうってことか」
「いえ、テイルレッドの人気は世界規模です。これからしょっちゅう事前に現れる日時の予告をされたら、世界中から見物人が殺到するかもしれません」
「そっちか……」
　愛あい香かは、その点に関してはさして危き惧ぐはしていないようだ。
「そりゃそうでしょ、エレメリアンが現れるって事前にわかったからって街から避難する人なんてそうそういないだろうし」
　事態を深刻に受け止め、真っ先に危機を訴えそうな慧え理り那なが、放送が終わってからというものずっと黙りこくっている。そんなにショックな発言をしていただろうか？
　俺の視線に気付くと、慧理那はばっと視線を逸そらし、長テーブルとお見合いを始めた。
「そ、その、ティラノギルディが、言っていましたわよね……テイルレッドに好きな人はいるのかと。……それも……ツインテイルズの中に……」
「ああ。そういや死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの連中、何か妙なこと言ってるよな」
　ちゅーをしろとか何とか。どうも命令のようだったが……出所はあの隊長なのか？

「やはり、敵からも好き合っているように見えてしまうのでしょうか……？　例えば、レッドと、イエロー……とか……」
「あんま気にするなって、慧理那。敵から仲良く見えるなら、むしろ誇るべきことだろ？」
　元気づけたつもりだったが、慧理那は何な故ぜか余計にしゅんとしてしまった。
　代わりにトゥアールが机を飛び越えて慧理那の隣に座り、彼女の肩に頬ほお擦ずりを始めた。
「ひゃっ……トゥ、トゥアールさん⁉」
「ああもう慧理那さんは可愛かわいいですね！　どこかの下半身ダイレクト女とは大違いです‼」
「一言一句違たがわず同感だわ‼」
　愛香がキシャーと飛びかかる。トゥアールがちょっかいを出す相手が慧理那だと、桜さくら川がわ先生も黙っていない。練習皆かい無むのまま完かん璧ぺきな仕上がりを見せるコンビ殺法で、トゥアールを撃退する愛香と桜川先生。
　みんな、あまり深刻に考えていないのは頼もしいが……油断はできない。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスとの戦いはまだ始まったばかりなんだ。
　副将格のエレメリアンが二体倒されて、あいつらも雪せつ辱じよくに燃えているだろう。
　俺たちも、気を引き締めないとな。

　　　◇

　大々的に電波ジャックをして、まさかの放送事故。ホール内の戦士た

ちが静まり返る。

「さあ、これでも怖おじ気けづいていられるか、小物ども」

　ティラノギルディは帝王の威風甚はなはだしくマントを翻ひるがえした。

「俺自らお膳立ては整えてやった。いつまでもめそめそと女め々めしく震ふるえている暇ひまがあったら、テイルブルー打倒の案でも練っておれ。まずは、我わが軍の戦士が先は陣なを切る」

　ティラノギルディが生来の滑り気質を修行で極大化させてしまった孤高の帝王であることは、トリケラトップギルディによって伝えられたスパロウギルディだけが知るところ。

　何も知らない他の戦士たちにとってみれば、ティラノギルディはあえて道化を演じ、自分たちの不ふ甲が斐いなさを言外に叱しつ責せきしていると捉とらえるのも無理はないのだ。

　ティラノギルディは高々と手を掲げ、部下を招集した。

「出いでい！　コックロチギルディよ!!」

　ホールの入り口からとぼとぼと現れたのは、全身が黒光りし、節くれ立った手足に丸みを帯びた翅はねを背中に有した戦士。

　有り体ていに言えば、ゴキブリのような見た目のエレメリアンだった。

「……あの、隊長……選んでくださるのは光栄ですが、俺は……」

　遠慮がちに拒否していることなど、お構いなしに続ける。

「作戦はただ一つ。テイルレッドと他のツインテイルズの誰だれかをちゅーさせるのだ」

「ま、まだやっておられたのですか……」

「当然よ！　誰も完かん遂すいできておらぬのだ、いつまでもどこまでも続こうぞ!!」

　がっくりと頭を垂れるコックロチギルディ。巨大な触角が、力なく揺

れた。
「お前は実力は確かだが、全く行動を起こさんのがいかん。活躍の場をくれてやろう」
　ティラノギルディはコックロチギルディの背中をぐいぐいと押し、ホールに着席する戦士たちによく見えるよう、登壇場へと導いていく。
「テイルレッドはまだ幼い、お前の望む属性も十分叶かなえられよう」
「あ、た、隊長、無理に紹介しなくてもい……」

「皆の者、紹介しよう！　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士、お漏らし属性ピーイングのコックロチギルディだ!!」

　コックロチギルディの訴えも虚むなしく、ティラノギルディはホールに集った無数の戦士たちの前で、ピンポイントに致命的なプロフィールを紹介した。
　何と、おもらし……。おもらしか……。おもらしとは……。
　動揺と、困惑と、不審と……。漣さざなみのように小さなどよめきが、ホール内に木こ霊だまする。
　身を震ふるわせ、もはや命などいらぬとばかりに胸の裡うちを吐き出すコックロチギルディ。
「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおまた馬ば鹿かにされた……！　この空気読めないクソ隊長が死ね――――――――ッ!!」
　コックロチギルディはカサカサと悲しくも軽快な足運びでホールから走り去っていった。
　惰だ弱じやくな、と吐き捨てる帝王。あの属性ならばその誹そしりもやむなしか、とコックロチギルディに同情した戦士たちは――直後、それが自分たちに向けられた言葉なのだと悟る。
「よいか、ツインテールを除く全ての属性の頂点は百合属性ガールズラ

ブ！　その他は皆等しく有う象ぞう無む象ぞうなのだ、いちいち他者の属性にケチをつける貴様らの矮わい小しようさ、全くもって惰弱よ！」
　お漏らし属性ピーイングと紹介されて、正直なところ「マジか」と引いてしまった戦士たちは、このティラノギルディの叱しつ責せきに大いに感銘を受け、襟えりを正す思いだった。
　この部隊の残存兵たちは顚てん末まつを知らないが、下着属性アンダーウエアーという自分の属性を軽んじられ続けたことで、野心に走ったフェンリルギルディというはぐれ者がかつてこの基地にいた。
　仲間意識の篤あついエレメリアンの中にも、どうしても軽んじられたり忌き避ひされたりする属性を持つ戦士は存在する。
　しかし、この帝王の明け透けな言葉には、後ろ暗さを感じない。自分の属性以外は有う象ぞう無む象ぞうと断じつつも、その属性を持つ戦士そのものを心から貶おとしめたりはしないからだ。
　空気が読めない上に、自分でどんどん滑っていく自爆体質──指揮官としては疑問が残る。
　だが少なくともその度量の深さは、間違いなく強部隊の隊長の器だ。
　残存兵たちは、この頼りない帝王についていく覚悟を決めたのだった。
「不敬はちゅーを以もつて返してもらうぞ、コックロチギルディよ！　まだ聞こえておるか、ちゃんと戦闘員アルテイロイドを連れて行って映像に収めるのだぞー!!」

　とてつもなく、不安は残るが──。

　　　◇

　人里離れた山林。

　スワンギルディが姿を隠している洞どう穴けつの前で、フェニックスギルディは興味深げに携帯電話の画面を見つめていた。
「わざわざ予告たぁ、珍しいことしやがる。何考えてんだか、ティラノギルディの旦だん那な！」
「フェニックスギルディ殿……‼」
　背後からの声に振り返る。洞穴から駆け出てくる、若き神童――スワンギルディ。
　フェニックスギルディに師事してから、順調に逞たくましさが増している。
　スワンギルディの手にも、携帯電話が握られていた。ただし、フェニックスギルディのようにメールの応酬の間かん隙げきを縫って
ニュースをチェックする余裕などは到底なかったようだが。
「なかなかいいレスポンスの速さだったぜ！　強くなってるじゃねえか」
「いえ、まだまだです。フェニックスギルディ殿は、メールの本文に私のＡアスキーＡアートを制作し貼り付けるほどのゆとりがあったというのに……」
　互いにメールを送り合う――五大修練の合間にこの訓練をフェニックスギルディが提案したのは、かつて自分がダークグラスパーとこの方法で互角の勝負を繰り広げたからだ。
　さすがスワンギルディは、暗黒のストーカーに揉もまれただけあって、突然の大量メールにも動じない精神の土壌が育はぐくまれている。
　このようにいくつも余裕を挟まれるほど、まだまだ二人の実力には隔へだたりがあるのだが。
「フェニックスギルディ殿！　ご指導ありがとうございます‼」
　礼儀正しい若者の眩まぶしさに、フェニックスギルディは照れ隠しに頭を掻かく。

「よせよ、暇ひまな時につき合ってるだけだ、大したことはしてねえって!!」
　傍はたから見ると謙けん遜そんではなくマジで大したことはしていないのだが、これも立派な訓練だ。
　一流のテニスプレイヤー同士は、傍からは一見単調なラリーを続けているようでも、その一球一球に相手を撃ちのめさんという必勝の気迫を込めているという。精神が先に折れた方が、ボールを見逃す。テクニカルやフィジカルではなく、メンタルの勝負というわけだ。
　それと同じく、メールラリーは精神の削けずり合い。精神生命体のエレメリアンにとっては、十二分に骨身を削る修行となり得る。
「ところでフェニックスギルディ殿、先日いただいたこの装置は一体……」
「そいつはお前さんの気配を消すために必要なもんだ、肌身離さず持っとけ。ここは基地と違って守られてねえんだ、ツインテイルズか逗とう留りゅう部隊か、どっちかに見つかっちまうぜ!!」
　フェニックスギルディが渡した円盤状の装置は、アルティメギル版の認識攪乱装置イマジンチャフ。フェニックスギルディが所持しているということで、それが彼の親友であるペガサスギルディの遺産であることが知れる。
「スワンギルディよ。謙遜ばっかしてねえで、常に思いっきり強くなった自分をイメージしておきな！　それがいつか、お前だけの最終闘体を獲得する時に必ず役に立つからよ!!」
　弟子の成長を実感したからか、フェニックスギルディは頃ころ合あいを見てそんな助言をした。
「最終闘体……卓越した戦士のみが到達するという、あの」
「んな大層なもんじゃねえ、大抵の幹部は持ってるからな!!」
　駆け出しの域を出ないスワンギルディにとっては、充分に大層なもの

だ。
「ドラグギルディ様は、ツインテールになられておりました……」
「……そうだな」
　テイルレッドとの死闘は半ばまでしか映像に収められていなかったが、それでも残存部隊にとってドラグギルディの最終闘体は、伝説となって語り継がれている。
「フェニックスギルディ殿も、最終闘体を……」
「ああ。俺様はポニーテールになる」
「おお！　ドラグギルディ様と同じように……!!」
「……同じ、か……」
　寂しそうに微笑ほほえむフェニックスギルディ。
「ま、時間はあるんだしよ。最終闘体は弛たゆまぬ鍛錬と心の成長の先にあるもんだ、焦あせって手にしようとすりゃ碌ろくなことにならねえ。ゆっくり考えな!!」
「はい!!」
　追加の修行項目を伝え、フェニックスギルディは踵きびすを返す。
　目的意識がある戦士は、成長の度合いが桁けた違いだ。次に会う時を楽しみにしながら━不死鳥のエレメリアンは、最近通い慣れてきた街の方角へと、足を向けた。

◇

　秋も深まり、道行く人の中にはコートを着こんだ気の早い人もちらほらと見かける。
　だが、総そう二じの実家である喫茶店〝アドレシェンツァ〟の常連客に、春夏秋冬は関係ない。
　夏でもトレンチコートを着こみ、手にはジュラルミンケース……シル

クハットを目深にかぶり、襟えりを立てて顔を隠して来店する客もいるぐらいなのだ。
　職質を受けずに自宅や職場からこの喫茶店まで辿たどり着けているのが奇跡としか思えない。
　ちなみに、店内にはいつからか更衣室が設けられ、店内でだけ羽目を外したい人たちの一助を担っている。
　カウンターに座り彼らがマスターと仰ぐ観み束つか未み春はると話しているのは、現役警察官。階級は警視正、バリバリのキャリア組だが、何な故ぜか非番の日には外国の警察官の制服に店内で着替え、ドーナツを食べながら店主と談笑する。話題は先ほどの電波ジャック放送についてだ。
「ＨＡＨＡＨＡ、その辺のコメディアンよりよっぽど愉快な怪物だ！　なあ、マスター!!」
「しかも百ゆ合り好きですって！　やだわ、私狙ねらわれちゃうかも！」
　世界有数の変わった喫茶店の経営主が何か言っている。
　コテコテのアメリカンな警官に、瞬時に深夜の通販番組の司会のパツキン女性を思わせる口調で対応できる、未春の臨機応変さが際立つ。彼女の高校時代を知っていれば、ＨＡＨＡＨＡ、では済まされない発言なのだが……。
　本来ならば人々を恐怖のどん底に叩たたき落とすであろう侵略宣言の放送も、世間での反応はコーヒーブレイクの話の種程度のものだ。
「!?」
　警官はおもむろにドアの方を二度見すると、カウンターにわざとしわくちゃにした一万円札を置き、「待て、それは俺のパトカーだ！」と口走りながら着替えもせずに出ていった。
　もちろん、パトカーなど最初からない。彼の憧あこがれの警官像なの

だろう。
　パッション激しく生きる公務員と入れ替わりで店内に入ってきたのは、朱色のドレスをまとったポニーテールの少女──結いわ翼ばね唯ゆ乃のだった。
「よーっす、マスター」
「あら、唯乃ちゃん！」
　唯乃は相変わらずぶらぶら世界を行あん脚ぎやしているが、何日かに一回はこの国のこの街、この喫茶店に足を運んでいる。夕方前にやってくるので、総二たちとは一度も遭遇していない。
　唯乃はカウンター席に座ると、テレビに映っているニュース映像に注目した。
「……怪人が予告したのに、レッドばっかり映ってるなあ」
　明日姿を現すと予告した怪人への危機感よりも、テイルレッドを愛めでる映像ばかり。
　常に健康的な笑みを湛たたえる口元も今は引き結ばれ、憂うれうように画面を見つめている。
「これじゃあ、どっちが侵略者なのかわからねえ……。そう思わねえか、マスター？」
「侵略者と人類みんなのマスコットは違うわよ。レッドちゃんを見てると、みんな元気になれるもの。それとも唯ゆ乃のちゃんは、じめじめ落ち込んでる世界の方が好み？」
　穏やかながらも、試すような口調に、唯乃はやっと口元を吊つり上げ、白い歯を見せた。
「ははっ、なるほどな！　マスターの言うとおりだ、元気よく生きる方がいいぜ!!」
　未み春はるは乾いたカップを取り出し、布で磨みがくふりをして雰囲気を作りながら語りかけた。

「──彷ま徨よっているのね……唯乃ちゃん。私で良ければ悩みを聞くわよ？」
「……悩みかあ……そうだなあ。惚ほれた奴やつがどういう世界を見てるのか、俺様も同じ世界を見て知ろうと思ってぶらぶら回ってきたが……なかなかわからなくてよ!!」
「あらあらまあまあ、好きな子!?　唯乃ちゃん好きな子いるの!?」
　訳知り喫茶店店主から噂うわさ好きな主婦にメタモルフォーゼし、目を輝かせて詰め寄る未春。
　しかし、すぐに思案顔になると、わかりやすく手をぽん、と叩たたいた。
「……ねえ唯乃ちゃん、お洋服いらない？」
　未春に唐突にそう提案され、唯乃は自分のドレス姿をしげしげと見た。
「ん？　ああ、やっぱいつもこのカッコじゃ目立つか」
　この喫茶店では当たり前のように受け容いれられるが、絶世の美少女である唯乃がドレス姿で街を闊かつ歩ぽすると、衆目をもれなく一身に集めてしまうのだ。
「息子……ううん、娘に買ってあげたものなんだけど、サイズが結構大きくて……唯乃ちゃんならピッタリだと思うんだけど」
　次に来た時に渡そうと思って用意していたのだろう。未春はブティックの店名が印字された紙袋を、唯乃の前で掲げた。その服は、息子そうじが娘ソーラになってしまった時買っていたものだ。
「もらうなんて悪いよ、金払うぜ」
「いいのよ、どうせ多分もう必要ないから」
　元々一時のハプニングのために用意した服だ、後で誰だれかにあげようと思っていたのだろう。
　常連客たちは、にこにこしながら二人のやりとりを見守っている。

　トレンチコートのおっさんも、立てた襟えりの奥に僅わずかに除く口元だけにこにこ笑っている。
　未春は唯乃の手を引き、客席の奥に設置された更衣室に案内した。
「お？　着替え手伝ってくれんのか？」
「ブラ、付け方わからないでしょ？」
「下着か、そういや上はつけてねえや」
　百戦錬磨の常連客たちも、そんなやりとりには一瞬首を傾かしげる。
「下着がすでに用を為さなくなった、遥はるか未来からやってきた少女なのかもしれません……」
「フッ、なるほど……」
　常連客の一人の呟つぶやきで、あっという間に店内の全員が納得する。非日常への順応力がワールドクラスだった。
　更衣室のドアが閉まるも、ボックスの下の隙すき間まから会話が引き続き漏もれ聞こえてくる。
「あら～結構大きいのね、愛あい香かちゃん怒るわそりゃ」
「ん？　何だ、胸がでかくて入らねえのか？　マスター」
「ううん、大丈夫、ブラはかなりサイズに幅持たせて買ってきてあったから」
　ん、んん、と咳せき払ばらいをして、妙に空々しくコーヒーを飲む客たち。
　非日常には順応できても、年とし頃ごろの女の子の無防備な会話にはなかなか耐性がない。ここが、桁けた違いに臨機応変な納得で桃色会話をスルーできる店主の息子との違いだった。
「唯ゆ乃のちゃん、かわいい！　これならいつ総そうちゃ……好きな子デートに誘っても大丈夫よ！」
「……デートか……したことねえや」
　更衣室のドアが開けられ、着替えた唯乃の姿が常連客の前に露あらわ

になる。それぞれのキャラクターを忘れて素に戻るほど、その姿に思わず放心して見とれてしまう──。

　　　◇

　陽よう月げつ学園高等部の校舎内は、学園祭に向けて何とも高揚感溢あふれる熱気に包まれていた。
　俺のクラスも、放課後には早速占いの館の準備を始める。
　一旦机と椅い子すを端に寄せて間取りを測り、おおよその完成図を考えていく。必要なものをリストアップし、予算で購入するものと各自が私物から持ち寄るものに分ける。
「水晶なら、テイルレッドたんクリスタルがあるぜ!!」
　すでに持参していたらしく、クラスの男子がテイルレッドの頭部を模した水晶を取り出した。水晶でレッドのツインテールを再現したのか……さすがは職人大国、日本。
　しかし、熱中するのは良いことだけど、みんな全然気にしていないんだろうか……？　もうすぐ、ティラノギルディの出撃予告から丸一日だが──。

　本日の準備時間が終わって教室を後にし、ツインテール部部室に到着する。
　俺と愛香、トゥアールは誰だれともなく時間を確認し、言葉少なく席についた。
「なまじ襲撃予告なんかしやがるもんだから、一日中気になって仕方がなかった……」
　何時にエレメリアンが現れるか不明だったことで、俺は放課後まで気を張り通しだった。

「結局、いつも通り夕方ってことかな」
　愛香はそこまで構えてはいないようだが、初めての襲撃予告だけに警戒は怠おこたっていない。
「……あの予告がブラフだとしたら厄やつ介かいですよ。来るか来ないか、常に緊張していなければいけないですし、緊張が緩んだのを見計らって突然現れるかもしれませんし」
「それはあたしも思った。どうも今回の部隊の隊長、今までと毛色が違うみたいだしね」
　そしてアイドルであるイースナにとっては、より深刻なようだ。
　昨日の襲撃予告のせいで、大事を取った局側の意向で収録スケジュールがかなり変わってしまったという。今日は地方のスタジオでの収録に変更となり、おそらくツインテイルズの活動はできないと連絡があった。
　どこに現れるかと場所は指定されていないのだから、花見の場所取りのように陣取って現れるのを待っている人はいないとは思うが……世間では昨日のアルティメギルの予告をどう捉とらえているのか知っておきたい。俺は、部室のテレビの電源をＯＮにした。
　夕方のニュース番組……キャスターやコメンテーターがフリップを用いて語り合う映像を想像していた俺は、やおら映し出された光景に度肝を抜かれた。
『ご覧ください！　突如現れた怪人ですが、ああして座ったまま動こうとしません。現場にはすでに多くの見物人が詰めかけており──』
「な、何だって!?」
　俺たちは一斉に驚きの声を上げた。
　ライブ映像。ヘリコプターからの望遠で、エレメリアンらしきシルエットが捉えられている。
　予告通り、すでにエレメリアンは現れていた──!!

◇

　俺とイエローは髪紐属性リボンを発動したブルーに摑つかまり、現場へ急行する。
　トゥアールの属性力エレメーラ探査器サーチヤーは、エレメリアンの属性力エレメーラが活性化しない限り探知できない。
　そのため、ツインテイルズより先に一般人がエレメリアンを見つけてしまうケースがこれまでも何度かあった。気配を殺して作戦準備をしている場合が、その最たるものだ。作戦失敗に動揺し、放心して立ち尽くしている間に発見された時もあった。
　ただ……今回の事例はいささか異質と言えるだろう。
　オフィスビル前の大広場。放射状のパターン舗装が施ほどこされた赤茶色のアスファルトの上に、ぽつんとした黒点が見える。
　エレメリアンだ。さらによく見ると、どうも体育座りをしているようだ。
　一定距離を維持し円状に取り囲むギャラリーの中心で、エレメリアンはやる気なさそうに座り込んでいる。
　そう──今回は、敵に全くやる気がないせいで、属性力エレメーラ探査器サーチヤーで発見できなかったケースの可能性があるのだ。

　俺たちはギャラリーの囲いの中に着地し、エレメリアンを注視する。
　ギャラリーのいる場所で戦う時はいつも到着と同時に不揃いな歓声を上げられるが、今日は「せーの」で「テイルレッドちゃーん」と老いも若きも声を揃えて声援を送ってきた。待ち時間の間に示し合わせていたのかもしれない。……目の前にエレメリアンがいるのに……。
　とりあえず俺は苦笑いで手を振った。今日はツインテールの子が特に

多いな。
「……来たか、ツインテイルズ……。今日は三人か……はあ……」
　エレメリアンは俺たちの姿を認めると、立ち上がりもせず溜ため息いきをついた。
　黒光りする全身だけでも特徴的だが……節くれ立った手足から大小の突起が無数に自己主張し、頭部からは長い触角が垂れ下がっている。これはモチーフ━活性体シルエットを間違えようがない。
「ゴキブリ？　虫なら美の四心ビー・テイフル・ハートじゃないか……生き残りがいたのか!?」
　俺の単純な疑問に、トゥアールが通信で解説をしてくれた。
『知名度が高い虫ではありますが、ゴキブリは数億年前から存在する生きた化石そのものですからね。古代生物のカテゴリで何ら不思議はありません』
　そういえば、トンボでも古代のトンボのメガネウラギルディは、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスだったっけ。
「美の四心ビー・テイフル・ハートの方が似つかわしいと言ったか!?　俺とてそちらがよかったのだ！　しかし、俺の属性はどうせ疎うとまれるのだからと、仕方なく処刑部隊に人事異動を申し出てだな!!」
　耳ざとく反応したところを見ると、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士で間違いはないようだ。
　しかしアルティメギルも、よくよく人間社会じみてるとこあるよなあ……。
　よっこいしょ、と気け怠だるげに立ち上がるエレメリアン。
　頭頂から頭一つ分ほど伸び、そこから弧を描いて垂れ下がった一対の触角。
　柔らかく躍動的な半月は、まるで……。
「……あいつの触角……」

「まさかツインテールに見えるなんて言わないでしょうね⁉　相手はゴキブリだからね！　ツインテールへの冒ぼう瀆とくよ⁉」
　ジト目で指摘してくるブルー。
「わ、わかった……すまん」
　気を取り直し、俺はエレメリアンに指を突きつけた。
「お前、こんなところで何を企んでやがったんだ！」
「企んでなどおらぬ……。ノープラン……ゆえにノーチャンスだ……」
　哲学じみた弁解で、ハナから勝機を捨てている。
「あんたがやる気ないのはよーくわかったけど、だったらわざわざ予告なんてしないでくれる？　こっちだって迷惑なのよ」
「すまぬ……予告は隊長が勝手にやった……。宣言から丸一日が経過したため、俺はこうして仕方なくやってきただけなのだ……」
　ブルーが苛いら立だち交じりに吐き捨てると、エレメリアンは素直に謝った。のっぴきならない事情があることだけは理解できた。
「様子がおかしいですわね……」
　様子も言動もおかしいが、戦意はないようだし、とりあえず聞くだけ聞いてみよう。
「何か事情があるなら、話してみてくれないか？」
「聞いてくれるか、テイルレッド……俺の上司が最悪なのだ……！」
　心なしか食い気味に、エレメリアンは語り出す。
　話を聞くとは言ったが……身の上話が始まるとは思わなかった。
「……やる気がないなら倒……」
「待てブルー、最後まで話を聞こう」
　エレメリアンはみんな倒せばいい──と気を逸そらせ踏み出すブルーを咄とつ嗟さに制止する。
「俺の属性は、誰だれも素晴らしさをわかってくれぬ……。空気を読めないクソ隊長が晒し者のように皆の前で紹介したが、案の定嘲笑われて

な……。もう基地に居場所がないのだ」
　巨乳貧乳みたいに対立するならともかく、仲間の属性を笑うなんて想像できないんだが。
　プテラギルディが、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士は理解を得にくい属性の戦士が多いと嘆いていたから、むしろ部隊内では互いに分かり合ってるもんだとばかり……。その中でもこいつのは、ちょっと異端すぎるのか。
　それに、自分とこの隊長をクソ呼ばわりとは……。今まで多くの幹部クラスのメレメリアンと戦ってきたが、みんな部下から篤あつい信頼を寄せられる良き上官だった。けど、昨日映っていたティラノギルディとかいうやつ……そんなに部下から人望がないのか!?
　こんな時にブラックがいれば、ややこしい内部事情について聞けたかもしれないが……。
「あの……誰も素晴らしさをわからない属性とは、何ですの？」
　イエローに直球で尋ねられ、エレメリアンは観念したようだ。

「俺の名はコックロチギルディ──お漏らし属性ピーイング……おもらしを愛する戦士だ」

　俺とブルーは揃って絶句し、イエローは「まあ」、と比較的緩やかに驚いた。
　さらに、ギャラリーたちが後あと退ずさって囲いの直径がにわかに拡大する。
「愛深き女神と聞き及んでいたが……やはりお前も引いてしまうのか、テイルレッド！　何な故ぜだ、何故誰も、おもらしへの愛を理解してくれぬのだ!!」
　周囲大勢のドン引きよりも、俺一人の反応の方がショックだったよう

で、さすがに罪悪感が湧く。俺はフォローしようと声をかけた。
「べ、別にお前がそれを好きな分には、構わないと思うけどな……？」
「おお！　ならば、お前のおもらしを是非今ここで見せてくれ、テイルレッド!!」
「見せるかあああああああああああああああああああああああ!!」
　かつてない不条理が俺を襲う。
　横目で窺うかがうと、青筋を浮かべているブルー。アイコンタクトで制止するのも限界だ……。
「むっ……」
　コックロチギルディが黒光りする山形の頭部を存分に駆動させ、ギャラリーの一般人たちを見回した。つられて見ると、何な故ぜかこいつの属性に引いて距離を置いたはずの一般人たちが、むしろその前よりも輪を縮めて俺たちに近付いてきている。
　俺たちにというか、俺に……何かを期待するような視線を向けている……。
「おお、この情熱は……人々が、おもらしを見たがっている！　そう、テイルレッド、お前のおもらしをだ!!」
「…………」
　嘘うそだよね。
　頼む、アイドル扱いは我慢するから……せめて、今回ばかりは否定してくれ。嘘だと言ってくれ……。
　俺が視線を巡らせると、ギャラリーが一斉に目を逸そらした。
　俺が……俺たちが守っている人々は……。
「この世界でなら……誰だれもがお前のおもらしを見たがるこの世界でなら、俺は愛を完かん遂すいすることができるであろう！　我わが意を得たり!!」
　血迷った神託を受け、コックロチギルディは先ほどまでと打って変

わって総身を滾たぎらせた。
　いじけ顔を払ふつ拭しょくし、俺たちの前で力強くファイティングポーズを取る。
「俺は今……生涯で初めて、愛のために全力で戦おう！　おもらしへの愛のために!!」
　さすが死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長の指名で派兵されただけあって、ギアが入ると凄すさまじい闘気だ。
　コックロチギルディは俺たち三人を交互に観察し、イエローへ視線を縫ぬい止める。
「テイルイエロー……イエローか……ふうむ、ときめく色だ」
「ちちちちち違いますわこの黄色は正義の雷いかづちの色ですわ――――――――――ッ!!」
　イエローは涙目になり、身体からだを掻かき抱いて蹲うずくまってしまった。
　くっ……イエローが戦闘不能に……!!
「人は誰もがおもらしに生まれ、一時の別れを経て、やがておもらしに還かえってくる……おもらしこそ人生!!」
　生物的エコロジカルな御ご託たくと共に、コックロチギルディは俺を真正面から見み据すえる。
「テイルレッド！　お前はまだ幼い……おもらしとも友好的な関係を築いていこうではないか!!　何だったら、俺自ら抱っこするゆえ、こう、しーっと元気よくおもらしを……」

「おもらしおもらしうるせえええ!!」
　ブルーにしては随分我慢した方だと思うが、とうとう怒りを爆発さ

せ、ランスをコックロチギルディの顔面に突き出した。
　コックロチギルディは薄気味悪い足運びで、危なげなく刺し突とつを回避する。
「──〝おもらしに叛はん逆ぎやくせし者〟テイルブルーよ……まずは貴様が相手か!!」
「世にも最悪な二つ名つけるなあああああああ!!」
　よりによってギャラリーのいる日にバラエティ番組のカラフルテロップ映えしそうな暴言を吐き散らかされ、ブルーはさらに怒りをヒートアップさせる。だが、当たらない。
　さすが、と言っていいものか……ゴキブリだけあって、捕まえようとすると圧倒的な回避速度を見せつける。
「このおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　野性味溢あふれる咆ほう哮こうを轟とどろかせ、ブルーの連続攻撃がコックロチギルディを襲う。
　ドン引きしているギャラリーに気付いたのか、ブルーが攻撃の手を緩めた。
「俺の狙ねらいに気付いたようだな……そうだ、怒れ、怒るがいいテイルブルー……そしてその恐怖で人々の尿意を刺激するのだ!!」
　こいつ……俺だけじゃなく周りの人たちも狙ってやがった！
　ノープランだなんてぬけぬけと……。いや、やる気を出してから即座に考えついたんだ！　型にはまれば手て強ごわい、臨機応変に作戦を組み立てられる技巧派ってことか！
　ギャラリーをさらりと一いち瞥べつすると、ブルーはさほど気にする様子もなく、攻撃を再開した。
「テイルブルー！　貴様が人々に恐怖を与えれば、おもらしの発動を促うながしてしまうぞ!!」
「怪け我がはさせないように気をつけるけど……見に来てるのは自己責

任なんだから、そこまで注意できないわよ」
　目を据すわらせ、コックロチギルディとテイルギアを装着している俺たちにしか聞こえない小声で、ダークヒーローの真骨頂を口走るブルー。どこか危うさを感じるが、イエローは戦意喪失しているし、俺は妙な注目をされてて迂う闊かつに動けないし、どうすれば……。
『総そう二じ様……あれを説明して、その変態をひと思いに楽にしてやっちゃってください！』
　ついさっきまでは母さんと何やら基地で笑い合っている声しか通信から聞こえてこなかったが、ようやくトゥアールはオペレートを伝えてきた。あれが何を指しているか程なく察し、俺はブルーから距離を取ったコックロチギルディへ言い放った。
「おい！　お、俺はおもらしできないぞ……」
　きゃー、と歓声が響く。声が大きすぎて、ギャラリーにも聞こえてしまったようだ。
　頰ほおが熱くなる。俺はコックロチギルディの傍そばまでずかずかと歩み寄ると、ギャラリーに聞こえないように、できるだけ小声で釈明する。
「エクセリオンショウツっていって……まあようするに、万一、も……漏もらしても、テイルギアの機能で吸収分解しちまうから、お前の望む光景なんて絶対にあり得ないってことだ」
　漏もらすこと自体あり得ないが、ここまで徹底して言っておけば、さすがに諦あきらめるだろう。
「できぬのか⁉　おもらしできぬのか⁉」
　そんな気遣いも虚むなしく、コックロチギルディは張り裂さけんばかりの大声で叫ぶ。
「……多分あんた、その最悪っていう上司の部下にはなるべくしてなったんだと思うわ……」

　ランスを地面に突き立てて支えにしているブルーが、肩で息を切らせながら吐き捨てる。
「生命力もゴキブリ並みね、こいつ……何回か槍やりは当たってるのに……」
　意を決して、両手を胸の前で交差させるブルー。
「エターナルパッド……！」
　激しい閃せん光こうが集束し、それぞれの手の平に、ブルーの進化装備エヴォルブアームズが握られていた。
『愛あい香かさん！』
「こいつ、見かけによらず手強いのよ……追い詰めて進化する前に、速攻で片付ける!!」
　トゥアールが通信でやけに焦あせっているように感じる。だが、周囲に人がいる場合だと、ブルーの最強進化チエインエヴォルブが一番汎はん用よう性が高く、最適のはずだ。
　新たなる姿・エターナルチェインへと変身しようと、ブルーがエターナルパッドを構えた時──周囲がにわかにざわめき始めた。
「……あれ何だ……まさか胸パッドか……!?」
「いやまさか、戦ってる最中に、そんな……」
「盛るのか、まさか!?　漏るんじゃなく盛るのか!?」
　一般人のピュアな好奇心が、ブルーのパッドへと傾注する。
「…………」
　ギャラリーの視線を感じるやいなや、ブルーは取り出したエターナルパッドを再び空間に溶け込ませるように消してしまった。やっちまった、と頭こうべを垂れて棒立ちになるブルー。
　イエローに続き、ブルーまで戦意喪失するとは……こうなったら、ギャラリーの目なんか気にしてられるか、俺一人でやるしかない！
「俺が相手だ、コックロチギルディ！」

「おお、おもらしをしてくれる気になったか!!」

　答え代わりにブレイザーブレイドで斬きりつけるも、カサカサと絶妙な足運びで回避される。

　間かん髪はつ容いれずに攻撃を続ける。俺が斬るのはこいつの身体からだじゃない……曲がった性根だ!!

「するしない以前に……はっきり言って、お前には共感できない!!」

「何!?」

「俺は今までいろいろなエレメリアンと戦ってきた……少なからず、人が嫌がることや行為を好む属性を持つ奴やつもいた！　けど……!!」

　けどそのエレメリアンたちは決して卑ひ下げしたりせず、大いに自分たちの愛を誇っていたじゃないか。たとえ敵でも、そいつらには幾度となく属性を愛する尊さを教えられた。

「ちょっと笑われるぐらい何だ！　そこでいじけちまうから……今に見てろ、って自分自身で頑張ろうとしないから、余計に笑われちまうんだろ！　俺を逃げ口上にするんじゃねえ!!」

　俺だって、人に笑われることは嫌だった。けど、世界にこんなにツインテールが芽吹くずっと前から、俺は自分自身の愛だけは絶対に卑ひ下げしなかった！　いじけたりしなかった!!

「人に打ち明けられない属性……エレメリアンだけじゃない、人間にだって持っている人はたくさんいる！　他人を理解しようとしないやつが、自分を理解してもらえるはずないだろ!!」

「その若さで、おもらしに理解のある世捨て人を識しるというのか、テイルレッド!!」

　節くれ立った腕でブレイドの刃やいばの腹を擦こすり、斬ざん撃げきを捌さばくコックロチギルディ。

　俺と夢を通じて触れ合う異世界の双子姫……妹のリルナは、その中で望まぬおねしょをしてしまい、ショックを受けていた。本来、おもらし

は自分からも請われてもするものじゃない。
　その一方で、おねしょにときめくとのたまい、その属性を奪われて苦しんでいた、リルナたちの側近の女騎士の悲しげな表情も重なった。
「少なくとも俺は、おもらしに理解がある人を知っている」
「おおお、何と……!?」
『──私じゃありませんよね!?　私のことじゃありませんよね総そう二じ様!?』
　心にやましさでもあるのか、トゥアールが過剰に反応している。
　トゥアールのことは全く考えていなかったのだが……言われて思い出せば、俺がソーラになった時に利尿剤を盛っておもらしをさせようとしてきた前科があった。
　……意外といるじゃないか、おもらしに理解のある人……。
「……目が覚めた……テイルレッドよ、横っ面つらにお前のおもらしをかけられた思いだ!!」
　そんな受け止め方するなら、今までの前言全部撤回させてくれマジで……。
「だが──気迫とは裏腹、攻撃がぬるいぞ、テイルレッド!!」
　回避の間かん隙げきに挑発される。人垣が狭すぎて、思い切りよく攻撃ができない。
　まるでその瞬間を今か今かと待つように、携帯やカメラを構える一般人たち。
　さすがに一度はビシッと言っておかないと、どこまでもエスカレートするだろう。
　俺はコックロチギルディに背を向け、拳こぶしを握り締めると、人垣をぐるりと見渡して訴える。
「い、いい加減にしなさぁ────────いっ!!」
　変身時にテンパると何な故ぜかいつもそうなのだが……またしても口

調が子供っぽくなってしまった。とにかく、俺に注意が向いたなら何でもいい。
「みんな、危ないから下がってて！　あんまりいうこと聞かないと……」
　すうっと息を吸い込み、あらん限りの声で叫ぶ。
「嫌いになるからねっ!!」
　周囲を取り囲んでいた一般人たちは戦慄わななきながら後あと退ずさり、携帯やカメラを下ろすと──ひれ伏すように跪ひざまずいた。
「「「「「ごめんなさい!!」」」」」
　誠意を漲みなぎらせた無装飾の謝罪。わかってくれたのはいいが、逃げてくれないかなあ。
　電撃的平伏を目まの当たりにしたコックロチギルディは、触角を震ふるわせて歓喜した。
「何というカリスマ！　人望なき我われらが隊長に、お前のツインテールの垢あかを煎せんじて飲ませたい！　いやむしろ俺もごくごく飲みたい!!」
「俺のツインテールに垢なんてない!!」
　失礼極まる侮辱に、思わず激げつ昂こうする。妙なところでゴキブリっぽい欲望を……！
「その愛らしき口が紡つむぐはもはや注意ではない、逆らうことすら本能が拒む神言も同然の圧倒的支配力！　この幼子、我らが偉大なる首領様と同じ領域にまで近付きつつあるのでは!?」
　やめてくださいマジで。
「レッド！　わたくしももう大丈夫ですわ！　アブソリュートリング!!」
　先ほどの注意を聞いたからか、呪じゆ縛ばくから解放されたようにイエローも戦意を取り戻していた。だが、その手には超絶の火力をもたら

す進化装備エヴォルブアームズが。
「待てイエロー！　こんなに人がいるところで……‼」
　制止は間に合わず、イエローはアブソリュートチェインへとパワーアップしてしまった。
　ブルーがパワーアップしようとしたからつられて……というわけではないはずだ。何か考えがあるのだろうか。
「何だあ⁉　テイルイエローがパワーアップしてるぞ⁉」
「い、意外とかっこいいんじゃないのか、あれ……」
「油断できないわ、子供が好きそうなかっこよさでおびき寄せて、一気に脱ぐ気かも‼」
　アブソリュートチェインが、一般人にアンコウの疑ぎ似じ餌えのような扱いをされている……。
　神経を集中しているせいか、イエローはギャラリーの好意的な反応に気付いていない。
　アブソリュートリングから首輪紐リードをエネルギーバイパスとしてヴォルティックブラスターに装着。出力を全開した主力武器、ヴォルティックブラスターフォートレスを構える。
　だがそれは、意識を引き付けるための陽動だった。コックロチギルディの注意が右手に持った銃口に向いた瞬間、イエローは左腕を真横に突き出す。
「ご心配なく、この前の特訓で実証済みの秘策ですわ！　属性玉エレメーラオーブ──男の娘属性ガールズボーイ‼」
　始動キーである男の娘属性ガールズボーイを装そう塡てんし、アブソリュートチェインでは初の、属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを左腕に追加装着するイエロー。属性玉エレメーラオーブを同時発動できる切り札だ。
「属性玉エレメーラオーブ──汗属性スウエット！　腋属性アームピッ

ト!!」
　そこへ多重装填したのは、それを組み合わせてしまうのか、という二つの属性。
　腋属性アームピットは一般人の避難誘導に使える光のトンネルを作り出していたが、それを汗属性スウエットと同時発動することにより──
「な、何だ……うおおおおおおおおおおおおおおお⁉」
　コックロチギルディの足元から光のトンネルが出現し、空に流れ落ちるようにその黒光りする身体からだを搗かち上げていく。
「さあ、参りましょう、ご主人様!!」
「え？」
　自らもそのトンネルの中に身を投じ、イエローはコックロチギルディの後を追う。
　いつの間にか首輪紐リードを腕に強制的に巻き付けられていた俺は、そのままイエローに引っ張られて光のトンネルに突入する。
　オフィスビルの屋上を地面と望む高度に達し、イエローは俺を連れてトンネルから離脱した。
　せっかく強化装着された全身の装そう甲こうを、イエローは何の未練もなく脱衣パージする。
　ギラついた目で俺を見てはあはあしながら、未いまだトンネルに巻き込まれているコックロチギルディへと宣言する。
「これで黄色じゃありませんわ……」
「何い⁉　もはや黄色より肌色が多めだと⁉」
　脱衣パージした装甲が合体、超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンが完成する。色彩を越えた勇猛を前に驚きよう愕がくするコックロチギルディ。
　急激な脱力感に襲われ手首に巻き付いた黄金の首輪紐リードを見ると、また俺のエネルギーが強制吸収されてイエローへピストン輸送され

ていた。待て、今チャージする必要ないだろ⁉
「完全解放ブレイクレリーズ‼」
　ほぼ零ぜろ距きょ離りで発射されたサブ武装が、雷の尾を引いてコックロチギルディへと殺到。光のトンネルを弾き飛ばし、強固な結界となって拘束バインドした。
「あなたを見て、我わが身を省かえりみましたわ……。わたくしも昔、本心ではツインテールを愛していながら、嫌いだと偽いつわりいじけていました……。愛を誇る大切さを教わらなければ……ご主人様に会わなければ、わたくしもきっと……‼」
　イエローは、誇り高き追憶を胸に飛翔する。
「く、俺は……俺は、このまま誰だれのおもらしも見ずに果てるのか……！」
「おもらし……は、心の隙すきがもたらす悲劇……！　見せろと言って見せられるものではありませんわ！　わたくしは一度だけ、レッドと仲間の証として分かち合いました……‼」
　…………そういえばトゥアールに利尿剤盛られそうになった時、慧え理り那なも……。
「は、ははははははは……おもらしを分かち合っただと……！　しかと聞いた‼」
「聞くなああああああああああああ‼」
「不出来の部下だが、これで隊長に恩は返せよう……！　おもらしを分かち合うほどの関な係か！　隊長、密命はすっかりド忘れしておりましたが、この二人ならばちゅーをできましょう！　あなたの望む百ゆ合りのままに……‼」
　！　ちゅー……こいつ、またそんなことを……⁉
　空中で拘束バインドしたコックロチギルディ目掛け、雷神の光をまとったイエローが迫撃する。

「コズミックジャッジメントオオオオオオ――――――――――――――――ッ!!」
　イエローの蹴しゆう撃げきに貫かれる瞬間、コックロチギルディは叫んだ。
「馬ば鹿かだが、我わが隊長は強いぞ！　果たしてその力を目の当たりにして、おもらしをせずにいられるか、ツインテイルズよーっ!!」

◇

　摩天楼に迸ほとばしった雷光を、ブルーは頼もしげに振り仰いだ。コックロチギルディの変態性にやや圧倒されてしまった自分を恥じるように苦笑する。
「イエローも、いろいろ考えてるのね……」
『ええ、周囲に被害を与えず、それでもセーブしすぎず戦えるよう、日頃ごろから綿密にシミュレーションをしているようです。さすがは慧え理り那なさん』
　ブルーほど戦闘センスに恵まれないイエローは、日々の努力でそれを補っているのだ。
　トゥアールは、ブルーだけに回線を限定し、先ほどの軽率な行いを窘たしなめる。
『一般人にパッド盛りを見られたくないという弱点が判明してよかったですね、ブルー』
「はいはい、悪かったってば……」
　その一般人はといえば、さすがにあの大爆発を目の当たりにしたのと、地上にブルーしか居なくなったからだろう、いつの間にか蜘く蛛もの子を散らすように居なくなっていた。
「でもさ、あたしもセーブしてらんないわよ、トゥアール。死の二菱

ダー・イノ・ランヴアスのエレメリアンは強いわ……。変態力もね……」
　パワーアップしなければランスを直撃させることも難しい、侮あなどりがたい回避力──。
　不調も影響しているとはいえ、ブルーは今日の戦闘を思い出し、きゅっと唇くちびるを噛かんだ。

　だが、その存在に気付かなかったのは、不調ゆえではないだろう。ブルーだけではない。現場をモニターしているトゥアールも、レッドと繋つながった首輪紐リードに喜びオフィスビルの屋上を駆け回るイエローもだ。
　ビルとビルの隙すき間まに身を潜める──帝王らしからぬ隠密行動。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長自ら、戦場を密ひそかに窺うかがっていたなどと、誰だれが想像できよう。
　部下に百ゆ合りを説くため、現地で対象を確認する。白鳥が水面下で足を掻かくかのような日の目を見ぬ努力は素晴らしいが、影からこっそり見守る姿が絵になるというのも、皮肉な話だ。
「…………まずはレッドとイエローが候補か。よくやった、コックロチギルディ……」
　部下の今いま際わの際の叫びは、計らずして直じかに隊長へと届いた。
　その金星を讃たたえつつも、ティラノギルディは疑問に顔を歪ゆがめていた。
　イエローに抱きつかれるレッドを見ても、百ゆ合りセンサーたる牙きばが全く疼うずかない。
　はあはあしているイエローは明らかに従僕に重きを置いた好意を持っているようだが、百合ポテンシャルを一切感じない原因は、間違いなく

レッドの方にある。
　間近で見たことで、レッドへの疑念が一層際立ったのだ。
　テイルレッド……最強のツインテール属性を持つあの少女には、必ず何か裏がある。

◇

「ははははははは、敗れたか！　ちゅーの命令をガン無視しておきながら、おもらし一つ見れずに果てるとは不ふ甲が斐いない！　まあ、レッドとイエローにまずは百合の可能性があると報告してきたことは、役に立ったと言えよう！」
　アルティメギル基地のホールに戻ってきたティラノギルディは、さもその場でコックロチギルディの敗戦の報を聞いたように振る舞い、相も変わらずの高笑いを上げた。
　ティラノギルディが斃たおれた部下に捧げる偽りの罵ば倒とうは、彼なりの鎮魂歌レクイエムだった。
　その後自室に戻り、鮮やかな無数の少女フィギュアで日課の百合妄想に励もうとした時──ティラノギルディは、棚たなの端はしに端整な顔立ちをした青年二人のフィギュアが置かれている異様に気付いた。
「むう、この男っ気たっぷりのフィギュアはいったい……!!」
　大きく胸元を開けた白と黒のシャツをそれぞれ着こなし、ＢＬの香りを無言のままに迸ほとばしらせるフィギュアに、ティラノギルディは戦せん慄りつする。

「気に入ってもらえました？　ティラノギルディ君」

　部屋の奥から予想だにしない女声が響き、ティラノギルディは大おお

仰ぎように振り返った。
　帝王の不覚。ＢＬの波動に注意を割さき、曲くせ者ものが部屋に潜んでいることを見抜けなかった。
「お、お前は!!」
　背に装飾された剣のエンブレムをしつらえた、白いローブで全身を覆おおったエレメリアン──顔を深く隠したフードからは、意志の光迸る双そう眸ぼうだけが主張する。
「馬ば鹿かな、何な故ぜここへ──まさか!!」
　障害を暗示する最後の一枚ひとり──首領との謁えつ見けんを思い返し、総毛立つティラノギルディ。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長たる自分を罰することができる存在──それは今や、全知全能たる首領を除けば、アルティメギル首領直属軍最後の一部隊を残すのみだ。
　だがその禁断の部隊が動き出せば、事態は自分の処罰などでは収まらない。
　ティラノギルディの危き惧ぐを察したのか、その女性エレメリアンは穏やかな声で応えた。
「違うわ。部隊は動いていない。私だけ」
　ダークグラスパーの去ったこの基地で、透き通った女性の肉声が響くこと自体が、もはや非日常。
　ティラノギルディは部屋の端に立ったまま動かず、警戒心たっぷりに話しかけた。
「では、何用だ。まさか、独断ではあるまいな。だとすれば、貴様とてただでは済むまい」
「当然独断だけど、ただで済むわ。部隊でも私は特別。部隊間移動をする権利があるし、それが仕事でもあるから」
　ローブ姿の女性エレメリアンは、いずこからともなくＢＬゲームの販

促ポスターを取り出し、部屋の壁に貼り付けた。
「もっとも、戦闘にはその自由も及ばないけど」
「当然だ。そのあまりの危険さゆえ、首領様直々に動くことを禁じられた部隊……。貴様たちが侵攻をするなど━属性力エレメーラの奪取どころでは済まない。その世界の終わりだ」
「君たちはそれに次ぐ危険な部隊だったはずだけど、全然侵攻が進んでないみたいね？」
　会話の間かん隙げきに、ＢＬの侵略は続く。机の上に、ＢＬドラマＣＤを山積みにする。ご丁てい寧ねいに、今さっき聞いたかのように演出しようと、一番上のケースは開きっぱなしにして。
　よもやこの過あやまち、部下に見られでもしたら……。ティラノギルディの頰ほおを冷や汗が伝う。
「当ててあげましょうか。君は、この期におよんで人間の未来を憂慮している。百合属性ガールズラブの拡散……即ち、子孫繁栄の鈍化」
「ふん、知ったような口を」
「ええ、知ってるもの、その憂うれいは」
　黙っていれば、今度はＢ５サイズの薄い本が堆うずたかく積まれていく。この世界の有名なゲームやアニメのキャラの絵が描かれた本に紛まぎれて、自分とトリケラトップギルディが表紙に描かれた本があったように見えたが、見間違いであって欲しい。
「だから処刑部隊の隊長にされたんでしょう？　少しは吹っ切りなさい……どうせ私たちが侵略した世界の人間には灰色の未来しかない。敬意と生存本能は別物よ」
「いい加減、要件を言え。あと、本の方は本当に勘弁してくれ」
　白いローブが嘲ちよう笑しように揺れる。
「この世界の敵、随分と強いみたいじゃない？　特に……テイルレッド、だっけ？　ユグちゃんを倒したっていう幼子」

「……何？　ユグドラシルギルディ女史を倒したのは、ダークグラスパーではないのか？」
「ユグちゃんはダークグラスパーには相性最悪の相手よ、彼女じゃ勝てないわ」
　自分が聞いた報告と違う。何な故ぜ、テイルレッドが倒したことを隠して教えられたのか。
　貴の三葉ノー・ブル・クラブまでツインテイルズが倒していたと知っていれば、警戒の度合いももう少しは違っていただろうに。帝王たるもの、余裕であれという首領のお心遣いだろうか。
「私も、親友であるユグちゃんが倒されて、思うところはあるし……尻に火のついた部き隊みへお土産みやげよ」
　ローブのエレメリアンは、袖そで口から何かを取り出した。
　ＢＬドラマＣＤと薄い本の間に置かれたのは、黒い菱ひし形がたの宝石。属性玉エレメーラオーブに酷似しているが、何のエンブレムも刻まれていない。
「名付けて、首領の吐息ゴッド・ブレス……」
　首領の名を冠した宝石が、よりによってＢＬに侵食された腐ふ海かいに鎮座ましましている。ティラノギルディは慌てて駆け寄った。
「ぬう、畏おそれ多い……!!」
「使うのを躊躇ためらうくらいで丁ちよう度どいいものだもの。これはサンプル。量産方法は、この本のあとがきに隠し書きしてあるわ」
　自ら堆たい積せきさせた腐界から、一冊の薄い本を取り出すローブのエレメリアン。機密保持にしても、情報を書き記す場所は入念に吟ぎん味みして欲しい。
「量産？　その宝石が我われらの戦いにどう役立つというのだ」
「これを肉体に撃ち込めばエレメリアンの潜在能力を解放することができる。いわば強制的に最終闘体を引き出すの」

　そんな都合のいいデバイスが、何のデメリットも無しに運用できるはずがない。
「副作用があるのではないのか？　みすみす部下たちに危ない橋を渡れと？」
「どのみち今のまま出撃させ続けても勝ち目は薄い……そんな手て強ごわい連中なんでしょう？」
「……それは……」
「使ったが最後確実に命を落とすわけではない。勝って帰れば命を繋つなげる。現状よりもよほど人道的だとは思うけれど」
　科学者らしい、合理的な発想だ。だが、すんなりと受け容いれられるものでもない。
「それは使う者を選ばない。戦闘員アルテイロイドも一般兵も、等しく限界以上の力を引き出せる」
　ローブのエレメリアンは駄目押しの一言を加えた。
「───もちろん、君のような大幹部の位にある超越者であってもね」
　首領の吐息ゴッド・ブレスを手にし、震ふるえるティラノギルディ。
「フン、小こ賢ざかしい。帝王に小細工など不要。こんな玩おも具ちゃに引き出せるほど、我わが力の底は浅くはないわ」
「ふふ、それは失敬」
　悪びれない侵入者。皮肉も心ここ地ちよく受け止めている。
「ありがたいかどうかは知れぬが、頂いておくぞ」
　何かを決意したようにまなじりを決し、帝王はローブの奥の瞳ひとみを見み据すえる。

「アルティメギル科学班最高責任者……マーメイドギルディよ……!!」

　腐フ腐フ腐フ……と。ＢＬに侵略された部屋が、彼女の聡そう慧けい

な微笑ほほえみに震ふるえる。
「史上最高の頭脳の先代に遠く及ばない、出来の悪い二代目らしいけれどね？」
　壁に貼ったＢＬのポスターに、溶け込むように消えていく白いローブのエレメリアン。
「百ゆ合りの拡散──楽しみにしているわよ、帝王くん」
　ティラノギルディは時が経たつのも忘れ、その漆黒の宝石を睨にらみ続けた。

◇

「ん……」
　微睡まどろみながらベッドから上体を起こし、俺は目覚まし時計で時間を確認した。
　朝五時──読み間違いを疑ったが、壁時計を見てもやはり時間は同じだ。
　ロエルとリルナは最近夢通信をしてこないし、今日は愛あい香かとトゥアールが部屋でじゃれ合ってもいない。最近あえて開けっ放しにしておくようにしているクローゼットにイースナが潜ひそんでいるわけでもなく、勉強机の隣に設置された犬小屋を見ても、慧え理り那なの姿はない。
　騒がしさの欠片かけらもない、穏やかな朝だ。
　むしろ、唐突に起こされることが多くなって、俺に早起きの習慣が身についてしまったのだろうか。
　それは悪いことではないが──いかんせん、身体からだがだるい。
　二度寝をする気分にもなれず、部屋の電気を点つけようとベッドから立ち上がった俺は──ツインテールの気配を感じ、振り返った。

「⁉」
　一瞬、また寝ぼけて寝ている間に変身してしまったのかと思った。そして、いつの間にかベッドの横に大きな姿見が置かれていたのかと。
　そうとでも考えなければ──俺の目の前にテイルレッドがいる説明がつかない。
　薄明かりの中、目を凝こらす。
「テイルレッド……いや、ソーラ⁉」
　目の前のテイルレッドは、テイルギアではなく、陽よう月げつ学園高等部の女子制服を身にまとっていた。
　やや幼さは残るものの、女の子らしく成長した姿……それは紛まぎれもなく、俺がかつて変身を解いても男に戻れず、完全に女の子になってしまった姿──ソーラ・ミートゥカだった。
「何で、君がここに……」
　自分自身にそんな呼びかけをするのは滑こっ稽けいだが、そこまで考えが回らないくらい、俺は混乱していた。
　真っ先にソーラのツインテールを確認する。
　結び目にあるのは、愛あい香かからもらったリボンとも、プログレスバレッターになる前のトゥアールのバレッタとも違う、真まっ赤かなリボンだ。
　俺がソーラになっている間には、一度もつけた覚えのないリボンだ……。
「…………」
「え？」
　小さな唇くちびるが動き、何かを呟つぶやいている。
「ツ、イ、ン……テー、ル………………ツインテール⁉」
　俺が復唱すると、ソーラは悲しそうに目を伏せ、その身体からだが輪郭だけを僅わずかに残して激しく閃せん光こうを放った。

「待っ……!!」
　あまりの眩まぶしさに腕で目を覆おおい、数秒後もう一度目の前を見ると……そこにはもう、ソーラの姿はなかった。
　呼吸を整えると、俺はもう一度目覚まし時計を確認した。
　時間は五時五分。……単に寝ぼけていただけ、だろうか……。
　しかし、あのツインテールの存在感、幻覚とは思えない。



　あるいは、俺のツインテールへの空想は、存在感を備えるまでに成長してしまったのか。
「でも、何でソーラなんだ……」
　不意に言い知れぬ不安を覚え、思わず俺は胸の前で右腕を構えていた。
「テイルオン……」
　つい小声になりながら、変身機構起動略語スタートアップワードを呟つぶやく。
　常夜灯とカーテン越しの朝日で薄明かりが射していただけの部屋が、紅あかい輝光で眩しさを取り戻す。
　再び訪れた薄明かりの只ただ中なかで佇たたずんでいたのは、いつも通りのテイルレッドの姿だった。
「……疲れてるんだろうな」
　俺はそう結論づけて変身を解除した。
　そろそろ本気で疲労対策を講じないといけないかもしれない。朝っぱらから、あんな幻覚を見るなんて……。

〝ありがとう、ソーラ。またいつか──逢あおう〟

　心の中でそんな約束をしていたことを、何な故ぜかふと思い出した。

テイルギア設定補足 01



テイルブレス

TAILBRACE

アルティメギルに供給された属性力（エレメーラ）技術。それを、天才科学者にしてかつてその世界で最強のツインテール属性を誇っていた少女トゥアールが最大限に解析・応用し完成させたブレスレット。適格者が自身のツインテール属性を同期させることで起動し、空想装甲テイルギアを生成。瞬時に装着が完了する。変身前のブレスの状態では認識攪乱装置（イマジンチャフ）が装着者のツインテール属性の秘匿に作用。これにより、ツインテールの戦士としてアルティメギルに逐字動向を探られるリスクをトゥアールは回避した。また、それと連動してブレスそのものも普段は装着者、周囲の認識から遮蔽されており、日常生活に影響はない。変身時に意識を集中させることで、初めて可視化される。全異世界最高を誇るアルティメギルの属性力（エレメーラ）運用技術を一部とはいえ上回っているため、テイルブレスを制作できるのは現在全異世界にトゥアールただ一人である。

アルティメギルが各異世界を回り、ツインテールの戦士に選んだ少女に供給する属性力（エレメーラ）の技術は、自分自身のツインテール属性を使用するための基礎。姉妹合体という応用をしているものの、魔法少女に変身するロロリーも例外ではない。トゥアールは初めてブルーのテイルギアを作る際、もう一つのツインテール属性の属性玉を所持していたことになるが、それをどのように入手したのかは未だ謎である。



第三章　テイルレッドの唇くちびる争奪戦。

「頼む！　ちょっと他のツインテイルズとちゅーしてくれ!!」

　それが、今日戦ったエレメリアンの最期の言葉だった。
　もはや聞く耳持たぬとブルーのエグゼキュートウェイブが炸さく裂れつ、あっけなく爆散したのだ。
　最近いつもこの調子だ。ここまで来ると隠そうともせず露骨に、俺に他の誰だれかとキスをしろと懇願してくる。
　コックロチギルディとの戦いを皮切りに、それまでの静寂が嘘うそのようにアルティメギルの出現頻ひん度どは上昇した。しかも、混成部隊の残存兵士と思われるエレメリアンと、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの古代生物モチーフのエレメリアンとで、おおよそ交互に現れている。
　せっかく俺たちのクラスの出し物も占いの館と決まって、これからは放課後の準備に力を入れたいというのに、由ゆ々ゆしき事態だ。
　それで口を開けば皆「ちゅーしろ」なのだから、おそらく現在の全兵の総意、部隊をあげての目標ということになる。

　今日の戦闘後━俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナ……そして母さんは、トゥアールの作戦会議に参加した。
　地下基地メインルームのモニターに、トゥアールはここ最近現れたエレメリアンの発言から導き出された情報を表示していた。
「結論から言うと、これからの戦いの鍵かぎとなるのは、百ゆ合りです」
　メインモニターに、デフォルメチックな女の子二人が抱き合うイラス

トと、「百合」の二文字が大きく映し出された。
「ゆり……ですか」
「女の子が女の子を好きになる関係です」
　勉強熱心な慧理那は、今回もトゥアールの属性解説を熱心に聞いている。
　以前の慧理那なら聞くだけで赤面していたと思うが……逞たくましくなったなあ。
　ビフォーおもらし、アフターおもらしというぐらい、コックロチギルディの属性が強烈だったことが大きいが。

「トゥアールさんと津つ辺べさんは、ゆりですか？」
　無邪気な笑顔のまま放たれた質問に、愛あい香かのツインテールとトゥアールの白衣が逆立つ。
「慧え理り那なさん……慧理那さん慧理那さん慧理那さん慧理那さん慧理那さん慧理那さん」
「会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長会長」
　愛香とトゥアールが一糸乱れぬ歩調で慧理那へと近寄り、その小さな肩を左右それぞれからそっと摑つかんだ。
「いいですか慧理那さん、女の子が二人居たら百ゆ合りというわけではないんです、それだと生きとし生ける全ての女子が百合ということになってしまいます‼」
「そうよ、男二人でちょっと仲良くすればＢＬだとか、女二人でちょっと仲良くすれば百合とか、それじゃあ友情全否定よ‼」
「びーえる……あ！　わたくし知ってますわ！　先輩のどうじんし！　ね、観み束つか君‼」
「…………ソウダネ……」

　慧理那は勉強熱心だし、得た知識を余さずどんどん吸収していくなあ……。
「でもわたくし、津つ辺べさんもトゥアールさんも好きですが……ゆりではないのですか？」
　属性に関する無邪気なクエスチョンにお答えしますと、白衣のトゥアール先生が聖職者にあるまじき邪悪な舌なめずりをしながらにじり寄っていった。
「悩むより実際に体験してもらいましょう！　天てん井じようの染みを数えながら、慧理那さんは好きと百合の違いを知るはずです!!」
「天井の染みになれボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」
　トゥアールを天井に埋め込むと、愛香は嚙かみ砕いた百合の説明を続けた。
「う、うふふ、二人とも……自分たち以外とは百合になりたくない、んですね……」
　妙に席をくっつけ、肩を俺の腕に触れ合わせて隣に座るイースナ。
「その小こ賢ざかしくあざとい仕草は何ですかイースナ。総そう二じ様から離れなさい」
「し、しばらく会えなかったから……総二さんとイチャイチャする……」
「たった数日じゃないですか！　しばらくは総二様の下着も平和だったものを！」
　……何な故ぜトゥアールが俺のトランクスの無事を把握しているんだろう……。
「わ、若いと、その数日が、何年にも感じる……」
　イースナは自分の発言を携帯に打ち込んでいった。曲のフレーズが浮かんだのかもしれない。

　トゥアールはこめかみをひくつかせながらも、会議の進行を優先した。
「おそらく今回は、巨乳属性ラージバスト・貧乳属性スモールバストのリヴァイアギルディ・クラーケギルディの時のケースに近いですね。自分から名乗っていたように、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長ティラノギルディは百合属性ガールズラブ。隊長が愛する属性を、自分の属性に関係なく部隊一丸となって拡散しよう、という算段ではないでしょうか」
　巨乳貧乳紛争を思い出したのか、愛香のツインテールが怒りに震ふるえている。
「でもさ、何かあいつらの話聞いてる限り、みんな嫌々っぽいわよ？」
　頬ほおを引きつらせる愛あい香かの言葉に、イースナがふ、と薄ら笑う。
「ティ、ティラノギルディは、人望ないんです……。私と違って……」
　イースナの後ろに控えているメガ・ネ。その硬質の容よう貌ぼうが、溢あふれんばかりの慈愛に包まれて見えた。言いたいことは山ほどあるが、胸の裡うちに秘める。おかんの鑑かがみだ。
　トゥアールは努めて冷静にイースナに尋ねた。
「で、イースナ、他にティラノギルディについて何か知っていることはありますか」
「とにかく、強さは、本物……。首領ですら、ティラノギルディの強さには、信頼を寄せていたと、思います……」
「つまり、力で部隊に恐怖政治を強いしいてるってことか……？」
　ＮＧシーンの総集編のようなあのグダグダ生放送からは、とても想像できない。
「能力は？　またとんでもない無茶苦茶やらかすんじゃないわよね」
　トリケラトップギルディの能力の恐ろしさを肌で知っている愛香だけ

に、今後強敵との戦いは純粋な戦闘力だけでなく特殊能力にも焦点を置くのだろう。
「……滑ります……。ティ、ティラノギルディは、ユーモアセンスが皆かい無む……。部下をどっかんどっかん湧わかせていた私とは、大違い……」
「それ、能力って言いますかぁ？」
　疑わしげに睨ねめ付けるトゥアールと、イースナが何を言おうと優しく見守るメガ・ネは、この場においては対照的だ。
　聞けば聞くほど、ティラノギルディってイースナと似ているんじゃ……。
　イースナは俺の肩に頭を寄せ、げへげへと甘く囁ささやいてきた。

「そ、総そう二じさん……。次の戦いで、あいつらの前で、私とキス、しましょう……」

「「はあああああああああああああああああああああああああああああああ!?」」
「えええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ!?」
　愛香とトゥアールがピッタリとハモり、慧え理り那なはもう少しお上品に。メインルームを揺るがす叫び声を上げた。
　今日も女幹部コスな母さんが両手で頬ほお杖づえをついてニヤニヤしながらこちらを窺うかがっている。
「何言ってるんだイースナ!?」
「世界の平和の、ためです……。だ、大丈夫……もう、私たちは、キス、してますから……」
「それは俺がテイルレッドに変身してる時だろ!?」

　まだイースナが敵だった時、戦いが終わった後で挨あい拶さつのように俺に唐突にキスをしたんだ。
「……また、レッドに変身した総二さんと、私で、キス……。二度目だから、慣れっこ」
　あ、そうか。なーんだ、じゃあ大丈夫だ。
「……いや待て納得しかけたけどおかしいぞ⁉」
　うっかり言いくるめられそうになったが、全く理屈に合っていない。
　メガ・ネが身振り手振りを交えて補足してきた。
「えーとな、総そう二じ君。多分イースナちゃんは、テイルレッドのキスを見ない限り、エレメリアンのみんなは意地になってどんどん現れるんやないかな、ちゅーことが言いたいんや。現れる頻ひん度どは少ない方が、世界の平和に繫つながるもんな」
「え、えへへ、そう、そう……さすが、メガ・ネ……」
　イースナも賛同する。
「メガ・ネがそう言うんだったら……」
　本来ならそれで普通なのだが、俺たちの中では逆に希け有うな存在である常識人なためか、メガ・ネの言うことは、無条件で信用してしまう。
　愛あい香かとトゥアールと慧え理り那なが、母さんに何やら耳打ちされていた。
　経験則が、これは困るパターンだと俺に告げている。
「――――なるほど。イースナ。あなたの言いたいことはわかりました」
　トゥアールはテーブルに手をつき、胸をやけに強調するポーズでイースナに問いかけた。
「ところでイースナ。あなたがテイルレッドとキスをしたことは、アルティメギルの連中は知っているのですか？」
「し、知ってます……。私が、みんなの前で詳しく、教えたから……」

……自慢したのか……。
　トゥアールは口くち端はを吊つり上げ、イースナに勢いよく指を突きつけた。
「はい、脱落!!」
「な、何で……!!」
「もうキスしたと知っているあなたとレッドがキスしても、インパクトはありません！　当然あいつらは満足しないでしょう、あなたでは力不足です!!」
「あ、あの時より、もっとディープに、する……!!」
「百ゆ合りなんて可愛かわいらしく言ってる以上、エレメリアンはキュートなちゅっちゅが見たいんです！　ぬちょぬちょしたのはドン引きします!!」
　何やらよくわからない分析を盾たてにイースナと喧けん嘩かし始めるトゥアール。
　俺の袖そでが、横からか弱い力で引っ張られる。
「……そーじ。イースナの言うことを聞くのは癪しやくだけど……あたしもその通りだと思う。見たいもんが見られれば、あいつら大人しくなると思うし……」
　妙に紅あかくなった頰ほおを波打たせながら、愛香がちらちらと俺を窺うかがってきた。
「テ、テイルレッドとなら女の子同士で、何とも思わないし……次の戦いで、テイルブルーとキス、して見せる、とか、さ……」
「いや……でも……」
　その女の子同士でイースナがレッドにキスした時、これまでで一番荒れてエレメリアンに八つ当たりしてなかったか、愛あい香か。
　女子同士、って考えれば、女の子なら気にならないものなのか？　俺はすごい恥ずかしいんだけど……。

「女の子同士に抵抗あるなら、変身前に練習しても……むしろそっちの方があたしは……」
　ひゃああ、と叫び机を平手で叩たたく愛香。机にハンマーを打ちつけたような打だ痕こんが広がる。
「お待ちください、津つ辺べさん！」
　今度は慧え理り那なが、愛香が引っ張っている方とは逆の袖そでを摘つまんできた。
「忘れてはならないのは、そのキ、キス……を、テレビ中継されてしまうかもしれないという点ですわ！」
　俺を挟んで、愛香と向き合う慧理那。
「最近テイルイエローは、頑張りが認められて以前よりは好意的に報道してもらえるようになりました！　ですから……キスは、レッドとイエローが相応ふさわしいと思います！」
　……見た目だけは、って注釈がわざわざいつも入れられているけど……。
「それはまだアブソリュートチェインではボロ出してないからでしょ!?　キスした拍子に興奮して脱衣パージしたらそれこそ発禁よ、あの絶対脱衣形態アブソリュートブラストモードとかいうのだと!!」
「白金？　ええ、プラチナのように煌きらびやかな口付けをやり遂げますわ!!」
「会長は全校でそーじと噂うわさにされてるんだからこっちは譲ってよ!!」
「な、何のことでしょう、それに、この中では私が一番お姉さんですもの、最後はやっぱり年齢順ですわ!!」
　愛香と慧理那がヒートアップし身を乗り出すので、挟まれている俺に揺れるツインテールが交互に触れていく。温かな気持ちになり、みんなの言い争いが頭に入ってこなくなる。

「待ってください年齢順というならわた──いえ、慧理那さんが一番年上ですね!!」
　横から慧理那に絡むも、言葉半なかばに取り繕つくろい、またイースナとの喧けん嘩かに戻るトゥアール。
「……トゥアールさん……」
「基地を出禁にされたくなかったら黙っていなさい!!」
「ウチはイースナちゃんがいいと思うかなー……ほら、レッドちゃんと身長近いし」
　みんな単騎で意見を出していく中、おかんの援護を受けイースナが優勢に立つ。
「ど、どの道トゥアールさんは、戦場では、仮面つきだから、ちゅーできない……」
「仮面のバイザーを半分だけ下ろしたり、いくらでもやりようはあります！」
　大丈夫かな、何か聞き逃のがしたらいけない言葉が乱舞していないかな……。ツインテールと一緒に、俺の意識もふわふわする……。
「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハこれよ！　これ！　やっぱりハーレムはこうでなくっちゃ！　たまにはピュアッピュアなバトルもスパイスよねー!!」
　母さんがよだれを滲にじませながら、女幹部らしく邪悪に大はしゃぎする。
　よくわからないが、みんな母さんに踊らされてないだろうか。
「ええい、このまま言い争っていても埒らちがあきません！」
　トゥアールはイースナに背を向け、テーブルの上で倒立して下着を見せながら、愛あい香かを押しのけるように俺の目の前に着地した。
「総そう二じ様……こうなったらこの場で一人ずつ唇くちびるを試してみてください！　一番具合のいい女を本番で使いましょ──」

「好きなだけ地面とキスしてろああああああああああああああああ!!」
「ごああああああああああああああああああああちょっと懐かしいフレーズ!!」
　口くち喧げん嘩かだけで済んでいたのに、愛香が均きん衡こうを破ってしまった。
「最終的に同じことしたがってるくせに、何なんですかこのむっつりエセピュア蛮族は!?」
　愛香はトゥアールの両足首を抱えて餅もちつきの杵きねのように操り、頭を床にスタンプしていく。せめてもの抵抗か、トゥアールはペッタンペッタンと擬音を発している。
　数週間前は体調の悪さを危き惧ぐしたけど、この技のキレ……復調したみたいだな。
　しかし、みんなが大丈夫だとして。俺もテイルレッドに変身している時だから挨あい拶さつのようなものだと考えるとしてもだ。
　アルティメギルの望む光景を見せるというのは、危険な側面も孕はらんでいるのではないだろうか……。

◇

　総二たちの世界には、これまで多くの部隊が投入された。
　兵たちは誇りを持って作戦行動を遂行し、そして散っていった。結果はどうあれ、悔いも過あやまちもそこには存在しなかっただろう。
　だが、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが合流してからというもの、残存兵たちは初めて空回りを実感していた。
　首領直属軍・死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは、元々は異世界に誕生した強力なツインテール戦士の打倒などを主任務とした、生きつ粋すいの武闘派部隊。

　部隊そのものに侵略ノウハウが足りず、その上残存兵で構成された現侵略部隊とで足並みを揃えなければならないのだから、人望のあるトップ、切れ者の補佐役が不可欠である。
　しかし今、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの補佐役は倒され、トップに人望はない。
　隊長がただの我わが侭ままに等しい個人的な欲望を作戦目的として掲げ、何の戦略もないまま戦士は出撃を命じられる。案の定、何をすればいいかすらわからず、いたずらに命を散らす。
　そんな日々を続け──侵攻部隊に、一つの変化が生まれていた。
　一般兵たちの、精神的成長である。
　上司が駄目なら、俺たちが頑張らなければ。
　そこまでダイレクトではないにしろ、皆それに近い思考で奮起しているのだろう。
　総そう二じたちにとっては厄やつ介かい極まりないが、侵略部隊は足並みを揃え始め、出撃頻ひん度ども増加傾向にあった。隊長の独断専行が功を奏したのかもしれない。

　今まさにライブで繰り広げられている戦闘の中継映像をホールで確認し、ティラノギルディは満足げに口くち端はを吊つり上げた。
　テイルレッドが、口元を隠しておろおろしている。時折頬ほおを染めたり、涙目でエレメリアンからそっぽを向く。
　ホール内に、ウオオオオオオと盛大な歓声が上がる。兵士たちは拳こぶしを握り締めガッツポーズをせずにはいられなかった。
「フフフフ……。テイルレッドは明らかにちゅーを意識しておる」
　出る敵出る敵みんな口にしているのだから警戒されるのは自明の理だが、それもまた狙ねらい通りと言えるだろう。
『我慢しなさい……レッド！　ね⁉　ね⁉』

『目を瞑つむっておればすぐに終わる！　痛くはせぬゆえじっとしておれ!!』
『世界のためですわ！　世界のためですわはあはあ』
　テイルレッドが大人しいのをいいことに、じわじわと包囲するように迫る野性味溢あふれる他のメンバーたち。
　それが画面に映るやいなや、戦士たちの歓声は一斉にトーンダウンしていった。
　違う、何か違う。自分たちの想像してた百ゆ合りと違う。
『……仕方ない……イエロー、ブラック、レッドの腕押さえて!!』
『や、やっぱり無理だーっ！　わー助けてー!!』
『危ないテイルレッド！　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』
　ブルー、イエロー、ブラックに押し倒されそうになるレッドを助けんと、必死の形相で立ち向かうエレメリアン。
　目を血走らせた青黄黒が振り返り、邪じや魔まだ、とばかりに息ぴったりのコンビネーション技を放つ。決死の覚悟虚むなしく、エレメリアンは一いつ蹴しゆうされた。
　誰だれからともなく、映像に向かって敬礼を送るホール内の戦士たち。
　部隊のまとめ役を担うスパロウギルディが、ティラノギルディへと畏かしこまる。
「し、しかし、ツインテイルズの他のメンバーはかなりレッドへの好意を見せつけるようになりましたな……。これで人間どもがテイルレッドの百合を見れば、ティラノギルディ様の掲げる百合属性ガールズラブもまた世界に芽吹くことでしょう」
　玉座に座したまま、ティラノギルディはモニターのテイルレッドを訝いぶかしむようにひたすら凝視し続けていた。

「テイルレッドは可愛かわいい。それは認める。だが……どうしても百ゆ合りを感じぬ」
　せっかく兵士たちの士気が上がっているというのに、盛り下がるようなことを口にする。
　そこは、空気を読んで『テイルレッドの百合いいよね』と率先して言うべきところなのだが……。
「……スパロウギルディよ。テイルレッドについて、何でもいい、気になることはないか。幼いという以外の理由……百合を拒こばむ特質のようなものでもよい」
　百合のエキスパートであるティラノギルディには、どうしても譲れない部分のようだった。
「テイルブルーに百合を感じないというのであれば、わかるのですが……そういえば、アラクネギルディ様の門下の戦士たちは、テイルブルーを男おとこの娘こではないかと疑っておりました」
「……男の娘……か……」
　ティラノギルディの視線は、その誇り高き汚名を受けたテイルブルーではなく、モニターの中央、涙目で縮こまるテイルレッドへと注がれていた。
「…………ふむ」
　ティラノギルディはおもむろに左手を肩上に掲げ、勇ましく指を鳴らした。
　何かの合図かと、ホール内の兵士たちはすぐに統率された静寂を捧げる。
　一〇分も待ち、何も起こらないことに皆が疑問を抱いだき始めた頃ころ、ティラノギルディは痺しびれを切らして携帯電話を取り出し、いずこかへ電話をかけた。
　やがてホールの入り口から、のっしのっしと豪快な足音を立ててエレ

メリアンがやって来た。
「俺が指を鳴らしたらやってくるように示し合わせておったではないか……!!」
「部屋にいだら聞ごえねーだよ～」
　濁音たっぷりの強い訛なまり声で応こたえる、巨漢のエレメリアン。
　全身甲かつ冑ちゆうにすっぽりと覆おおわれたような、丸い巨きよ軀く。巨大な蹄ひづめの目立つ足と、それと同じ雄々しい蹄を尖とがらせる肩部。不思議なフォルムのエレメリアンだったが、その特徴も珍妙な喋しやべりには埋もれてしまうだろう。
「ブラキオギルディ、そろそろ貴様に出撃してもらう」
「んだば、今週の日曜日でもいいがなあ？　外さ出る用事あっがらさあ」
「よかろう。必ずやちゅーをさせるのだ!!」
　ブラキオギルディ──そののほほんとした佇たたずまいの奥には、不動の剛強さが充じゆう溢いつしていた。

◇

　晴れ渡る青空に鳴り響く号砲。
　今日は、高校生活初めての文化祭だ。
　祭りは、通い慣れた校舎を非日常へと変える。俺と愛あい香か、トゥアール、そして通学路で合流した慧え理り那なと桜さくら川がわ先生は、いつもとは違う様相の校舎を見上げた。
　校舎の正門には、テイルレッドの顔を再現した頂点から弧を描いたツインテールでアーチが形作られ、来場者の視線を釘くぎ付づけにする。
　ツインテールの只ただ中なかに浮き文字で大きく描かれた、「陽よう月げつ祭」の三文字が感慨深い。

　普段なら恥ずかしがるところだが……ツインテールでゲートを作るという発想には、俺も素直にうならされた。
　じっくり見るとその完成度の高さ、込められた熱意がひしひしと伝わってくる。
　テイルレッド関係の某なにがしかを自分で写真に収めるなど滅多にしないが、思わずトゥアルフォンで撮影してしまった。
　ツインテールが誘いざなう祭りへと、足を踏み入れる。
「おお、ツインテイルズ揃い踏みだぞ！」
　俺は校舎を指差した。
　校舎の壁面には、屋上から吊つるされた巨大でカラフルな壁画。やはり大きくテイルレッドが描かれているが……嬉うれしいのは、ブルー、イエロー、ブラック、そしてメガ・ネも一緒に描かれていることだ。
「レッドが１００、メガ・ネが40であたしらが１ぐらいのサイズ比だけどね……!!」
　不満を口にしつつも、愛香もどこか嬉しそうに見える。
　メガ・ネは親しみを込めてテイルシルバーと呼ばれ、巷ちまたで非常に人気が高い。
　本人がそれを察してイースナに遠慮し、最近は戦闘ではごく小さなサポートに徹しているにもかかわらず、だ。
　俺たちに比べて出撃回数の少ないブラックとセットのため、レア感もあるらしい。
「文句を言うな、津つ辺べ。大きさにまとまりはないが、お嬢様が全員描いてくれるよう、実行委員に頼んだからこそ実現したんだぞ」
　そこは秘密にしておくつもりだったのだろう、慧理那が困り顔で笑みをこぼす。
「…………仮面ツインテールも一応一般公開はしたんですけど……メンバーと思われてないんでしょうか……」

　自分が描かれてさえいないことが、トゥアールは少し残念そうだ。仮面ツインテールは、一般人にあまり認知されたらいけないと思うのだが……悩みは人それぞれだ。
　文化祭の開始を前に、ツインテール部メンバーの今日のスケジュールを確認する。
「えーと、慧理那は定期的に生徒会で校内の見回りがあって、桜川先生も当然それについていく、と」
　俺たちのクラスの副担任である前に、桜川先生は慧理那の護衛。クラスの出し物は、樽たる井い先生に任せている。
　……任せてもどうにもならないからこそ、副担任がいるのだが……。
「で、俺と愛あい香かとトゥアールは、午前中は占いの館で手伝い、午後は交代してフリーだ」
　出し物が終了するのは午後二時三〇分。そして三時からは、体育館で陽よう月げつ祭のメインイベントが行われる。これは、午前中から各部の提供する漫才大会や演劇とは別に、全校生徒を集めて開催する目玉らしい。
「結局、ツインテール部では出し物できなかったわね……」
　愛香が、校庭に設置された運動部主催の屋台を見て残念そうにする。
「仕方ないですよ、よりによって陽よう月げつ祭の準備期間に入ってからエレメリアンが急に出てくるようになりましたからね」
　トゥアールも何かやりたいと考えていたらしく、不満を滲にじませた。
　確かに、こうも狙ねらい澄ましたようにエレメリアンが出現頻ひん度どを増やさなければ、クラスの出し物の準備をしつつ、ツインテール部でも出し物をやる余裕は十分あったはずだ。
　力仕事は俺と愛香と桜さくら川がわ先生、設計はトゥアール、企画は慧え理り那な。このバランスの取れたメンバーで臨めたら……と思う

と、少し悔しい。
　今日一番忙しいであろう生徒会長の慧理那は、俺たちと別れて早々に校舎に入っていった。
　残った俺と愛香とトゥアールは、パンフレットを検あらためつつ校庭にぎっしりと並んだ屋台に目を移ろわせていた。
　屋台を全制覇すると張り切る愛香。屋台数はおよそ五〇……まあ、愛香なら余裕だろう。
「総そう二じ様、私楽しみです、学園祭って初めてですから」
　トゥアールは俺に腕を絡め、胸を押しつけてきた。空気に溶け込むようなその柔らかな感触に動揺しながらも、ふと感じた疑問を尋ねてみた。
「トゥアールの世界では学園祭の風習がなかったのか？」
　結婚可能年齢が俺たちの世界と全然違ったし、意外とまだまだ細かい相違点があるのかも。
「え、ええ～と……」
　愛香は言い淀よどんでいるトゥアールの腕を引っ摑つかむと、俺に待っているように伝えて昇降口の端はしまで引っ張っていく。企たくらみたっぷりな笑顔で、何やらひそひそと相談を始めた。

◇

　離れたところで総二が不思議そうに自分たちを見ているのを確認し、愛香はトゥアールに向き直った。
「どうしたのよ、トゥアール……随分自然にそーじに甘えるじゃない！」
「そうですねえ、一回思いっきり甘えたから総二様も女体の温ぬくもりに対する照れが薄れているのは感じます」

下唇くちびるに指を添え、悩ましげに自慢話をするトゥアール。
「⁉　ど、どういうことよ！」
愛あい香かは思わずトゥアールの肩を摑つかんだ。
「私、総そう二じ様に抱かれましたから」
「────────────────は？」
衝撃的な発言に、愛香の瞳ひとみから光が消える。
「いだだだいだだだ肋ろつ骨こつの間から手刀が！　そのまま進むと心臓に！　派手さがない分確実に殺とりに来る技やめてください‼」
「な、な、何よ、それ……あ、あんた……！」
「嘘うそです抱き締められたをちょっとかっこよく言っただけです話盛りました愛香さんのエターナルチェインの胸と同じく盛りました‼」
「あたしは一ミリも盛れてないでしょうがあんたは盛ってるでしょうが‼」
反復法を用いたツッコミは自じ虐ぎやくを超越し、もはや雄お々おしい。
「…………いや、待ってよ、じゃあ抱き締めてもらったのは本当なの？」
「ッハァイ」
眉まゆを八の字にひそめ、あらん限りのドヤ顔で煽あおるトゥアール。
殊こと更さらに胸をそびやかし、限界まで頭を反らして、対面のままに上から目線を実現した。
「ぐ、ぐぐぐ……！　さてはあたしがいない間に……‼」
「お互い様です。愛香さんの過去での体験、いずれじっくり教えてもらいますからね！」
そろそろ戻らないと総二に怪しまれる。トゥアールは本題に移った。
「さて、愛香さん……勝負は午後です。学園祭という重要イベント、ま

さか先ほどの五人で仲良しこよしに校内を練り歩くつもりはありませんよね……!?」
「当然でしょ。コミケの時みたいに時間ごとに分けて回るわよ」
「最近アルティメギルが百ゆ合り推しで参っている総二様に、男と女の良さを味わっていただくチャンスです……愛香さんはどうせ中等部の文化祭も無駄に過ごしてきたんでしょうから望み薄でしょうけどププー」
「だからこそ今年に懸けてるのよ!!」
　進展無き日々の記憶に歯噛がみし、トゥアールを景気よく打ちあげる愛香。
　通りかかったマダムがそれを目撃して驚いていたが、隣にいる娘と思おぼしき生徒が、「お母さん、あれが陽よう月げつ学園高等部の名物なんだよ」と説明。お母さんは「まあ、名物なのね」と年齢を感じさせるゆとりある納得を見せる。
　入学して半年……愛香とトゥアールは、完全に学校を背負って立つ名物になっていた。
　それぞれの想いを胸に、陽月祭が始まる。

◇

　マンモス校の学園祭だけあって、陽よう月げつ祭の出し物はどれも非常に気合いが入っている。
　来らい賓ひんも含めれば相当な人の流れがあるので、クラスの出し物一つ取っても手は抜けないのだ。
　結構早めに登校したつもりだったが、教室に着いた頃ころにはすでに何人ものクラスメイトが準備を始めていた。俺たちも早速合流する。
「さ、愛あい香か！　女子は全員コスプレだよ！　愛香の衣装はガムテープだけでいい!?」

「衣装じゃないでしょ文房具でしょそれ!!」
　クラスメイト相手にもキレのあるツッコミを放ち、愛香は更衣室に向かう。
「……トゥアールさんも、看板娘として頑張ってね……！」
　笑顔でしなを作りながら、クラスの女子が過剰なジェスチャーでトゥアールを応援する。
「何な故ぜいまだ遠慮がちなんですか、私もう転入してきて五か月になるんですけど!?」
　クラスメイトとの距離感を嘆きつつ、トゥアールも着替えに続く。ノリはみんなと変わらないと思うんだけど、やっぱり愛香とのじゃれ合いが超人的すぎるのが原因なのかなあ。
　俺は男子たちに交ざって教室の準備をしよう。下準備は終わっているので、後は用意した素材で教室を装飾するだけだ。
　用意した照明はエキゾチックなものが多く、こだわりが窺うかがえる。
　床はシートで覆おおい、蛍光塗料でツインテール属性のエンブレムを基調とした魔ま方ほう陣じんを描いている。ブレスにしか描かれていないのに、やたら世間に浸透しているな、このマーク。
　天てん井じょうはプラネタリウム風に仕上げ、椅い子すとテーブルも教室のものを流用せず自前で用意。
　丸テーブルにクロスを敷き、水晶玉や髑髏どくろのオブジェやタロットなど、各自用意した占いグッズを並べていく。
　火気厳禁なので、キャンドル風のＬＥＤライトなどで代用。
　売りが占いの種類なので、ブースの数こそ一〇個に限定されているが、ニーズに応こたえられるよう古今東西あらゆる占術を網もう羅ら。占いの種類を書いたメニュー表をスタンドに立てかけた。
　ブースの後ろに設置された棚たなには、いったい何に使うのかわから

ない備品がぎっしりと陳列されている。目玉のテイルレッド占いのためのグッズは、完全に判別がつくが……。
　教室の装飾があらかた終わった頃、女子もドレスアップを終えて教室に戻ってきた。
　イブニングドレスに、トンガリ帽子と黒マントなど、占いコスチュームに身を包んだ女子と、メイド服やウェイトレス服など接客用の衣装に着替えた女子とで分かれている。
　いつもはテイルレッドテイルレッド言っている男子たちも、歓声を上げて迎え入れる。
「……おお……」
　中でも、フリルたっぷりのウェイトレス服に身を包んだ愛香とトゥアールは群を抜いて目立っていた。
「愛あい香かとトゥアールさんはクラスの二枚看板だから、客寄せお願いね！」
「そう思ってくれているなら普段もう少し私を囃はやし立ててくれませんか!?」
　しかし、トゥアールのこういう格好は意外と新鮮だな。
　愛香も、クラス会議中は黒スーツをまとって用心棒に任命される可能性にも言及されていたため、ウェイトレス服でほっとしているようだ。
「そーじの家のお店手伝って慣れてるし、任せておいて」
「それよ！　そーいう台詞せりふどんどん出してこう！」
　黒いマントを羽は織おったクラスの女子の一人が、俺の前に突き出すように愛香の背中を押した。
「よし、頑張ろうぜ！」
　樽たる井い先生も無理矢理クラスの女子にウェイトレス服に着替えさせられて、入り口に座らされている。男子たちは樽井先生の胸元に視線を馳はせて「意外にすごい」と褒ほめそやしていた。

全ての準備が終わって程なく、陽よう月げつ祭の開場時間を迎えた。

◇

開場して一時間が経たった頃ころ、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生が生徒会の見回りでやって来た。
「お邪じや魔ましますわ、観み束つか君。とても盛況のようですわね！」
「物珍しいのと、あとは……」
やはり、愛香とトゥアールのおかげか。強引な呼び込みなどはせずほぼ入り口に立っているだけなのだが、二人の姿を見ると来らい賓ひんは直角に曲がって教室へと入っていく。普段二人が喧けん嘩かしているのを目撃している生徒たちも例外ではない。
「たくさん種類があるようですが……おすすめの占いはありますか？」
「タロットに水晶に……男子のお勧めはテイルレッド占い。珍しいのだと乾電池占いとかストロー占いとか、美少女フィギュア占いの奴やつもいたな。俺の担当はツインテール占いで……」
「それがいいですわ!!」
即答で決められたので、俺はブースを一つ交代してもらって慧理那を占うことにする。
この占いをできるのは、ツインテールの子限定だ。
テーブルの上には何もない。用意してもらうのはツインテールのみ。慧理那と対面で座り、ツインテールをテーブルの上に乗せてもらう。
「で、では、お願いします……」
ツインテールを見て、俺がそこから読み取れるものを言い当てる。それだけの単純な占いだが、恐ろしく当たると評判だった。普段通りのことをしているだけなんだけどな……。

「……大分緊張してる。それに、少し寝不足みたいだ」
「実は……」
「でも、何かいいことあったみたいだな。嬉うれしいのがわかる」
「ええ、今、とても嬉しいですわ……」
　そんなふうに、本当に当たり障りのない、あってもなくてもいい情報を言い当てるだけなので、占いというよりはマジックに近い。
　それでも慧え理り那なは、新しい情報を言い当てる度たびに新鮮なリアクションをし続けてくれた。楽しんでくれたみたいだ。
　あと、クラスメイトがすごい目で見てくる。他の生徒もめっちゃ見てくる。
　心なしか、髑髏どくろのオブジェも「お前は何だ」といわんばかりの戦せん慄りつを、その昏くらい眼がん窩かの奥から俺に訴えてくる。
「え、ええと、ツインテール占いは、相性……ツ、ツインテールの相性も占えますか？」
「ごめん、さすがにそれは無理だな。他の占いもやってみるか？」
　訓練次第で増えていくかもしれないが……今の俺には、まだツインテールから読み取れる情報には限りがある。ツインテールとツインテールの相性を占うには力不足だ。
　その時、占いを終えた隣のブースの女子がやって来て、俺たちを呼び寄せた。
「会長！　私はツインテールの相性も占えるニューツインテール占いができるよー！　愛あい香かもこっち来て！」
「え、あたしも……？」



何、ニューツインテール占いだと……!?　俺より上級者がいた!?
　俺はその女子に言われるがまま、愛あい香かと慧え理り那なに挟まれるようにして座った。
　神秘的な雰囲気の室内とはいえ、やけに気温が低い。生徒や来らい賓ひんが、じっと俺を見ているように思える。あと、髑髏どくろのオブジェと同じくらい目を見開いて、トゥアールが凝視していた。
「机の上のタロットから、一枚ずつ引いて!!」
　ツインテール占いなのに、タロットを使うのか……。そこがニューの所以ゆえんなのだろうか。
　俺が愚ぐ者しゃ。愛香が女じょ教きょう皇こう。慧理那が法王というカードらしい。
「観み束つか君は……逆位置の愚者！　愛香は正位置の女教皇！　一〇〇％だわー!!」
　一枚ずつのカードでパーセンテージを算出する原理が謎なぞだが、どうやら俺と愛香のツインテールの相性は一〇〇％らしい。誇らしい気持ちで隣を見ると、愛香もツインテールの毛先を指でくるくるしながら喜んでいた。
　タロットでツインテールを占えるとは、この女子も見事なツインテールなだけはある。
「ひゃ、ひゃく……」
　一方、慧理那はその結果を聞いてしょんぼりしていた。
　自分の結果を聞く番となり、不安げに俺にツインテールを差し出してくる慧理那。ツインテール占いの先駆者として、俺はそのツインテールをそっと握った。
「会長は……正位置の法王……」
　占いをしている女子は慧理那に子犬のような目で見つめられ、脂汗を顔に伝わせている。

「ひゃく……」
　歯を食いしばり、意を決したように慧理那へと結果を告げた。
「会長も観束君と相性一〇〇％!!」
「わあ、よかったですわ!!」
　華が咲いたような笑顔を浮かべる慧理那。
「ごめん愛香……あの目を見たら逆らえない……魔性のちびっ子だわ……」
　女子はぐったりと椅い子すに背をもたれ、何な故ぜか愛香に謝っている。

　他のブースを確認すると、桜さくら川がわ先生もこの時間を利用して客に占いを披露していた。
「桜川先生にも担当があったんですか？」
　それらしい項目はメニューに載っていなかったと思ったが。
「裏メニュー、婚こん姻いん届とどけ占いだ。よく当たるぞ」
「……え？」
「さあ観束、この紙に名前を書け。それだけで占いは終わる、シンプルだろう？」
　シンプルに学生生活も終わる。よく当たるというか、バチが当たりそうだ。
　もはや占いではなく黒魔術の類たぐいなんだが……。
「みんなここにやっては来ても、名前を書かずに出ていってしまう。個人情報の管理にはうるさい時代、婚こん姻いん届とどけ占いはやはり難しいということか」
「──尊みことと婿むこ殿も相性一〇〇％と思い、皆遠慮しているのかもしれませんわよ」
　気品ある声に振り向くと、理事長と母さんが並んで教室に入ってき

た。
　来らい賓ひんの保護者も多い学園祭にあっても、凜りん然ぜんとしたツインテールと着物姿は圧倒的な存在感を放ち、存分に衆目を集めている。
「理事長、母さん⁉」
「ごきげんよう、婿殿。そして婿殿のクラスメイトの皆様」
「遊びに来たわよ～。入り口からずーっと見守ってたわ、総そうちゃんの婿殿っぷりを！」
　占いに集中していたせいか、理事長のツインテールの気配に気付くのに遅れたのは不覚だった。案の定、婿殿という呼び方にクラスの男女がざわついている。
「そういう母さんは理事長と一緒だったのか……」
「慧え夢むと呼んでくださいな、婿殿」
　とろけた表情で俺を見つめてくる理事長。
　そんな成層圏にあるハードル飛び越えろと言われても……。
「観み束つかの母さん、すげえ美人じゃねえか‼」
　クラスの男子たちがざわつきだす。まあ、綺き麗れいなんだろうけど……。
「やだわ、発言が完璧！　いいクラスメイトを持ったわね、総ちゃん‼」
　妙な喜び方をする母さん。連れの理事長は、ブースの前で慧え理り那なと愛あい香かに声をかけていた。
「慧理那、先ほどの占い、母も見ていました。そちらの津つ辺べさんとあなた、共に一〇〇％。つまり、土壌は同じ。あとは、ツインテールが勝敗を別つと言えるでしょう」
「はい……」
　畏かしこまる慧理那。そしてそれは俺も同じだった。スタートライン

が同じなら、ツインテールが勝負を決める。いい言葉だ。それはある意味、俺の座右の銘と言ってもいい。
「婿殿、囲いを一つお借りしてもよろしくて？」
「あっ……、では奥様、私が」
　桜さくら川がわ先生と入れ替わりで、理事長が占いブースに座る。そして、俺と慧理那を呼び寄せた。
「実はわたくしも、得意な占いがありますの。婿殿と慧理那を占いたく存じますわ」
「じゃあ、お願いします……」
　校内で滅多なことはしないと思うが、脱衣占いとか犬占いとか言い出したら止めなければ。
「接せつ吻ぷん占いです」
　凛り々りしい柳りゅう眉びを微動もさせず、理事長は真顔でそう告げた。
　古今東西あらゆる占いを集めるという看板を完かん遂すいすべく、準備期間に多くの文献で世界中の占いを調べたが、そんな使途不明な占いは終ついぞ見当たらなかったが……。
「何ですかそれ、キ、キスさせて占うってことですか⁉」
　愛あい香かが顔を真っ赤にして抗議する。理事長はたおやかに微笑ほほえんでそれを躱かわした。
「さすがは津つ辺べさん、理解がお早いですわ。これは神しん堂どう家に伝わる、婿むこたる殿方との心の繋つながりを測る占術ですの。神堂の女は代々これを継承し、母として娘を占うのですわ」
　神堂家は家訓や伝統をいったいいくつ次代へと継承してゆくのか。
「ですがお母様、わたくし皆様の目がある中でキスだなんて、は、恥ずかしいですわ……」
「未熟者‼」

理事長の峻しゆん厳げんな言葉に、クラスメイトも他のお客さんも思わず姿勢を正してしまう。
「最近ニュースでよく見ますわ。かのエレメリアンという怪人が、こともあろうにツインテイルズに接せつ吻ぷんを強要していると。ツインテイルズは、接吻という人類の愛の結晶を守るために戦うのでしょう。それを応援するあなたが接吻を恥じるとは何たることですか!!」
うっかり口を滑らせて、慧え理り那ながイエローだと連想させやしないか冷や冷やしたが……さすがは理事長。俺はそんな後ろ向きな心配をした自分を恥じた。
エレメリアンから人々の心を守るためには、ただ恥ずかしがっているだけではなく、理解も深めなくてはならない。先のコックロチギルディ戦で俺自身が思ったことじゃないか。
「上う手まいわよえむぴー、総そうちゃんは熱血に絡めればだいたい納得しちゃうから」
「ああっ……お褒ほめ頂き光栄ですわ未み春はる様っ……」
……母さんが耳打ちした途端、急に理事長の頰ほおが弛し緩かんしたのが気がかりだが……。
「時に婿殿、経験が浅く不安だというのでしたら、わたくしが指南──」
「わかりました、ツインテイルズのためですものね！　し、しますわ！　キ、ス……」
理事長の言葉を遮さえぎって放たれた慧理那の宣言に、教室中が総立ちでざわめきを連鎖させた。
「おっと、そんな穴だらけのロジックではこのトゥアールちゃんは説き伏せられませんよ!!」
入り口で呼び込みを続けていたはずのトゥアールが、見計らったようなタイミングで駆け寄ってくる。想定内だとばかりに、トゥアールへと視線を送り、優雅に笑みを飾る理事長。

「婿殿、お妾めかけさんは何人侍はべらせても構いませんわ。慧理那が正妻なのは揺るぎませんもの」
「そのお妾さんと侮あなどっていた女に最後は敗北する……実にカタルシスのあるストーリー展開ですね！　総二様は占うまでもなく私と身体からだの相性一〇〇％です。体育祭で全校生徒に根回しする老ろう獪かいさを見せたまではよかったですが、最後は若さの勝利です!!」
　理事長相手にも物もの怖おじせず、腰に手を当て不可解な勝利宣言をするトゥアール。
「おほほほ、相変わらず元気があってよろしい。慧理那のライバルはそうでなくては」
　ライバルっていうか普通に友達なんだけど、何な故ぜ理事長は慧理那とみんなを競わせたがるのか。帝王学の一環みたいなものなのかな。
「お嬢様、そろそろ時間です、見回りに戻りましょう」
　理事長が来て遠慮していたようだが、だいぶ時間が押したらしく、桜さくら川がわ先生が進言する。
「ええ!?　お母様、ではその前に占いを……」
「よく言いました慧え理り那な！　一〇秒で終わりますわ!!」
　ずっともじもじしたままだった愛あい香かが、慧理那に先んじて理事長のブースの前に立った。
「待ってください！　そもそも何でそーじが婿むこって確定して話を進めているんですか!!」
「これはは当人同士の問題！　お妾めかけさんのあなたとはいえ差配することではありません!!」
「あたしは妾じゃありません！」
「ほう、では何ですの？　親が認めた結婚に待ったをかけるだけの関係だと!?」
　クラスの女子が拳こぶしを突き上げて「ナイストス！」と叫んでい

る。何な故ぜか球技大会に巻き込まれたらしき愛香は、意を決して理事長に告げる。
「――お、幼おさな馴な染じみです！」
　反そらした胸と同様に張りのない愛香の声音に、理事長は怜れい悧りな笑みのみで応答した。
　愛香はすかさずクラスの女子に囲まれ、何やら問い詰められている。
「慧理那、母が津つ辺べさんを引き付けておきます、今のうちに接せつ吻ぷんを！　心配はいりません、後から必ず占いますわ!!」
「ナイスよえむぴー、何か無意識にフラグっぽいところまでナイスよ!!」
　煽あおるように理事長を応援する母さん。慧理那が潤うるんだ瞳ひとみで俺を見つめてくる。
「愛香さん、もう私を音速でブン投げて理事長にぶつけてください！　尊みことさんの防御を突破して理事長を撃退するには、それだけの攻撃力が必要です!!」
「わかったわトゥアール……あんたの覚悟、無駄にはしない！　マッハ三は出してあげる!!」
　音速で十分だと科学者が試算したのに、その三倍を出そうとする大雑把な砲撃手。
　風紀を律するべき生徒会長と理事長がむしろ渾こん沌とんの中心のため騒ぎは収まらず、占いの館を襲った喧けん騒そうは、それからしばらくの間続いたのだった……。

◇

　午後一二時。
　制服に着替えた愛香、トゥアールと共に教室を後にする。愛香は肩を

揉もみながら独りごちた。
「疲れた～……っていうか、疲労の大半が理事長を食い止めたからだけど……」
「盛り上がってよかったじゃないか。割りと均等に色々な占いが選んでもらえてるし」
　愛香とトゥアールは、クラスメイトに讃えられた通り二大看板として接客に実務にと八はち面めん六ろつ臂ぴの活躍を見せた。最後はトゥアールも電卓に偽装したスーパーコンピューターを使って、確率統計に基づいた結果を算出する「電卓占い」を披露していたしな。
　あとは、交代したメンバーに任せて、俺たちはゆっくりと出し物を見て回ろう。
「では総そう二じ様──」
　トゥアールが、例によってメンバー分けを提案した。別に全員で見て回った方がいいと思ったのだが……人数が多くても店などでは全員一緒に座れるとは限らない、ともっともな理由を受け、俺は時間ごとにペアに別れることにした。
「コミケではエレメリアンが現れたせいで総そう二じ様と一緒に回れずに終わりましたから、今回は絶対に私が最初です!!」
「わかったわよ……」
　最初の組み合わせは、トゥアールと俺。そして愛あい香かが慧え理り那なと桜さくら川がわ先生と合流して回る。四〇分交代ということだ。
「四〇分あれば空き教室に連れ込んで一通り終わります。学園祭の喧けん騒そうを遠くに聞きながらというのも風ふ情ぜいがありますね……フフフ」
「そーじ！　何かあったらあたしの携帯に連絡！　連絡できないような小細工されたら、防犯ブザー鳴らしてね!!」
　謎なぞの言葉を呟つぶやくトゥアールと共に、謎の言葉を叫ぶ愛香と

別れた。

　トゥアールは何度も後ろを振り返って、愛香がついて来ていないか確認しながら歩く。
　階段の前まで来ると、一旦三階に上り、すぐ二階に降りるというフェイントも駆使して愛香の追跡を疑った。トゥアルフォンのＧＰＳでの位置表示は真っ先に確認するが、愛香はそれを警戒して教室の鞄かばんに入れっ放しにしたりするので過信できない、とトゥアールの弁。
「……時間は貴重です、愛香さん対策はこのぐらいにして……さあ総二様、どこから回ります？　それともすぐ空き教室とか校舎裏とか屋上にしけ込みます？」
　せっかくの学園祭だ、出し物は時間の許す限り見て回らないと勿もつ体たいない。けど、いきなり屋上に行くことも選択肢に入れるということは、トゥアールも占いで疲れているのかもしれない。それを念頭に入れて提案した。
「トゥアール、どこか休めるところに行こうか？」
　トゥアールは立ち止まり、目を見開いて俺を見つめてきた。
「──マジですか⁉　総二様から⁉　是非休みましょう、そして激しく運動しましょう‼」
　それじゃ全く休めない気がするが……元気なようなので、休憩は後回しにすることにした。
「やっぱり近い所から順に見て回るか」
「そうしましょう！」
　トゥアールはにっこりと笑うと、またもその細い腕を俺の腕へと絡ませてきた。
「……あの総二様、おっぱいですよ⁉　慣れちゃっていませんよね⁉」
　不安そうに俺を見つめながら、さらに深く胸を押しつける。柔らかな

感触が、制服越しに皮ひ膚ふにまで届くような錯覚に陥おちいった。
「そ、そりゃ慣れるなんてありえないけど……トゥアール、そんなにくっつかなくても……」
　しどろもどろになる俺に、トゥアールはほっとしたように汚けがれの無い笑顔で言った。
「総そう二じ様。私、嬉うれしいんです。自分一人で戦っていた頃ころは、志を共にする仲間とこんなふうにお祭りを楽しむなんてできませんでしたから……」
「……仲間……そうだよな……」
　トゥアールは俺を仲間として信頼し、仲間との初めての祭りを目一杯楽しもうとしているんだ。彼女が力いっぱいはしゃぎたいというなら、俺もそれに応こたえてあげたい。
「……クックック……ノスタルジーを匂わせれば総二様は拒めなくなる……これまでの全ての経験が今日の私を形作っています」
　口元を手で押さえ、また何かを呟つぶやく。今日のトゥアールは、独り言がいつになく多いな。それだけ学園祭に心が躍おどっているんだろう。
「総二様、お化け屋敷！　お化け屋敷入りましょう!!」
　お化け屋敷か。ちょうど待ち時間もないようだ。
　こんなにはしゃいで……トゥアールも子供っぽい一面があるんだな。何かほっとする。
「私、お化けって苦手なんです。怖いので、手で握ってもいいですか……？」
　それぐらいなら……と差し出した俺の手をすり抜け、トゥアールは俺のズボンのチャックを下ろそうとしてきた。慌ててバックステップし、回避する。
　そう言えば今、微妙に言い回しが変だったような。

「お化け屋敷の中は何があっても自己責任。今、総二様が頼れるのは自分だけ……。ふふふ、愛あい香かさんによって鍛きたえられた私の手から、どこまで逃げ切れるか……」
　自己責任、頼れるのは自分だけ。ホラー映画の大前提ではあるが……何な故ぜ学祭のお化け屋敷でそれほどの覚悟が必要になるのか。言い知れぬ不安と共に、中へ足を踏み入れる。
　二つのクラス合同で、それぞれの教室の後ろと前の出入り口を囲いで繋つなぎ合わせ、かなりの大きさのお化け屋敷になっている。
　昔ながらのお化け屋敷というよりは、恐怖体験のアミューズメント施設に近いコンセプトのようだ。廃病院を模したような雰囲気で、暗視カメラの映像のような薄緑のライティングだ。
「□□□□□□□□□□□□□□□」
　入って早々、緑色の手術衣を着て鉗かん子しで広げられた腹から腸がはみ出た男が、目の前に急に飛び出してきた。
　俺は特にリアクションできず、相手も腹を押さえたまま硬直し、気まずい時間が流れる。
「ども」
　会釈だけして、その場を後にする。少し歩いてから振り返ると、頭を垂れて立ち尽くしていた。何かすみません……。
　薄暗がりの枕元に女の子が立っていたり、明け方クローゼットの中から女の子が這はい出てきたり、朝起きたら犬小屋が部屋の中にあったり──毎日スリリングな体験を入場料無料で経験しているせいで、自分でも気付かないうちに恐怖耐性がえらいことになってるのだろうか。
「ハヒィ──────────」
　ベニヤ板で作られたドアを開けると、ナースがメスを振りかぶって襲いかかってきた。俺の顔を見るなり、奇声と動きを止める。
「あっ……君、一年の観み束つか総そう二じ君でしょ⁉」

血だらけのナースさんがフランクに話しかけてくる。
「はい、そうです」
「体育祭見てたよ、かっこよかった～！　神しん堂どう会長とつき合ってるんだって⁉」
「それは……おうっ⁉」
トゥアールに引っ張られ、俺はたたらを踏みながら先に進む。
「二年にも結構ファンいるよー！」
メスをペンライトのように振ってバイバイしてくるナースさんに、俺も手を振った。
「…………まずいですね、慧え理り那なさんとの仲が公認になったせいで、逆に他の女も距離を感じずに接するようになってきてます……」
ぶつぶつ独り言を呟つぶやいているトゥアールを気にしながら先へと進む。
眼前の薬棚だなに置かれた、脳がホルマリン漬けにされた大きなビーカーが一回転し、脳に繋つながった剝むき出しの目玉がぎょろりと覗のぞいた。
「キャーコワーイキャーオッパーイ」
天上天下に轟とどろく果てしなく怖くなさそうな悲鳴と共に、トゥアールが俺に抱きついてきた。
ちょっとエグいけど、そこまで怖くはないよな。そもそもトゥアールは、ディザスタームービーとかパニックムービーをよく見てるし、こういう人体剝き出しは慣れっこだと思ってた。
「フヘヘヘヘヘやっぱり一度総二様から抱き締めてもらっているだけに、二度目からは多少強引でも警戒されませんね……！　暗い道ではぷるぷるの、私のおっぱいが役に立つのです」
含み笑いの中に消えるトゥアールの囁ささやき。血走った目で俺を凝視しており、剝き出しの目玉の標本よりむしろこちらの方が迫力があ

る。
「総二様、腰が抜けて動けません……おんぶしてください、対面で」
「対面のおんぶってあるのか？」
　仕方なく普通におんぶしようと屈かがんだ瞬間、背筋が凍るような冷気が全身を吹き抜けた。
「……そーじ……」
「⁉」
　い、今書き割りの窓から愛あい香かによく似たツインテールが見えた……⁉
　気のせいか……しかし、何という強烈な怖おぞ気け。この部屋に入ってから、一番驚いたぞ。
　腰が抜けていたはずのトゥアールも何な故ぜか急に背筋をしゃきっと伸ばして歩き出し、俺たちは残りの行程を足早に抜けていった。

◇

　半分はクラスの出し物、半分は部活の展示を見ていこうと提案し、後半は部室棟へとやって来た。残念ながら、ツインテール部は出し物はないが……。
　ぱっと見、特に人入りが多いのは、愛あい香かとトゥアールもじゃれ合いで破損させた校舎の修復でお世話になっている、ＤＩＹ研究会だ。
　人型に凹へこんだ壁の修復法など、あまりにも局地的すぎる活動報告が好評のようで、年輩の来らい賓ひんも足を止めている。
「あ、総そう二じ様。ゲリラ展示してますよ」
　トゥアールが指差した方を振り向くと、部室を持たない同好会が部室棟の廊下を使って展覧会を開いていた。
「…………ソーラちゃんファンクラ部⁉　まだ残ってたのか⁉」

壁一面、モザイクアートが作れるほどソーラの写真で埋め尽くされている。
俺の言葉が聞こえてか聞こえないでか、部員が天てん井じようように拳こぶしを突き出して信念を叫んでいた。
「ソーラちゃんがこの世界にいる限り、俺たちもまた不滅だーっ!!」
……すまん、じゃあファンクラ部は壊滅だ……。
しかし、偶然は続くもんだな。少し前に寝ぼけてソーラの幻を見たと思えば、校舎内でソーラの写真を見ることになるなんて。
俺自身はソーラの写真を手元に残していないので、見ていても現実感が希き薄はくだ。
「ソーラの写真は、残ってるんだな……」
「ソーラたんは属性力エレメーラの消滅で消えたわけではありませんからね、記録媒体には残りますよ」
飾られたソーラの写真を見て、トゥアールは懐かしむように微笑ほほえんだ。
俺がソーラという少女の姿になったのも、俺自身の心の不安が属性力エレメーラに影響したせいなのだが……こうして俺が元に戻った後でも、ソーラのツインテールは色褪あせずに記録のこっている。
属性力エレメーラは、何よりも強大で、かけがえのない力だ。
ゆえに、その強制力もまた絶大なのだが……呪いのように牙きばを剝むくのは、完全に失われてしまった時だけなのだ。
「写真といえば実は今、撮った人物の一〇年前を精密にシミュレートし再描画するカメラを開発中なんです！　それで愛香さんを写せば、可愛かわいい生き物を量産し放題というわけです!!」
「愛香を幼くする計画、まだ諦あきらめてなかったのか……!?」
そんなすごいカメラを作れるトゥアールでも、自分がツインテールだった頃ころの姿を再現することはできない。失われた属性力エレメー

ラが、積み重ねた時間にさえ干渉しているせいだ。
　トゥアールの煌きらめく銀髪を見つめる。
　かつて、そこには世界を魅了するツインテールが輝いていた。
　何度も聞かされてきたことだ。属性力エレメーラを失ったら、二度とその愛を形にすることはできないと。だから俺たちは、アルティメギルには絶対に負けられない。
　けど……属性力エレメーラは……本当に、抗あらがえない絶対の存在なんだろうか。
　戸惑いの表情をフレームに収められた、写真の中のソーラに問いかける。
「総そう二じ様！」
「あ、ああ」
　トゥアールが写真と俺の間に身を滑り込ませ、俺ははっと我われに返った。
「ねっぷりとソーラたんの写真を見て……あのセルフおっぱいが忘れられないんですか～？」
　忘れられない。
　ごく何気ないその言葉が耳じ朶だを叩たたいた瞬間。
　俺は、弾はじかれたようにトゥアールの手首を摑つかんだ。
「トゥアール……ごめん、ちょっと二人だけになりたいんだ。来てくれ」
「へぃえっ!?」
　周りに誰だれもいないのを確認し、俺はトゥアールの手を引いて足早に歩き出した。
　部室棟の最奥、ツインテール部部室へ辿たどり着き、ドアの取っ手に触れる。俺の指紋を認証して施せ錠じようが解除され、俺はトゥアールと一緒に中に入り、素早くドアを閉めた。

「あ、あの、その……も、もちろんＯＫなんですけ、ど、その」
　何な故ぜかもじもじしながら、俺と距離を取るトゥアール。
　俺は意を決して、トゥアールへと歩み寄った。
「トゥアール……今ここには、俺と君しかいない」
「はい！　そうですね‼」
　目を泳がせ、身を縮こませるトゥアール。
「だから……もしかしたら嫌かもしれないけど、したいことがあるんだ」
「だだだ大丈夫です何回でもどこでもどんなプレイでも受け止めます‼」

「──俺に、トゥアールのツインテールを結ばせてくれないか？」

　決死の覚悟での懇願だった。
「……え」
　満開の花が急に萎しぼむように──トゥアールの戸惑いも、喜びも、笑顔も……全てが裡うちに閉じていく。トゥアールは、困ったように目を伏せた。
「総二様、それは」
「いや……わかってる！　最後まで聞いてくれ」
　初めてそう考えたのは、俺がソーラになった時。それから毎日のように考えていた。
　さっきソーラの写真を見て、決心した。言うなら今しかないと。
「俺、ずっと前から考えてたんだ。ツインテール属性を失ったら、その人はツインテールにできなくなる。他の人が結ぼうとしても、そうなんだよな……？　でも、俺ならどうだ⁉」
「それは……」

「俺なら……この世界で一番強いツインテール属性を持っている俺なら……！」
　捲まくし立てるように吐と露ろする。
「それに俺、前よりもっと成長してると思うんだ！　ずっと遠くのツインテールを感じられるようにもなった！」
　俺を強くしてくれたのはトゥアールだ。
「多分……属性力エレメーラの常識っていうか……世界に存在する属性力エレメーラの基準とか平均より、俺は強い自信がある。だから、普通なら駄目だとしても、俺ならできるんじゃないかって……」
　だから俺は、その心の強さでトゥアールに恩返しがしたい……。
「……トゥアールに出会った時、トゥアールのツインテールを見たいって思った……でも今は違う。俺が見たいからじゃなく、トゥアールにツインテールを取り戻して欲しい……。属性力エレメーラがなくても、せめて、ツインテールだけでも──」
「私も！」
　トゥアールは胸の前で拳こぶしを握り締め、訴えかけるように俺の言葉を遮さえぎった。
「……私も、試したから……わかるんです。世界の属性力エレメーラを奪われた後……まだ自分自身のツインテール属性を失う前に、道行く小ちっちゃい女の子をツインテールにしてみようと試してみました……でも、駄目でした」
　強力なツインテール属性を以もつてしても、叶かなえられない願いだっていうのか……。
　ツインテールの戦士として、ずっと戦い続けたトゥアールの属性力エレメーラでも……。
「でも、俺がもっと強くなれば！　俺のツインテール属性がもっともっと強くなれば、今は無理でも、いつか……属性力エレメーラの常識を超

えるぐらい、俺が強くなれば……!!」
「……そうですね。総二様なら、いつか本当にできてしまいそうですね……」
「だったら！」
「駄目です!!」
　トゥアールは俺の腕を摑つかむと、訴えるように見上げてきた。
「……駄目です総二様。属性力エレメーラに逆らうために属性力エレメーラを強くするなんて、間違ってます」
　震ふるえる腕に力を込め。
「属性力エレメーラは……愛のために。ツインテールのために、育はぐくんでください」
　聞き分けのない子を叱しかるように、トゥアールは俺を諭さとした。
「だから総そう二じ様……どうか属性力エレメーラを超えようなんて考えないでください。総二様は、総二様のままで……。これ以上先を望んだら、総二様が総二様でなくなってしまうかもしれない。私は、それが怖いんです……」
　俺を射抜くトゥアールの瞳ひとみには、意志の光が輝いている──
「ツインテールにできなくったって構いません。私は、総二様たちといる今の時間が本当に幸せです。これ以上、何も望みません」
　不安でも悲しみでもなく、俺を間違った道に進ませまいと、両手を広げて立ちはだかるかのような、強い意志の光が。

「だから総二様。私を不幸にしないでください……」

「トゥアール……」
　俺は、どこまで馬ば鹿かなんだ……ツインテール馬鹿なんだ……！
　俺だけの尺度で、トゥアールの幸せを考えてしまっていた。

　ツインテールを失ったままでは、トゥアールは本当の意味で幸せになれないんだって。心から笑顔になれないんだって。
　でも、そんなことはなかったんだ。トゥアールは、大切なツインテールを失った灰色の世界を、自分の心の強さで乗り越えた。戦士を引退した今でも、懸命に戦っている。
　そして今、俺たちに心からの笑顔を見せてくれているんだ。
「……わかった。ごめん、トゥアール……君にそんなことを言わせてしまって……」
　俺に弱音を見せまいと頑張ってきたトゥアール……それを痛いほど知っていたのに、あえて口にさせてしまった。俺は本当に大馬鹿だ……!!
「いえ。言ってもらえて嬉うれしかったです。それに、こうしてちゃあんと総二様に釘くぎを刺せましたし」
　悪いた戯ずらっぽく笑うトゥアール。
「総二様……結ぶ代わりに……結ばれてくれませんか……？」
「え？」
「百ゆ合り好きの敵と戦っていく前準備として、やはり王道を体験しておくべきです!!」
　俺がここに引っ張ってきた時は、すごく不安そうな顔をしてたのに、何かすごく活き活きしている。それは嬉しいんだけど……。
「大丈夫ですってどーせこの広い校内、他にもわんさかドッキングしてる人たちが──」
「──どうやらそのようね──!!」
　部室のドアが勢いよく開く。
　バズーカ砲の砲弾のようにカッ飛んできた愛あい香かが、トゥアールの背後から羽交い締めという名のドッキング。そのまま腰のバネたっぷりのバックドロップで、トゥアールをリノリウムの床へと沈めた。

「偶然ねトゥアール！　こんなところで会うなんて!!」
「こんなところってどこですか、三さん途ずの川ですか……」
　もはや渡るも退ひくもできず川で溺おぼれそうになっているトゥアールを、愛あい香かはずるずると廊下へ引っ張っていく。
　トゥアルフォンを確認すると、そろそろ交代の時間だ。愛香とトゥアールで見て回るのか？

　　　◇

　砕けた床の破片を頭から軽く払いながら、トゥアールは部室棟の廊下を愛香と歩く。
「ま、まだ交代まで三分ほどあるじゃないですか、卑ひ怯きようですよその三分で頑張って終わらせるつもりだったのに……！」
　トゥアールは不機嫌を露あらわにした。
「……ちょっとビビってたくせに」
　意地悪く目を細め、ぼそりと呟つぶやく愛香。
「いつから見てやがったんですかこのクソ蛮族がああああああああああああああああああ!!」
　トゥアールが顔を真まっ赤かにして、白衣のポケットに手を突っ込む。
　何か発明品を取り出そうとしたのだろうが……それを制するように、愛香がトゥアールのおでこを指で押した。
「……トゥアール。あたし、クラスの友達に誘われたから……あたしの分の四〇分、あんたにあげるわ。そのままそーじと見て回って」
「愛香さん……」
　トゥアールは目元を指で拭ぬぐいながら微笑ほほえみ、愛香に感謝する。

「……ありがとうございます……。余裕なんて見せられない雑ざ魚こヒロインの愛香さんに、気を遣ってもらって……。私と総そう二じ様の初体験は撮影して、愛香さんにも見せてあげますね」
「いるか見るか撮らせるかさせるかあああああああああああああああああああああああ!!」
「ほあああああああああああああ時系列を逆行する高度なツッコミ!!」
　飾りや展示物のない、廊下の天てん井じようへとトゥアールを叩たたきつける愛香。
　前言を撤回し、総二を連れて屋台を制覇してくる、とお冠の愛香に、よろめきながら縋るトゥアール。二人の横をすり抜け、尊みことと慧え理り那なが部室の方へと歩いて行く。
　部室のドアを開け、中に一人残る総二と、廊下でじゃれ合う二人を見て、尊は納得した。
「おお何だ、次はお前たちで見て回るのか？　じゃあ、私と観み束つかで回ってくるぞ！」
　愛香とトゥアールは踏み切りまで完全に同期シンクロしたスタートで、尊を止めに走った──。

◇

　三時から始まる、体育館でのメインイベント。文化部代表の軽音楽部、演劇部などが全校生徒や一部来らい賓ひんの前で集大成を披露する時間だ。
　どれも非常に盛り上がったものの、慧え理り那なが含みを持たせるような言い方をしていた特別ゲストの存在が気になる。果たして、どんなサプライズが用意されているのか。
　俺がそう思った矢先──体育館の照明が完全に落ち、生徒たちはにわか

にざわめき出した。
　ステージを照らすスポットライト。
　闇やみの中の光――一瞬で集中したその場の全ての人間の視線に動じることもなく、小さな少女がステージの真ん中に躍り出た。
　白いフリルで彩いろどられた、華やかな黒のステージ衣装。
　全力の歌唱と最高のダンスパフォーマンスを両立するためのヘッドセットマイク。
　人々を魅了してやまない円つぶらな瞳ひとみと、アンダーリムの黒眼め鏡がね。
『じゃ――――――――んっ！』
　そして、眼鏡を際立たせる横向きのＶサイン――彼女を象徴する決めポーズ。

『陽よう月げつ学園高等部のみんなー！　スペシャルゲストの善いい沙すな闇あん子こで～すっ!!』

　善沙闇子。
　世界最高の眼鏡アイドルが、サプライズでステージに登場したのだ。
　体育館の屋根も壁も吹き飛んでしまうかと思うほどの、全校生徒一丸となった仰天の叫びが爆発する。
「イ、イースナ……」
　俺も、すぐ側そばに座っている愛あい香かやトゥアールも目を丸くする。
　さらに、ステージ袖そでからエレキギターを持ってだぼっとした着ぐるみが登場した。
　善沙闇子の相棒、鮫さめのゆるキャラ・メガネドン。
　これが私のピックだと言わんばかりに、ヒレで弦げんをかき鳴らす。

　間違いなく生演奏だ、一体どうやってコードを押さえているのか。
『今日はお便りをもらって、ちょっとだけみんなの文化祭にお邪じや魔ましに来ましたー！　短い時間だけど、たくさん眼鏡ってねー!!』
　生徒たちは悲鳴にも似た歓声を上げ続ける。
「やべえ、サイリウムも何もねえぞ！」
「俺はいつもレッドちゃんの剣型サイリウムを持ち歩いてるけど……赤しか出せねえ!!」
「今わかった、生え際ぎわが後退してきたおでこは、この日のために!!」
　サプライズすぎて応援グッズが何もないが、とにかくみんな張り裂けんばかりの声援を送っている。
　十分すぎるほど熱くなった会場で、善いい沙すな闇あん子こはスカートを翻ひるがえして一回転。
『それじゃ最新ナンバー、『クローゼットの中の眼め鏡がね』いくよー!!」
　よかった、８ｔｈシングル『もう逃がさない』じゃなくて。あの曲、歌詞が情念的なのに何な故ぜか他人事に思えなくて、聞いてて寒気を感じたからな……。
『クローゼットの中で、カレが起きるのを待ーつの、眼鏡がむにゃむにゃ』
「「「「「ムニャムニャ!!」」」」」
『お寝坊さん、クローゼットをＯＰＥＮ！　私の眼鏡を取り上げて、ほらかけちゃうぞ！　思わずくらくら』
「「「「「クラクラ!!」」」」」
『でも、心の度数はピッタリ！　二つのレンズ、ブリッジで繫つながる二人～キャッ☆』
　フーフーとかハイハイとかメガネメガネとか、前後左右で息ぴったり

のコール＆レスポンスが巻き起こる。……あまりよく知らないが、とりあえず見よう見まねで俺も続こうと頑張る。
　以前、闇子のライブに俺一人で潜入した時は、ただ警戒するだけでこんなふうに素直に盛り上がるなんてできなかったもんな……。その時を思い出して、いろいろな思いが去来する。
　ところで、この新曲も何か聞いてて背筋が冷たいんだけど、おかしいよな、こんなにポップな歌なのに。
　間奏に突入すると、メガネドンの独壇場だ。



　眼め鏡がねをかけたぼへーっとした鮫さめが、所狭しとステージを跳とび回る。
　ドラムを正面から叩たたきまくり、トップシンバルを浴びせ蹴げりで打ち鳴らす圧巻のパフォーマンス。さらに前転側転バク宙、そこからあの巨体でブレイクダンスまで……。
　……………………おかん……頑張ってるなあ……。
　中の人を知っているだけに、俺の胸に熱いものがこみ上げてくる。
　絶好調のメガネドン目掛け、善いい沙すな闇あん子こがダイブする。
『メガネドンは左のレンズ！　私は右のレンズだよー!!』
　俺たちはー!?　と叫ぶ男たち。え、何、そんなお約束のやりとりがあるの!?
『あしふきマット!!』
　善沙闇子の口から大任を仰おおせつかり、うおおおお、と歓喜の叫びを上げる男たち。
　せめて眼鏡拭ふきにしてあげてくれ……。
　メガネドンのヒレと手を繋つないで、ステージ上をフィギュアスケートのようにくるくる回る闇子。
　マスコットキャラとしてメガネドンが登場してしばらくの間も、こんな仲なか睦むつまじいダンスはなかったはずだ。
　信頼関係が生み出す至高のアクション──中の人を知らなくても、親子のようだと思う人は多いはずだ。見る人にも伝わっているんだ、あの二人の仲の良さが。
　善沙闇子は、眼鏡だけを守るためにこの世界でデビューした。
　俺たちと分かり合い、仲間となって、善沙闇子は……イースナは、心からの愛で眼鏡を人々に届け続けている。世界にどれだけツインテールが芽吹いても、眼鏡だって共存できるんだ。
　今アルティメギルは、ツインテイルズを利用して百ゆ合りを広めよう

としている。
　あいつらが、心を食らう生命じゃなければ……百合もきっと、眼鏡のように正しく人々を魅了したかもしれないのに……。

『さあみんな、心の眼鏡はかけた⁉　次いくよ～、恋れん図ずファンタジー‼』

　三曲だけのミニライブだったが、初秋の体育館は冷房が必要なほどの熱気に包まれた。
　最高のステージパフォーマンスを見せつけた善沙闇子は、生徒たちの興奮冷めやらぬ中で、登場時と同じく電撃的にフェードアウト。
　全てを出し切った彼女へはアンコールではなく、万雷の拍手と歓声がいつまでも止やむことなく送られ続けたのだった。

◇

　自分が帰ったあとも学園祭のメインイベントを楽しんで欲しいという意向から、誰だれにも見送られず善いい沙すな闇あん子こは陽よう月げつ学園を後にした。──と、関係者には思わせておいて、閉会式後のキャンプファイヤーの準備時間にメガネドンと一緒に戻ってきて俺たちと合流した。
　イースナはともかく、メガネドンを隠しながら校舎内を歩くのは骨だ。俺たちは、トゥアールの転送ペンでツインテール部部室に転送される。
　ステージの活躍を労ねぎらおうとした俺より先に、愛あい香かとトゥアールが呆あきれ顔で詰め寄った。
「イースナ！　何考えてんのよあんた……飛び入りで乱入なんて‼」

「それも、在学中やＯＧだというならわかりますが、接点はまるでないんですから」
　ステージ衣装のまま、善沙闇子のままで、イースナは誇らしげに眼め鏡がねに指を添えた。
「根回しはきちんとしておったぞ。わらわがレギュラー枠を持っておるバラエティ番組で、学生からリクエストの手紙をもらってサプライズで学校を訪れるというコーナーがあってな。ちゃんと仕事で来たという体ていになっておる」
「慧え理り那なちゃんが、お手紙をくれたことになっとるんよ。再来週の放送で流れるはずや」
　メガネドンの着ぐるみの頭を外し、メガ・ネが補足する。
　ステージお疲れ様でした。マジで。
「慧理那の言ってたサプライズって、善沙闇子のことだったんだな」
　生徒会長として一日頑張った慧理那。さすがにツインテールに疲れが見える。
「ええ、イースナさんに事前に相談されていました。……観み束つか君も知っていましたの？」
「納得しただけだよ。体育祭の時来てたのを見かけてさ。今日のための下見だったんだな」
「さすが総そう二じ！　わらわのことなら何でもわかるのじゃ!!」
　俺の腕に抱きつき、人知れずスキャンダルを振りまくアイドル。
「そっちは駄目です！　私がマーキングしてます！　せめて反対側の腕にしなさい!!」
　トゥアールがイースナを引き剝はがす。
「まーきんぐ……トゥアールさんが、観束君に……」
　やはり疲れているのか、慧理那……。相当息が荒くなってきた。
「というか、総二様は気付いていて……慧理那さんは知らされてい

た……え？　あれ？」
　トゥアールは一連の流れを反はん芻すうし、疑問符を浮かべる。
「な、何で私には何も言わなかったんですか、イースナ!!」
「だって、トゥアールは前もって言ったってどうせ興味は示さないのじゃ」
「当然ノーリアクションですよ！　でも言ってくださいよ!!」
　無茶な論法で迫るトゥアールを見て、闇子は大人の余裕を見せるように微笑ほほえんだ。
「ふふ、トゥアールも案外可愛かわいいところがあるのじゃな」
「案外って何ですか、私は全力で可愛かわいいでしょう!!」
　桜さくら川がわ先生が手際よく紅茶を準備し始める。メガ・ネがいる時は、どちらが先に淹いれるか競い合いをしているようだ。
「しかし、前準備をしっかりしたのに三曲だけとはあっさりしているな。すごく盛り上がっていたし、もう少し続けてもよかったんじゃないのか？」
「学園祭の主役は学生じゃ。あまりにもわらわが目立ちすぎては、今日まで一生懸命準備してきた学生たちに悪いじゃろう」
　確かに、あれ以上続けていたらもう善いい沙すな闇あん子この次にステージに立つ学生は辛つらかっただろう。あくまでサプライズとして、学園祭の盛り上げ役に徹したんだ。やっぱイースナって、アイドル活動には本当に真しん摯しだよな。
「どうじゃ総そう二じ。今日限りのプラチナライブ、満足してもらえたか？」
「ああ。ありがとうイースナ、最高のライブだったよ」
「ならば、テイルレッドとちゅーするのはわらわで決まりじゃな。何だったら、テイルブラックとしてではなく、通りすがりの善沙闇子とテイルレッドでちゅーせぬか？」

「あんた、そんな手で話題作りしなくちゃいけないくらい落ち目なわけ!?」
「たわけ貧乳、今現在、世界で善沙闇子に勝てるアイドルなどおらぬわ貧乳！　トップアイドル同士の共演、人気が最高潮だからこそ実現すべきじゃろう貧乳!!」
　愛あい香かがイースナにキシャーと飛びかかるも、まあまあとメガ・ネが攻撃をいなしていく。

　トゥアールとしたい
　　　　トゥアールとしたい
　　　　　　　　トゥアールとしたい

「何だこのアラートは!?」
　自分の神妙な声が部室に響き、俺は紅茶を綺き麗れいに吹き出した。
「録とれたて新鮮、今日作った新アラートです！　皆さん、エレメリアンが出現しました!!」
「そ、総二がトゥアールにこんなにも直じかに……おい貧乳！　何な故ぜ平然としておる、いつもなら怒るじゃろう!!」
　慌てるイースナと対称的に、愛香は穏やかに出撃準備を始めた。
「その録れたて新鮮な音声の改ざん前の元ネタ、あたしも聞いたし……さ、行くわよ」
　ロッカーへと向かおうとする途中、慧え理り那なが窓から校庭を見つめているのに気付いた。外はもう夜の帳とばりが下りている。防音の部室でも、生徒たちの楽しげな声が聞こえてくるようだ。
「……慧理那、今日ぐらい、残ってても大丈夫だぞ」
「生徒会長の挨あい拶さつなどは終わっています、大丈夫ですわ。……ただ……」

もうすぐ始まるキャンプファイヤーに参加できないのが、少し残念そうだ。
「……仕方ない……キャンプファイアーは俺の炎ほのおで我慢してくれ、みんな」
「旦だん那なにそっくり──────────────────────!!」
母さんが感極まって抱きついてくる。つい気取った台詞せりふを吐いてしまった。
「しまった、また無意識に！　っていうかどこから現れた⁉」
最後まで参加できなかったのは残念だが──全員、心ゆくまで学園祭を楽しむことができた。これ以上ない充足感と共に、俺たちの陽よう月げつ祭は幕を閉じたのだ。
出し物は出せなかったが、今からは〝陽月祭のツインテール部の活動〟だ──。

◇

俺とブルー、イエロー、ブラックは、文化祭の余よ韻いんに浸ひたることなく、気持ちを切り替えて出撃した。敵が出現したのは、地方のイベントホールの近くにある空き地。
のほほんとした佇たたずまいのエレメリアンだが、その奥には不動の頑強さが根を下ろしている。
『そのイベント会場で、八時から方言縛りのゲーム実況大会が開催されるようです。かなり参加者は多かったみたいですから、おそらくそれを狙ねらって現れたのかと』
トゥアールの分析を受け、エレメリアンを注視する。
「ゲームの属性のエレメリアンか？　イースナもＰＣゲームが好きだし……」

「わらわが好きなのはエロゲーじゃ！」
　自信満々に言い直すブラック。何な故ぜ、あえてぼかしたのにカテゴリを明確にする……。
「あっ、ツインテイルズだぁ～。テイルレッド、近ぐで見っどめんこいなあ～」
　俺たちを発見するや、脱力ものの訛なまり声を披露するエレメリアン。
「おら、方言属性デイアレクトのブラキオギルディだ。よろすぐなあ」
「ゲームじゃなく方言の方だったのね……」
　気のよさそうな訛り声のせいか、毒気を抜かれるブルー。
「イベンドさ来て気付がれねえようにしようど思っだんだけどさあ、おらこの図ずう体たいだ、変装しだって入れねえし……でも、たぐさん方言が聞げて嬉うれすがっだんだな、力が入っちまっだみてえだ。失敗したあ、こんな早ぐ見つがっちまったあ」
　確かに、ゲームよりも方言を繰る人間が集う場所の方が、狙い目は少ないはずだ。
「おらも普段っからゲームの実況動画アップしでっがらさあ。今日はみんなど一緒に楽すみたがっだげど、やっぱおらぁ、エレメリアンだがら……無理だったあ」
　哀愁を漂わせ、静かに俯うつむくブラキオギルディ。
　趣味のゲーム実況を、画面越しではなくみんなと一緒に楽しみたくてやってきたが、自分がエレメリアンであることを自覚して我われに返り、参加できなかったのか……。
　その光景を想像すると、俺もやるせなくなってしまう。
「……なあブラキオギルディ、お前が属性力エレメーラを奪うばわないと約束してくれるなら──」
「いや、奪とっげどさぁ」

「奪うのかよ!!」
　話がわかる奴やつかもしれないと譲歩を試みたが、言い終わるまでもなく決裂した。
「でもまあ、とりあえず隊長さんどの約束ば果ださねど。もげー、来てけろ」
「「「モゲ────────」」」
　訛なまりが移ってしまった戦闘員アルテイロイドが現れ、撮影を始める。
「……来た！　ほらレッド……行くわよ!!」
　ブルーが、相手が言い出す前にキスしようとし始めてしまった。
「レッド、ここはわたくしが……相性一〇〇％のわたくしが……!!」
「あたしも一〇〇％だからね!?」
「相手はゲーム実況を嗜たしなんでおる、ならばエロゲーを極めたわらわこそこの戦いでキスをするに相応ふさわしい!!」
　ブルー、イエロー、ブラックがまたもや戦闘中に争い始める。
　一度でもいいから誰だれかとキスしないと、ずっとこの緊張と恥ずかしさが続くのだろうか。
　みんなも我慢しているんだし、俺も覚悟を決めて誰かに頼まないと……。
　収拾がつかず、内輪揉もめを見てブラキオギルディもぽかんとしている中……さらなるカオスが、笑い声となって戦場に響き渡った。
「私はレッドとちゅーをする者、仮面ツインテール!!」
　いよいよ意味不明な肩書きをまとい、仮面ツインテールまで戦場にやってきてしまった。

◇

　エレメリアンがテイルレッドのキスを見たがっている。
　怪人たちの行動を支持するわけではないのだろうが、一般人の注目は日に日に増していき、エレメリアンたちの奉じる百ゆ合りという存在そのものにまで焦点が当てられた話し合いも、メディアで紛糾する事態に。
　当初の理由は疚やましいものだったかもしれないが、こうなってくると早めにキスを見せて敵の発奮を抑止するというブルーたちの提案は、一概に間違っているとも言えなくなってきた。
　出撃したブラキオギルディの勇姿を、ホール内で見守る戦士たちとティラノギルディ。
『あ～っ、爆発に巻き込まれてしまいました、呼吸が止まりました、人工呼吸が必要です～』
　フルフェイスのマスクをした仮面の少女が、呼吸が止まったと嘯うそぶきつつテイルレッドへとエネルギッシュににじり寄る。
　仮面越しに荒らげた息が聞こえるようだ。百ゆ合りとは別の衝動で迫っているようだが……。
「ご、ご覧くださいティラノギルディ様！　仮面のままちゅーをしようという高等技を!!」
　しかし、テイルブルーが無む理り矢や理り引き剝はがし、目の前の敵そっちのけで喧けん嘩かを始めた。
「おお……さすがはテイルブルー、非戦闘員にも容赦のない!!」
　その雄大な手で顎あごを擦さすり、やけに前に前にと出て来る白衣の少女を注視する。
「……あの白衣の少女は何者か。たまたま通りがかったというわけではなさそうだが」
「はっ。名を仮面ツインテール。幾度も戦いの場に現れ、己おのれが信念を訴えては風のように去っていく──未いまだ謎なぞ多き少女でありま

す」
　当たり前のように答えが返ってきたことが、逆にティラノギルディを立腹させた。
「馬ば鹿かな、何度も現れているだと!?　俺が見たこの部隊の資料では、彼女に関する記述など何もなかったが!?」
「当初はツインテイルズと同じ卓越した戦闘者かと警戒もされていたのですが、全くツインテール属性を持たぬため、ただの後方支援者ではないかという結論に……」
　アルティメギルにとって、ツインテール属性を持たない後方支援者など警戒するにも値しない。ゆえに、幾度かその姿を見た仮面ツインテールについては全くのノーマークだったのだ。
「わからぬぞ。ツインテイルズとて、戦闘時以外に我われらがツインテール属性を感知できぬのは、平時は意図的に属性力エレメーラを隠いん匿とくしているからであろうことは明白。あの仮面の少女とて、実は力を隠し持っているやもしれぬ」
　これまでの部隊長にはない着眼点だった。
　帝王を自負しながらも慎重さに重きに置く、ティラノギルディならではの発想だ。
「――ぬう……待て、それどころではない……!!」
　テイルブルーと揉もみ合いになる仮面の少女を見て、ティラノギルディは玉座の肘ひじ掛かけを握り潰した。
「……感じるぞ、恐るべき強大な百合波動……!!」
　ツインテイルズの戦いを言い知れぬ当惑を覚え観察してきたティラノギルディが、ここに来てようやく真骨頂を発揮した。
　困惑する兵士たちへ、ティラノギルディは興奮交じりにモニターを指差す。
「わからぬか、あの凄すさまじき百合ポテンシャルを……！　仮面ツイ

ンテール、あの少女こそ、ツインテイルズの百合の要かなめ!!」
　闘気で玉座が消し飛び、空気椅い子すになりながらもティラノギルディは留とどまることを知らず昂たかぶってゆく。
　ホールのど真ん中に置かれて邪じや魔まだったので、玉座が無くなったのはいいことだが。
「──ティラノギルディ、出陣する!!」
　空気椅子から勇ましく立ち上がり、ティラノギルディはマントを翻ひるがえした。
「いやお待ちください!!」
　血相を変えたスパロウギルディに止められる。司令官がそんな抑えきれない衝動に任せたライブ感満載の出撃をしてもしものことがあっては、いよいよ部隊は終わりだ……。

◇

　仮面ツインテールは、目の前のエレメリアンをほっぽってブルーと喧けん嘩かを始めてしまった。
「あんたそんな仮面してキスなんてするつもり!?」
「口元だけバイザーをオフにすればできます！　ブルーがちゅーなんてしたら宇宙遺産であるレッドちゃんの可愛かわいらしい唇くちびるがカモノハシみたいになってしまいます!!」
「カモノハシの嘴くちばしみたいに潰されたいのあんた!?」
　学園祭以来、ブルーはより強引に迫ってくるように思える……。
「お二人とも、落ち着いて……今は戦闘中ですのよ!?　ここは年齢順に……！」
　イエローがおろおろしながら止めようとする。
「あんの～、おらどうすりゃいいがな……」

「ちゅーするって言ってるんですから、黙ってそこで見てなさい!!」
「はあ……」
　ぴしゃりと言い捨てられ、ブラキオギルディはぬぼーっと立ち尽くした。ブラキオサウルスには見えないが、こののほほんとした感じは、大型の草食恐竜を思わせなくもない。
「ほんま、ブルーちゃんと仮面ツインテールちゃんは仲良しさんやなあ……。しゃあない、二人はイエローちゃんに任せて、ウチらだけで戦おか。早よせんと人が集まってきてまうで」
　メガ・ネが口を開いた途端、やる気の見えなかったブラキオギルディの双そう眸ぼうに灯ひが灯ともった。
「――か、かわいいなあ……！　その、ちょっど〝えせ〟入った関西弁、最高だぁ……!!」
「え!?」
　困惑するメガ・ネに、ブラキオギルディは両腕を突き出してにじり寄っていく。
「貴様メガ・ネに欲情するな不届き者が――――――――――――――――ッ!!」
　ブラックのダークネスウィップで強したたかに打たれ、ごろんと転がるブラキオギルディ。
「その声、その関西弁、おらの理想だぁ！　あんだどお喋しやべりがすでえ！　ずっとだ!!」
「ええいメガ・ネにプロポーズするな――――――――――――――――ッ!!」
　破裂音を響かせて次々に打ちつけられていく鞭むちを意にも介さず、ブラキオギルディは起き上がりこぼしのように何度も立ち上がってはメガ・ネをじっと見つめている。
　メガ・ネも、関西弁が好みだと言われたせいか、一切口を開かず押し黙っている。

　その時──荒野にも似た無人の空き地に、一陣の風が吹いた。

「───ツインテイルズよ……」

　全員が動きを止める。
　悠然と歩く姿そのものが、最強捕食者たる恐竜王の威風。背筋を奔はしる、痺しびれにも似た緊張。
　過去幾度となく味わってきたこの感覚は、超越した幹部エレメリアンのみが放つ威圧感。
　トゥアールは、アホですねと分析していた。実際、テレビ画面越しに見ていてそこまで大した奴やつには思えなかった。正直、今までの隊長に比べて弱いんじゃないかと疑いさえした。
　……とんでもない。実際に目の前で見るティラノギルディは……かつてない、圧倒的なプレッシャーを感じる。
　刃やいばのような牙きばの奥で光る双そう眸ぼうを見開くティラノギルディ。
　視線を切るだけで、刀剣を振り回すかのような鋭さが空気を薙なぐ。
　その先には……じゃれ合い、抱き合うような形で動きを止めた、ブルーと仮面ツインテールの姿が。
「むおおおおおおおおおおおおお！」
　ティラノギルディは突如、自おのずから空高く舞い上がり、豪快に吹き飛んだ。
　受け身など惰だ弱じやくと言わんばかりに、頭から地面へと叩たたきつけられる。
「……何という強大な百ゆ合り力……！　大地を踏みしめることすらままならん!!」
　地に足つかないふわふわした想いを吐と露ろし、よろめきながら立ち

上がる。
「百合力、誰だれがですか……」
　呆あきれながら問いかける仮面ツインテールを、まさに正せい鵠こくを射たりと指差すティラノギルディ。
「とぼけるな！　そこな白衣の女史……！　恐るべき百合ポテンシャルの持ち主よ!!」
「は……？」
「貴様こそ中心！　ブルー、イエロー、ブラック、その全てを包み込み、一個の銀河系のような百合空間が形成されておる！　まさに百合コスモ!!」
　宇宙級の暴言を吐き散らし、ティラノギルディは歓喜に打ち震ふるえる。
　仮面ツインテールとぎりぎり抱き合う寸前で止まっていることに気付いたブルーは、身体からだを掻かき抱いだくようにして後あと退ずさった。
「……ちょっと、まさかあんた本当に……」
「失礼な！　私は百合じゃありません！　小ちっちゃい子を愛めでているだけです!!」
　果たして小っちゃい子を愛することが生産的なのか……今の俺には、その疑問の答えはあまりにも遠くにありすぎた。
　ブラキオギルディは昂たかぶっているティラノギルディを目の当たりにし、加勢をするとか、自分一人に任せてくれとか当然すべき行動を外し、まさかの退却宣言をした。
「……隊長さん。おら、じゃまになるみでえだす、一旦帰るなぁ。え～ど、メガ・ネさん、これ、おらのＩＤです、よがっだら登録してけろ」
「えぇ!?　ウチ携帯とか持ってへんで!?」
　ブラキオギルディがメガ・ネに差し出した名刺を、ダークネスウィッ

プの瞬斬で粉こな微み塵じんにするブラック。
「気安く登録を強要するでないわ、常識のない奴やつめ!!」
　駄目だ、反応が遅れてしまった。日々成長するイースナたちに的確に突っ込むためには、俺も同じ速度で成長しなくては取り残されてしまう……。
「そ、それじゃあ……」
　しょげるわけでもなく、またの再会を楽しみにするように、ブラキオギルディは背を向けて歩き出した。まさか帰るわけないだろうと注意して見張っていたのだが、極彩色のゲートが出現し、あっさりとその中に消え去った。あいつ、マジで隊長置いて退却しやがった！
「えっ!?　ちょ、ちょっと待てブラキオギルディ、何な故ぜ帰る!?」
　モケーたちもブラキオギルディの方について帰ってしまい、一人取り残されたティラノギルディ。当然向かってくるものと、俺たちは武器を出現させて構えた。
「……フ、百ゆ合りを生で見られた、今日のところはここで勘弁しておいてやろう。だがツインテイルズよ、俺はようやく悟った──ちゅーすべきはテイルレッドではない……思わぬ伏兵、仮面ツインテール……貴様だ!!」
「ッ──!!」
　息を呑のむトゥアール。仮面で表情を隠しても心を見抜く──エレメリアンの恐ろしさを再認する。奴が何を悟ったかは定かではない。ただ、トゥアールが標的にされた……その事実に言い知れぬ危機感を覚え、俺は無言のままにティラノギルディへと斬きりかかっていた。
　しかし、ブラキオギルディと同じく、退却を決めてからは何の未練も残さない。
　ティラノギルディは霧霞に溶け込むように、その巨きよ軀くを忽こつ然ぜんと消したのだった。

　空からぶったブレイザーブレイドを仕舞い、俺は敵の消えた平野に立ち尽くす。
「……レッド。敵に認められるのはいい気分ではありませんが……どうやら、ティラノギルディは私とレッドのちゅーを望んでいるようです」
　振り返ると、仮面ツインテールがにじり寄っていた。下半分だけオープンされたバイザーから、よだれの滲にじんだ口元が見える。
「練習しておきましょう……おそらく、次こそ本番となります!!」
　目元が見えず吊つり上がった口元だけが見える仮面に生物的な本能で恐怖を感じ、俺はついテイルレッドの変身を解いてしまった。
「ほ、ほら、テイルレッドじゃなくなったらもう大丈夫だろ？」
　一瞬諦あきらめかけて身を引いたものの、再び仮面ツインテールはマスクを突き出してきた。
「……まあ、総そう二じ様なら総二様で、その方が」
「何でだよ！」
　俺にのし掛かってきたトゥアールを、皆が止めようとした時。

「ほわああああああああああああああああああああああああああああああああ!?」

　野太い悲鳴が、無人の空き地に木こ霊だました。
　仮面ツインテールも、俺も。仮面ツインテールを止めようと歩み寄ってきていたブルーも。
　イエローも、ブラックも、メガ・ネも。
　その声に振り返るまで、誰だれ一人としてその存在に気付いていなかった。

　空気の読めない上司。滑る指揮官。人望なき幹部。枚挙に暇いとまが

ない罵ば詈り雑ぞう言ごんを王冠クラウンと輝かせながら、その実、凄すさまじい存在感に俺を凍こおり付かせた、帝王の名に恥じぬ強者。
　誰が想像できよう。マントを翻ひるがえして堂々と帰還した覇王が、身を縮め、気配を伏せ、忍び足でこっそりと様子を窺うかがいに戻ってくるなど──。
「おと、こ……」
　一様に時が止まった俺たちの眼前で、ティラノギルディは乙女座りで腰を抜かしていた。
　そして、悲鳴と同じ野太い声で呟つぶやき、放心したように俺を見つめている。
　トゥアールに周囲をしっかり確認してもらってからにすべきだった。
　事実、普段なら基地に帰る前に変身を解くなど、力尽きでもしない限りはありえないことだった。
「…………俺は……違う、仮面をしたままちゅーをできるのかと、聞きに戻……」
　ティラノギルディは、その場の誰よりも動揺し、要領を得ない言葉を繰り返す。
　心が未いまだ祭りの中にあり、浮ついていたこと。
　ブルーですらも気を抜くほど、苦戦なく続いた最近の戦い。
　直前にあまりにもあっさりと帰るブラキオギルディを見てしまっていたこと。
　全てが最悪の形で符合し、この一度の油断に結晶した。
　たった一度の過あやまちが、最悪のタイミングで重なってしまったのだ。
「────あ、あ、男……男……テイルレッドの正体が………………男……!!」
　いやいやをするように首を振るティラノギルディ。

悪夢は、敵味方に等しく舞い降りた。
楽勝ムードがもたらした油断。心の間かん隙げきを縫ぬうように訪れた、絶体絶命の危機。

俺が男に戻るところを、エレメリアンに見られた――。

第四章　初めてのデート。

「ッ———!!」
　硬直を真っ先に脱し、仕掛けたのはブルーだった。
「オーラピラー!!」
　倒す倒さないではなく、逃走させない。
　刹せつ那なの思考が迷わずに拘バイ束ンドを選択し、ブルーはウェイブランスを完全解放ブレイクレリーズ。呆ぼう然ぜんとしているティラノギルディへ向けて、オーラピラーを射出した。
「うおっ……!?」
　だが、ブルーがランスを振りかぶった瞬間、ティラノギルディは水流の結界の中でその鋼はがねのような筋肉をさらに隆起させた。
「ディユリァ————————————————ッ!!」
　面妖な雄おた叫けびが大地を揺るがし、天を衝つく。
　ヒビが入る暇ひまさえなくオーラピラーが粉々に砕け散り、爆風で俺たちがたじろいだ一瞬。ティラノギルディは、迷わず逃走を選択した。
　手を伸ばしても届かない焦燥感。手の平から日常が零こぼれ落ちていく絶望感。
　極彩色のゲートの中へ、ティラノギルディは溶け込むように消えていく。
「……くっ……」
　仮面ツインテール……トゥアールが端末を操作し、程なく頭こうべを垂れる。
　今度こそ間違いなく、ティラノギルディはこの場から完全に姿を消したのだろう。
　目の前が真っ白になり、俺は膝ひざをついた。

◇

　モニターが消灯した地下基地メインルームは、恐ろしいほどの静寂に包まれていた。
「……すまない、みんな……完全に俺の責任だ……！」
　テイルレッドの正体が敵にバレる──あらゆるリスクの中で一番徹底して防がなければならないことを、こんなにもあっさりと。
「いえ、私のせいです……」
　トゥアールが深々と頭を下げる。慌てて俺は肩に触れ、顔を上げてもらった。
　慧え理り那なは、机に手をついて立ち上がる。
「観み束つか君が狙ねらわれてしまうのなら……わたくしがずっと守りますわ!!」
「心配はない。ティラノギルディは誰だれにも言えはせぬ」
　ブラックが陽気に答えた。彼女は作戦会議などで淀よどみなく発言するために、帰投後も変身を解かずにいることがままある。
「何で断言できるのよ!?」
　思案していた愛あい香かが思わず反応する。
「わらわもそうだったからじゃ。フェニックスギルディから、テイルレッドが男だと教えられ──なんとかしなければと思いつつも、誰にも打ち明けられなかった」
　経験者としての説得力を込め、ブラックは続ける。
「連敗続きの侵攻部隊は、テイルレッドへの敬愛を以もつて首の皮一枚で耐えている状態じゃ。そんな部隊の士気を下げるような真ま似ねはできぬ」
「下したっ端ぱどもはともかく、同等の幹部とか、それこそ首領には伝

えるかもしれないじゃない」
「首領に言ってみよ、碌ろくに確認もせず今まで男に萌えていたのかと罰してくるやもしれん。奴やつにこそ到底言えぬわ。……他にはもう、同等の幹部はおらぬ。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの副将はわらわたちが倒してしまったのじゃし、何より、一の──」
　言いかけて、ブラックは言葉を呑のんだ。まるで、厳重に封をした箱を決して開けまいとするように。
「わらわが気がかりなのはむしろ、ティラノギルディの本性じゃ。空気が読めず人望のない奴だとは知っておったが……まさか、咄とつ嗟さに逃げを打つ判断を取れるとは」
「逃げ帰るくらい臆おく病びような敵なら、その方が好都合じゃない」
　愛香が疑問を呈するが、ブラックは静かに首を振った。
「臆病で自力のある奴やつが一番危険じゃ。言えぬまではいいが、それを一人で抱え込んで追い詰められ、何をしでかすかしれたものではない」
　決して認めはしないだろうが、それもまた暗に、ブラックの自分自身の経験則からの言葉に思えた。
「いずれティラノギルディは必ず現れる。その時倒せばそれで解決じゃ」
　ブラックもまた、一人で抱え込み、どうにもならなくなって俺たちに戦いを挑んできた。
　いや、メガ・ネという心強い相棒がそばにいた彼女と、孤独なティラノギルディは違う。
　追い詰められ方も比べものにはならないだろう……。
「あいつはあたしが絶対倒すから。イースナの言う通り他の奴にバラされないんだったら、そこまで心配する必要はないでしょ。元気出して、そーじ」

一番多くの危険を想定し悩んだであろう愛香にそう言われては、俺も頷うなずくしかない。
百ゆ合りを愛してきた戦士に、テイルレッドの正体が女ではないと知られた。

追い詰められてはいるだろうが――怒りもまた、計り知れないもののはずだ。

◇

ティラノギルディは、基地に帰るやいなや、失意のままに通路に立ち尽くす。
怒りと悲しみが、嵐と渦巻き五体を苛さいなんだ。
世にも可愛かわいらしい幼子めと目尻を下げていれば、その正体はまさかの男子おのこ。
テイルレッドに百ゆ合りの片へん鱗りんすら感じなかったことに、ようやく合が点てんがいった。
懸命に脳裏に描いた百合の花園。それらが全て見知らぬ男の顔に書き換わり、ティラノギルディは絶叫する。
「ぐわああああああああああああああああああああああああああああ!!」
男に土足で踏み入られる―百合にとっての最大のタブーだ。
ブラフを仕掛けている可能性も疑った。男の替え玉を用意し、トリックで自分を欺あざむいたのだ。愛めでるべき少女が男だったなど、百合の戦士にとっては最大の悲嘆なのだから。
だが、話に聞くテイルレッドとは、並み居る戦士大幹部たちが一体の例外もなくその気高き精神性を讃たたえた、高潔な戦士のはず。そんな

後ろ暗い行為で敵を責め苛さいなむとは思えない。
　テイルレッドは、男が変身して女になっていた。もはやそれは、疑いようのない事実だ。
「何な故ぜだ……ありえぬ、男が世界最強のツインテール属性を持つなど……今まで幾いく星せい霜そうの世界をわたっても一度として目にしたことはない……!!」
　壁に手をつき、よろめきながらホールへと向かう。入り口に差しかかると、このところしんと静まり返ることの多かったホールが今、かつての活気を取り戻していた。
　兵士たちは皆ツインテイルズの映像を見て、こぞって百合妄想に勤いそしんでいる。
「お、お前たち……」
「ティラノギルディ様！　我われらようやく、百合の何たるかを明るくしてまいりました！」
　ツインテイルズが率先して百合に理解を示し始めたことが、追い風となったのだ。
　ティラノギルディが着任と共に残存兵たちへと見せた百合の組み合わせ、脳内百合ジョイントを、彼らも嬉き々きとして嗜たしなんでいる。これほど嬉うれしいことはない。
　今こそ帝王の大笑を見せるべき時だった。──本来ならば。
　ティラノギルディは足の震ふるえを悟られぬよう、せめて表情に余裕を引きつらせる。
「ティラノギルディ様……我らが未熟ゆえやもしれませんが、やはり皆、テイルレッドに最も百合が似合うということで結論が出ました」
　一体の戦士が代表してそう告げると、ティラノギルディから血の気が引いた。
「テイルレッドと百合だと思えば、不思議とブルーへの恐れも薄れてい

くようです！」
「……そ、そうか……お、俺の言った通りであろう！　百合は全ての少女に平等だとな！」
　モニターには、テイルレッドに迫るツインテイルズたちの凶態が乱舞している。
　あれも何のことはない、普通に男女がキスをしようとしているだけではないか……！
「……お、お前たち……。例えば……なのだが、もしテイルレッドが……」
　ティラノギルディが口くち籠ごもる先で、二体のエレメリアンが喧けん嘩かをしていた。
「お聞きください、ティラノギルディ殿！　こやつが、テイルレッドは攻めではないかと世迷い言をぬかすのです！」
「幼子は受けと断じる……陳腐な思考の放棄ではないか！　テイルレッドには間違いなく攻めの素質がある、もっと想像力を働かせてみるがいい!!」
　その頼もしきディスカッションに、さすがの帝王も嘆息をこぼす。
「むう……！」
　なんと……すでに受け攻めを論じるまでに成長していたとは。
　悲願だった、百ゆ合りによる部隊の結束。それがようやく叶かない始めた今、どうして事実をありのままに伝えることができよう。
「それでいい、どんどん弁論に励め！　……俺の見立てでは、テイルブルーは受けだ!!」
　恐れを知らぬ考察に、どよめきが起こる。そして送られる、加飾なき帝王への畏い敬けい。
　その歓声を存分に背で受けながら、ホールを後にするティラノギルディ。

　人気のない通路までやってくると、ティラノギルディは壁に背をつき、ずるずると崩れ落ちた。帝王にあるまじきみじめな姿だ。
「……隊長さん……」
　角から顔を覗のぞかせてきた部下に驚き、ティラノギルディは飛び上がるように直立した。
「ブラキオギルディか……」
「まんずもうしわげねえだ、逃げじまって……」
　責めることはできまい。最高指揮官である自分もまた、無様に逃げ帰ったのだから。
「でも、テイルレッド、めんごがっだなあ……おら、またいつか出撃しますだ」
　ブラキオギルディも見ていない。自分だけなのだ、テイルレッドの正体を知っているのは。
　ティラノギルディは拳こぶしを握り締め、通路の果てに視線を馳はせた。
　笑い合う漢たちの百合トークが聞こえるようだ。
　このまま、全てを自分の胸の裡うちに仕舞って……テイルレッドのツインテール属性を奪取すれば、誰だれも絶望することはない。
　百合が充分に広まる前にテイルレッドを打倒した、稀き代だいの空気を読まぬ帝王として、これから語り継がれていくだけだ。ティラノギルディの面おもてに──悲愴な決意が浮かぶ。
「ブラキオギルディよ……俺に手を貸せ」
「まだ隊長さんど一緒に出撃すんのがあ？」
「……俺がテイルレッドと戦う。お前は、他のツインテイルズと分断して欲しいのだ」
「無茶だあ、おら一体で四人も相手にすろってが⁉」

ティラノギルディは、マントの奥から黒い宝石を取り出した。
「これが何か、わかるか」
「………………なるほどなあ、これで強ぐなれってが……」
その禍まが々まがしさから何かを悟ったのだろう、達観した笑みを浮かべるブラキオギルディ。だが、戦いで散ることは覚悟の上でも、そこには大義がなくてはならない。
「理由はあ？　何で一緒に戦うんじゃ駄目なんだあ？　隊長さん、百ゆ合りっ子が好ぎなんだべ？　だっだら分断ばしねで、二対五で良がべ!?」
四人一体のツインテイルズと相あい見まみえれば、百合がある。レッド一人には百合がない。
部下に百合哲学を説かれ、ティラノギルディは感動に胸を焦こがす。
だからこそ迷いなく──その誇り高き面を、地に擦こすりつけた。
「仔し細さいは言えぬ！　言えぬが……俺はどうしても、テイルレッドを倒さなければならない理由ができたのだ！　何も聞かず、帝王のために散ってくれ!!」
「や、やめでけろ、隊長さんがそんなごどしたらだめだぁ！」
面おもてを上げてくれと懇願するが、ティラノギルディは土下座したまま頑がんとして動かなかった。
「おら、まだ死ねねえす！　ゲームの実況ばクリアまでアップしてねんだ、あんだに命預けるなんてでぎねえ！　何も言っでぐれねんじゃ、預けたぐねえ!!」
ブラキオギルディは巨きょ軀くを戦慄わななかせ、逃げるようにその場を立ち去ってしまった。
「……そうだな……。俺に命を預けるなどできぬか……」
ティラノギルディは自じ嘲ちようしながら立ち上がり、胸の前で手の平を広げる。

　アルティメギル科学班最高責任者・マーメイドギルディから渡された黒い宝石──首領のゴッド・吐息ブレスが、不気味な光彩を放った。

◇

　何度寝返りを打ったか。何度薄暗がりの中、目を開いたか。
　その夜俺は、ほとんど眠れなかった。むしろ一睡だけでもできたのが驚きだ。
　愛あい香かたちはああ言ってくれたが、やっぱり気が気じゃない。今日が振替休日で幸いだった。
　目覚まし時計を見ると……六時か。
　もうスパッと起きて、筋トレでもするか。いつまでもぐじぐじ悩んでたら、みんなに心配をかけるだけだ。目いっぱい身体からだを動かして、不安を汗と一緒に流し落とそう。
　そうと決まればパパッと着替えてしまおうと、クローゼットまで近付いていく。
　かかっているＴシャツに手を伸ばした瞬間、クローゼットの奥からぬっと腕が飛び出してきて、俺の手首を摑つかまえた。
「どああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　開いているクローゼットに向かって、入り口の戸のような叫び声を上げてしまう。
「そ、総そう二じさん……眠れました……？」
　クローゼットの奥から、服をかき分けて姿を見せるイースナ。相変わらず無自覚にホラー演出を……。
「少なくとも、眠気は完全に覚めた」
「よ、よかったです、役に、立てて……」

　礼を言っていいものかどうか。ただ、いつも不健康そうな目をしているイースナだが、今日はそれに輪をかけて眠そうなのが気になる。
「もしかして、かなり前からここにいたのか？」
「……そ、総二さんが安心して眠れるように……ここで守ってました……」
　そうか。イースナなりに、俺のことを心配してくれていたんだな……。
「ありがとうイースナ。でもクローゼットの中じゃ身体からだが痛くなるだろ？」
「わ、わかりました……。そ、総二さんがそこまで言うなら、明日から、ベッドの中で、守ります……」
　いや全くそこまでは言っていない。
「イースナ、着替えるから一旦出てもらっていいか？」
　前にもこう言って押し問答した気がするが、だからといって言っても無駄だからと堂々とイースナの前で着替えるわけにもいかない。
「ぱんつ……」
　イースナはジャージのズボンのゴムを指で伸ばし、その下のパンツを見せてきた。回れ右をして視線を外す俺。
「何してるんだ……！」
「私のぱんつ、はいてください……。勇気の出るおまじない……」
　それは呪のろいと書いてお呪まじないじゃないのか。
「……総二さん、手……」
「手？」
　イースナに言われて自分の手を見る。いつの間にか、左の手首に手錠がかけられていた。
　手錠からは鎖くさりが伸び、部屋の勉強机の方へと伸びていく。
　嫌な予感がして勉強机の隣の犬小屋を見ると──

「慧え理り那な!?」
　朝のランダムエンカウントになって久しいお嬢様が、犬小屋から不安げな眼まな差ざしを送ってきていた。いつのものように、嬉うれしそうにはあはあしているわけではなく。
　おかしい、今その視線を放つ義務は俺にこそあると思うのだが。
「観み束つか君が安心して眠れるように、ここで守っていましたわ……」
　もう守られるだけのツインテールではない。慧え理り那なの瞳ひとみは、仲間を守り抜くという強い意志で輝いていた。
「こうしてわたくしと観束君は、繫つながっています。わたくしはずっと、観束君のそばにいますわ。だから、安心して眠ってください」
　手首に手錠がはまってて、そこから鎖くさりが伸びて女の子の首輪に繫がっていて、その女の子は犬小屋にいて。さあ安心してお眠りなさい、と聖母は犬小屋より囁ささやく。
　眠れるだろうか。
　護衛対象を犬小屋からそっと見守るという、世界空前のＳＰに成長した慧理那。彼女へ素直に労ねぎらいの言葉をかけるには、俺はあまりにも無力だった。
「あ、ありがとう慧理那、でも……」
　とりあえず手錠は外そう、と提案しかけた時、俺の部屋のドアが突然蝶ちよう番つがいから外れ、しかも下からコミカルな脚が生えて自走、階段を降りていってしまった。……え？
「まったく……考えることは……みんな同じですね……ぜえ、ぜえ……」
　トゥアールと愛あい香かが、サイレント映画風味に取っ組み合いながら部屋に入ってくる。
「壊されるどころか家出までさせられんのかそろそろドアを許してやっ

てくれよ!!」
「ご安心ください総そう二じ様、部屋のドアはアンチアイカシステム九号、アイカニコワサレルマエニニゲールに改造しておきました。ドアの破壊が一番の総二様の安眠妨害でしたからね」
　俺を案じていつものように二人の乱闘でドアが破壊されることを避けてくれたようだが、そもそも何な故ぜドアを普通に開くという、シンプルかつ普ふ遍へんの行動に辿たどり着かないのか。
「逃げるんじゃなくてあたしに向かってくるように改造しなさいよ、それじゃもう打倒愛香アンチアイカじゃないじゃない………」
　本当にそれでいいのか、愛香。何な故ぜ、戦わずして逃げることを良しとしないのか。
　二人は一晩中喧けん嘩かしながら、俺を気にしてくれていたのか……。
「愛香さんとトゥアールさん、いつも、一緒……。や、やっぱり、ティラノギルディの見立ては、正しい……」
「だから百ゆ合りじゃないって言ってんでしょーが……!!」
　愛香の訴えを眼め鏡がねのレンズで弾はじき返し、余裕のイースナ。
「あ」
　ジャージのポケットから、携帯電話を取り出した。
「……フェ、フェニックスギルディから、メールがきました……」
「何だって!?」
　そんな、デフォルトで搭載されてるサンプル着信音みたいにあっさり伝えていいトピックじゃあないぞ!?
「っていうかあんた、あいつのアドレス知ってたの!?」
「た、戦う前に、アドレス交換……しました……」
　まじまじと携帯電話の画面を見つめるイースナ。
「テイルレッドと、二人きりで会って話がしたいって、伝えて……。そ

う書いて、ます……」

　俺たちは一斉にイースナの周りを取り囲む。

「……ティラノギルディに俺の正体を知られてすぐ、この誘いだ。タイミングとしては出来すぎている。逆に無視して放っておく方が危険だと思う」

　言伝通り俺は一人で行くつもりだったが、それはあっさりと拒否された。

「わかった。でも、当然あたしたちも一緒に行くわよ」

「ええ。フェニックスギルディはわたくしたち三人で戦っても勝てませんでした。観み束つか君一人では危険です」

　結局、愛あい香かたちは断固として折れなかった。

　一人だけ寝ね間ま着きだった俺はドアのない部屋で衆人環視の中着替えることを余儀なくされ、地下基地に向かう。四人全員で変身し、メールで指定された場所へと向かったのだった。

　メガ・ネは万一に備えて基地に来て待機してもらっている。フェニックスギルディは侵略部隊に属しているわけじゃない。別の場所にエレメリアンが現れる可能性も充分にあるからだ。それにフェニックスギルディはテイルギアの開発者に興味を持っていた。仮面をしているとはいえ少し危険だということをトゥアールに伝え、彼女にも待機を承知してもらった。

「□□□□」

　指定された場所は、廃車が山のように打ち捨てられた投棄場を背後に臨む工場跡だった。

　巨大な土管も立ち並び、周囲からは完全に隔絶されている。

　まるで怪しい取引か何かのようじゃないか。

　指定場所に近付き、そこで待つ者を視認した時……思わず目を丸くした。

「おいおい何だよ、ガン首揃えて……。俺様はテイルレッド一人に来てくれって言ったんだぜ！」
　フェニックスギルディはポニーテールの少女、結いわ翼ばね唯ゆ乃のに変身していた。だがそれだけではない。
　炎ほのおを編み込んだような真紅のドレスではなく、ごく普通の女の子のように洋服を身にまとっていたのだ。
　しかも、粗野な口調から連想するボーイッシュなファッションではない。
　薄赤色のチュニックに、白いミニのフレアスカート。
　すらりと伸びた脚の先には、リボンで彩いろどられたカジュアルブーツ。
　そして、様変わりした服に合わせるかのように、優しく緩やかに揺れるポニーテール。
　この美少女をエレメリアンだと言って、いったい誰だれが信じられるだろう。
「あんた、そんなおめかしまでして何のつもり。レッドとデートでもしようっての？」
「おう、そうだ！　デートしようぜ、デート!!」
「……はあ!?」
　皮肉を真っ正直に返され、ブルーも思わず脱力する。
　だが、続く言葉に再び俺たちに緊張が走った。
「つーか、俺様はテイルレッドじゃなく正体の方と話してえんだけどな」
「それが貴様の狙ねらいか、焼き鳥。相変わらず好奇心だけで生きておるような奴やつじゃ」
「おう、そりゃ最っ高の生き方だもんな！　久々に会ったからって、そんな誉ほめんなって!!」

　不敵に微笑ほほえみ、ブラックへと気さくに話しかける唯ゆ乃の。腰に手を当て、全員と目で握手をするように順に視線を切っていく。
「揃いも揃って妙にピリピリしてるが……何かあったか？」
　こいつには何度もカマをかけられている。動揺は努めて隠した。
「それよりも……レッドの何が目的なのですか」
　俺たち全員が一度完かん膚ぷ無きまでに負けた相手だからだろう、常に優雅な微笑みを絶やさないイエローですら、露骨に警戒心を露あらわにしている。
「そろそろテイルレッドの正体……元の男の姿を見てみたかったんだよ。俺様はどっちの姿も見せたんだ、別に構わないだろ？」
　さすがにその見てきたかのようなタイムリーな提案には、動揺を抑えることはできなかった。
「……なるほど、さては、レッドの正体がバレたな？」
「！」
　唯乃は口くち端はを吊つり上げ、腕組みをする。
「隠さなくてもわかるぜ。俺様がお前に男だって言った時と同じ顔してやがるからさ。……だが、これで遠慮することはないだろ、元々俺様は知ってるんだからよ」
　俺に近付いてきた唯乃を、ブルーが腕を突き出し手で制止した。
「そう言われて、じゃあ二人でデート楽しんできてね、ってなるわけないでしょ」
　このまま言い合っていても埒らちがあかない。俺は覚悟を決めてブルーたちから離れた。
「俺は大丈夫だから……こいつと二人にしてくれないか、みんな」
　俺はブレスを胸の前にかざし……数秒の逡しゆん巡じゆんの後、変身を解除した。
　あちゃあ、と額を押さえるブルー。

「唯乃。俺もお前とは一度、腰を据すえて話してみたいと思っていたんだ」
　俺の全身をくまなく観察し、最後に顔をまじまじと見つめてくる唯乃。
「へー。なかなかいい男じゃねえか！」
　こいつが元は男の人格のエレメリアンだったことを考えると、そう誉ほめられても複雑だ。
「俺は観み束つか総そう二じだ。……よろしくな、唯ゆ乃の」
「おう！　総二!!」
　こいつには、イースナとメガ・ネを助けてもらった恩がある。イースナはもう俺たちの仲間だ、俺から借りを返しても問題ないはずだ。
「ついてきてくれてありがとう。もう大丈夫だから、みんなは基地に戻ってくれ」
　不安そうに見てくるブルー。
　すぐに力ずくで止めようとしてこないだけ、愛あい香かたちもフェニックスギルディへの認識は他のエレメリアンと一線を画しているんだろう。
「……何かあったら防犯ブザー鳴らすからさ」
　文化祭の時の愛香自身の受け売りで和なごんでもらおうと思ったのだが、ブルーの表情からは最後まで険けんは取れなかった。
　しぶしぶ帰っていく仲間たちを、視界から完全にその姿が消えるまで見送る。
「随分念入りに見送るんだな」
「ああは言ったけど、素直に帰るとは思えないからな……」
　愛香たちの姿が見えなくなるまで、ずっとその背中を見ていた。
「さあーて。今日はずっと暇ひまか？　ゆっくり語り合おうじゃねーか」

「ああ……休日だからな、時間はたっぷりある」

　こいつには、聞かなければならないことが山ほどある。

　亜流のテイルギアを所持していることもそうだが、この世界を見定めるために逗とう留りゅうしているなどと嘯うそぶいて、実際は何が本当の目的なのか知れたものじゃないからな。

「…………」

　あらためて、唯乃を観察する。

　まさか、本当に俺とデートをするためにわざわざ服を買って、おしゃれをしてきたのか。

　俺なんて、寝間着から適当に着替えただけ。シャツに軽くジャケットを羽は織おり、ジーンズを引っかけてきただけだ。突っ掛けで済ませなかっただけでも幸いだった。

　別に申し訳なく思う謂いわれはないが、せめてイースナにメールを送る時点で詳しく書いていてくれれば、と思う。

　でも、最初からデートなんて書いてあったら、もっと警戒してたに決まってるか……。

「ん？　どうした？」

「スカート……穿はくんだな」

　何を言ってるんだ、俺は。元々ドレスを着てたじゃないか。

「これな、名前を教えてもらって気に入ってよ！　炎フレアスカートっていうらしいぜ。俺様にピッタリだ!!」

　いや、俺も服のことはよくわかんないけど、多分そっちのフレアじゃないと思う……。

　改めて見渡すと、殺風景な場所だ。こいつなりに気を遣って人ひと気けのない場所を選んだのだろうが……話すだけならともかく、相当歩かないと時間を潰す場所なんてなさそうだぞ。

　唯ゆ乃のは俺の手を唐突に摑つかむと、砲弾のように空へと跳躍し

た。
「何っ⁉」
「とりあえず街に出ねーと！　こーんな土管とオシャカになった車ばっか見て、動物園代わりにするわけにもいかねーだろ‼」
「お前……人間の姿で空飛べるのかよ⁉」
「あんま動くなよ、力は抑えてるがこの炎ほのおは本物だ！　触れると大火傷やけどだぜ！」
　雲を眼下に望む高空。しかし、肌に感じるのは仄ほのかな温ぬくもり。
　唯乃はその小さな背に、巨大な炎を翼のように吹き咲かせていた。服に僅わずかな焦こげも作るまいと、身体からだから離れた位置で炎が固定化している。
「んじゃ、どこに行く？　最初に映画でも観に行くか？」
「映画館の入り方知ってるのか？　それにまだ八時前だから多分どこも上映してないぞ」
「エレメリアンは原始人じゃねえんだぞ、人間にできて俺様たちにできねえことはねえよ！」
「そりゃそうか……」
　そもそも、エレメリアンは人類を遥はるかに超越した科学力を持っているんだ。
　この世界の機械やシステムなんて、使い古した子供の玩おも具ちゃみたいなものだろう。
「変装がめんどくせえから直接は観に行かねえが、エレメリアンだってアニメの映画とか普通にチェックしてるぜ、基地で」
　……別に戦力の分析とかじゃなく、純粋な好奇心で一度、あいつらの基地に行ってみたい。
　あいつらの日常や、どんな会議をしているのかを、心ゆくまで観察し

てみたい。
「ほら、どこでもいいから行き先を決めろって。こういうのは男が決めるもんなんだろ？」
「……お前なあ……」
　一人で異世界を行あん脚ぎやしているからか、妙に俗っぽいことを言う。
　だけど、映画館だと話し合いができない。それに、あまり人が密集していない方がいい。
　さっき、こいつが動物園と口にしたのを思い出した。

　　　◇

　イースナの専売特許のオーラ、ストーキングブラックが、全員の身体に伝染している。
　愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナは一列縦隊で総そう二じたちの後をつけていた。
　唯乃は上う手まく撒まいたつもりかもしれないが、トゥアルフォンを携帯している総二と一緒にいる限り、たとえマントル層に逃げ込んでも居場所は突き止められる。
　総二たちと別れた後、ブルーたちはすぐに基地へと帰還。トゥアールと合流して再度基地を後にし、程なく二人の行方ゆくえを摑つかんだ。行方を眩くらませるつもりか、唯ゆ乃のは総そう二じを連れて空を飛んだようだが……そうはいかない。地球の果てまで逃避行をしようと必ずや追い詰める。
　目的地が定まったのだろう、徒歩に切り替えたところで愛あい香かたちも追いついたのだ。
　しかし、総二が着替えている間に自分も着替える余裕はあったろう

に……イースナはいつもの群ぐん青じよう色のジャージ姿のままだ。またも世話焼き気質が出たか、愛香は小声で注意する。
「イースナ、いくら何でもジャージの他に私服持ってるでしょ！　出かける時ぐらい……!!」
　朝っぱらから隠密行動をする以上、目立つのは厳禁。群青色のジャージは着飾った私服より存在感を薄れさせてくれる。ストーキング……もとい、スニーキングのためのスタイルだ。
　ものぐさだからジャージを着るのではない。
　愛する者を追跡する戦闘服バトルジヤケツトとして、ジャージをその身にまとうのだ。
「こ、この距離を……堅持、してください……」
　イースナは先頭に立ち、特殊部隊の指揮官のように愛あい香かたちへと指示を送っている。
「了解しましたわ！」
　慧え理り那なはノリノリだが、愛香はふと我われに返って自分の今の状況を俯ふ瞰かんしたのか、げんなりとしていた。
「まさかストーカーに指南される日が来るとは……」
　可愛かわいい女の子が集まって一点を凝視しているのだから、どれだけ距離を取ろうが傍はたから見れば怪しすぎる集団だ。イースナは周囲の視線を敏感に察知し、神ゴツド眼め鏡がねのブリッジに触れた。
「……み、みんな……この眼鏡をかけてください……ポリシーには反しますが、変装用……」
　神ゴツド眼め鏡がねから人数分の眼鏡を出現させ、のそのそと配布するイースナ。
「どーせならサングラスにマスクでもいいわよ？」
　半なかばやけくそになって眼鏡を受け取り、すんなりとかける愛香。
　善いい沙すな闇あん子こがデビューしたての頃ころ、彼女に対抗して

愛香も眼鏡をかけた経験がある。トゥアールも、会議中にノリで女教師スタイルを披露したりするので、やはり眼鏡は慣れている。
　慧理那だけは眼鏡に慣れていないはずだが、彼女は不思議なフィット感を覚えていた。
「思い出しますわ、観み束つか君にあいますくをしてもらったこと……」
「アイマスク⁉　首輪じゃなくて⁉」
「ええ、あいますくをして、手錠をして、観束君に手を引いてもらいましたの。わたくしのあれも、デートだったのでしょうか……」
　陶とう酔すいするように虚空を見つめる慧理那。コミケのことを思い出しているようだが、現場を目撃していない愛香にとっては聞き捨てならないプレイだった。
「トゥアールも会長も、あたしの知らないところで何で進展してんのよ⁉」
　臍ほぞを噛かみながら、愛香は遠く先を歩く唯乃を睥へい睨げいする。
「結いわ翼ばね唯乃……普通に可愛いじゃないあいつ、何なのよ、エレメリアンのくせに胸あるし……男のくせに胸あるし……‼」
「よ、よく考えれば、そもそも、エレメリアンは……人格以外に、男性と判断する要素がありません……。元々、女だったことに、気付いていないのかも……」
「──あたしが戦ったエレメリアンには胸のある奴やつがわんさかいたわよ。あいつはエレメリアンの姿の時は胸ないじゃない、だから男よ」
「この忙しい時に突っ込ませないでください愛あい香かさん。胸の有無で性別を判断するならば、街頭クイズで一〇〇人中一〇〇人が愛香さんの写真を見て男と答えるレベルの難易度イージーですよ」
　慌てて慧え理り那なが止めようとするが、もう遅い。

「大人数で尾行をするのは得策じゃないわね、一人減らそっと」
「びこ————————————————————————ず!!」
　接続詞で韻いんを踏むという高等テクニックで叫びながら、トゥアールは宙に打ちあげられた。
　美少女が空から落下し地面に激突するのを目の当たりにする──二人のじゃれ合いを日常風景として慣れ親しんでいない地域の人々では、大おお仰ぎように驚くのも無理はない。
　辺りが騒然とし出したのを受けて、遥はるか先の歩道を歩いていた総そう二じと唯ゆ乃のも愛香たちの方を振り返ってしまった。
「……まずっ！」
　愛香は一番近くにいた慧理那を。トゥアールは、落下位置の傍そばにいたイースナを。
　それぞれ、電柱と商店の立て看板に押し倒し、力一杯抱き締めた。
　カップルのふりをしてやり過ごす──古典的な手だが、少女同士、しかも同じ場所に二組固まるという致命的なミスを犯してしまった。
「津つ辺べさん!?」
「ごめん会長、ちょっと我慢して!!」
　背の小さな慧理那が力強く愛香に抱き締められるのは、抱ほう擁ようというより捕食を連想させる。
「トゥアール、さん……」
「何速攻で順応しておっぱいに顔埋うずめてるんですか!!」
　イースナは、ハプニングを早々に受け容いれ、トゥアールの胸に文字通り頭を沈めていた。
　二対の百ゆ合りを以もつて、尾行を堅持する。愛香たちは、恥ずかしさよりも総二を見守る任務を優先した。顔を見られるわけにはいかないので、頬ほおが触れ合うほど堅く抱き締め合っている。
「百合か、最近流は行やってんな!!」

「……いや、うん……」
　一瞬振り返っただけで、唯乃はすぐに興味を失った。
　総二は、何な故ぜか溜ため息いきをつきながら歩速を早めた。唯乃もポニーテールを元気よく揺らし、隣をキープする。



　通行人がじっと見ているのを横目で感じながらも、たっぷりと時間をかけて抱き合い続けて誤ご魔ま化かす執念。体感時間で数十分、実際には一分の後、ようやく四人は離れた。
「ごめんね会長、痛くなかった？」
「津つ辺べさんは、やっぱりゆりですの？」
　天使の笑顔で再確認され、愛あい香かは自信なさげに自分の手を見つめる。
　エレメリアンを殴なぐり、トゥアールを殴り、そして慧え理り那なを抱き締める。自分の手をすり抜けて、総そう二じは別の女と歩く──。この手は、一体何のためにあるのか。
「わかりました、トゥ、トゥアールさんがよければ、３Ｐにしましょう……」
「その他カテゴリにＣＧが埋まる雑ざ魚こヒロインが何な故ぜそんな上から目線を⁉」
　一旦離れたイースナが、自発的にトゥアールの胸に再突入する。
　トゥアールにその気はなくても、定期的に餌えさをやってかつての想いを再燃させているも同然だった。
　長い間テイルレッドにちゅーしようとしてきた日々が、計らずとも女同士のスキンシップの敷居を急下落させてしまったのだろうか。
　ティラノギルディに対抗するに相応ふさわしいポテンシャルを発揮しつつ、愛香たちの尾行は続く。

◇

　最初の廃工場ですらすでに地元からかなり離れてしまっていたが、今はそれに輪をかけて遠くへ来てしまった。
　俺が行き先に動物園を指定すると、どうせなら大きい方が、というこ

とでその近くまであっという間に飛んでいったのだ。後は、動物園までの道中、ウィンドウショッピングよろしくぶらぶらと二人で歩いた。背後に気がかりな気配を感じたが……。

　動物園に到着すると、振替休日の学校が多い週なのか、予想していたよりずっと混雑していた。人が多ければ多いほど、常人離れした唯ゆ乃のの美しさは際立つ。

　──そして、なおかつ紛まぎれる。

　エレメリアンはたいてい、凶暴な見た目だ。だが一般人からは、その明確な怪人然としたビジュアルのおかげで、逆に恐れられていないとも言える。

　わかりやすい怪人然とした姿。ある意味わかりやすく、時には共感さえもたらす行動原理や主張。

　決して人間と相あい容いれない潔いさぎよさ。侵略者として認識できることが、逆にエレメリアンという異形の怪人に襲われているのだという意識を人々から忘却させるのだ。

　目に見えぬ侵略者──人類にとって、もっとも恐ろしいのはそれだろう。

　エレメリアンがもし、堂々と姿を晒さらし信念を叫ぶ存在ではなく、人間社会に溶け込んで内側から侵食していくような存在だったとしたら──。

　人間と同じ姿をしたエレメリアン・フェニックスギルディ。結いわ翼ばね唯乃を見て、俺はそんな侵略者像を思い描き──エレメリアンが潔い存在であることに、あらためて安あん堵どした。

「おおー、ゴリラだぜ、ゴリラ！　懐かしいなあ、お前と初めて会った世界にいたよな、ツインテールのゴリラ!!」

　もちろん、俺も覚えている。あれからもテレビの動物特集なんかでゴリラが出るたびに、脳裏を過ぎるのはあのツインテールのゴリラさ。

「おっ、やっと笑ったな総そう二じ！　ずーっと難しい顔ばっかしてたもんなあ！　もっと笑え！」
　唯乃の言動が、今朝の愛あい香かたちと重なった。俺を元気づけてくれようとする友達。仲間。
　少しずつ、俺の中に願いが膨ふくらみ始めた。
「なあ、唯乃」
「なんだー？　総二」
　にかっと笑い白い歯を覗のぞかせる唯乃。
　天てん真しん爛らん漫まんな仕草に、思わず目を奪われてしまう。
「もしかしてお前、俺たちの代わりに一度この世界で戦ってくれたことがないか？」
　軽い世間話として、密ひそかに気にかかっていたことを尋ねた。
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士と俺たちが戦った時、これで四回目の戦い、みたいなことを言っていたんだ。そいつの前には二度しか戦っていないのに、変だと思ってさ」
　唯ゆ乃のは頭の後ろに手を回し、俺の問いに対してすんなりと認めた。
「……ああ。黄色の姉ちゃんが美の四心ビー・テイフル・ハートとバチバチ撃ち合った後、力尽きたお前らを狙ねらってる奴やつがいてよ。俺様がとっちめてやった!!」
　そんな伏兵が潜ひそんでいたなんて……。
「どっちにも肩入れするつもりはねえが、筋を通さないやり方は大っ嫌いなんでな。力いっぱい戦った戦士たちの漁夫の利を当て込む奴は、俺様の正義の心が許せねえ」
　どちらにも付く気はない、か。その流儀は変わらないな。
「ったく、こーいうのは気付かれずに助けるからかっこいいのによお!!」

　照れくさそうに笑い、ポニーテールを翻ひるがえす唯乃。目を奪われずにはいられなかった。
「へへ、気になるか？　俺様のポニーテールが」
「……まさか」
　ついそっぽを向いてしまう。
「いいことじゃねえか！　ポニーテールの良さに気付くのは」
　とっくにわかっている。言っているだろう、わかり合えないかと。
「触ってみろよ」
「何でだよ!?」
「なあなあ、いいだろ？」
「よ、よせって！　……あ」
　結局強引に触らせられる。確かに、手触りは素晴らしい。
　だけど、ツインテールに触れている時のような感動はない。
　唯乃は、そんな俺の反応をどこか訝いぶかしんでいるようだった。

　動物園を後にし、様々な場所を巡る。俺たちは他愛のない話を続けた。
　ファーストフード店に入りたいと言われ、手近な店へと足を運ぶ。唯乃はテイルレッドのフィギュアがおまけでつくバーガーのセットを頼んでいた。
　次は水族館。おそらく、動物に興味が出たのだろう。
　書店に行って、いつ撮られたのかわからないテイルレッドの写真がグラビアのように表紙を飾る雑誌を手に、唯乃は嬉うれしそうにはしゃいだ。
　帰りは、紅葉に色づき始めた街路樹を歩き、市民公園を散策する。
　愛香とは昔から二人でよく出かけたけど、女の子からデートだと明言されたのはこれが初めてだ。唯乃と過ごす時間があまりにも自然すぎ

て……俺は言わずにはいられなかった。
「……身体からだが完かん璧ぺきに人間と同じで、こうして人間である俺とコミュニケーションできる……つまり、心がある。お前はもう、人間そのものじゃあないのか？」
　唯乃はかがんで地面に落ちていた手の平大の石を拾い上げる。
「見な」
　俺に視線を送ると、雪玉のようにあっさりと石を握り砕いてしまった。
「石を軽く砕き潰す人間がいるかよ」
「程度の差だ。俺の周りにも、変身しなくても強い子はたくさんいる。石を握り潰すのは無理でも、蹴けり砕くぐらいならできたりな」
「……マジかよ」
「……それに力を持っていることで人間であるのを否定するなら、お前のそのポニーテールだって否定するようなものじゃないか」
　まあな、と気のない返事をする唯ゆ乃の。
　ベンチを見つけ、二人並んで座る。何か、今日はやけにしんみりしてて、調子狂うな。
「なあ、総そう二じ」
　前髪同士が掠かすめるほどの距離に唯乃の顔があり、思わず上体を仰のけ反ぞらせる。
「お前、子供の作り方ってわかるか？」
「は⁉」
　唯乃は俺を無む垢くな表情で見つめ……子供のように好奇心たっぷりに聞いてきた。
「ちょっと俺様にやってみてくれねーか？」
「いやいやいやお前……！」
　閑静な公園で、石が砕けるような音が聞こえる。ほら唯乃、お前だけ

じゃないだろ……。
「俺だって、そういうことを何も知らないわけじゃない。でもな、子供を作るのは……好きな人同士じゃなきゃ駄目なんだ」
　俺はわざとらしく咳せき払ばらいをし、大人が子供をはぐらかすように答えた。
「ふうん。じゃあ何の問題もねーじゃねえか。俺様はお前に惚ほれてんだからよ!!」
　そんな仕草、狙ねらってできるほどの知識はないだろうが……それを聞いた唯乃が、目を細めて俺を見つめる。小悪魔的な魅惑を存分に放って。
「……エレメリアンが……人間と子供を作れるか……共存のためにか」
「んな小難しいこと俺様が考えっかよ。興味本位だ」
　ベンチの背もたれにポニーテールを預け、唯乃はけらけらと無邪気に笑った。
「……つーか、人間になった俺様の身体からだが、お前を求めてるみてえなんだ」
　唯乃は、人間になった自分の身体、自分の感覚を持て余しているのだろうか。
「よくわかんねえけど、笑ってるお前を見ると、身体中のあちこちがむず痒がゆくなるんだ。やっぱ、人間になったからだろうな、って思ってよ」
　一つ言えるのは……それすらも、唯乃は楽しんでいるようだということだ。

「エレメリアンの分際で三段飛ばしで子作りとか、誰だれに許可取って言ってるんですか！　そのテーブルに乗っかってる童貞は私のフルコースです!!」

「もーいい、もー止やめる！　人間の姿してようがエレメリアンなんだし倒せばいいでしょ!!」
「落ち着いてくださいまし津つ辺べさん、わたくしがお散歩をお願いして偵察に……」
「……は、初めてが野外……あの焼き鳥も、あんなエロゲ脳だったなんて……」

　もう隠れるつもりもないのか、木陰から聞き慣れた喧けん騒そうがさんざめいてきた。
「さーて。そろそろ本マ気ジで撒まくか」
「え？」
　言うが早いか、フェニックスギルディは俺の手を取り、再び空へと舞い上がった。
　とてつもない速度で飛行し、元いた街を一瞬で地平の彼方かなたに去いなした。
　Ｇを全く感じないのは、唯ゆ乃のの背に浮く炎ほのおが緩かん衝しよう材ざいの役割を果たしているのだろう。
　数分も飛び続けただろうか。列島をどんどん南下していく。
　急降下し、足をつけた地面は、一面砂の世界……。
　唯乃が連れてきたのは、蒼あおく透き通った大海を臨む、無人の浜辺だった。
「気付いてないわけないよな？　青の姉ちゃんたちが尾つけてきてたのをよ。つーか、お前さんに変身を解くなって言っておいて、自分たちはあっさり元の姿で尾けてんだもんなあ」
「見たのか」
「あっちの正体はどうでもいいからな！　ま、黄色の姉ちゃんがちんまくなってるのには、ちとびっくりしたけどよ!!」

「今まで仲間みんなの目が気になってたっていうなら、そろそろ本題に入ってもいいだろう。どんな目的で俺と会った？」
　パールホワイトの砂浜に点々と描かれる足跡のレールが、終しゆう端たんを迎える。
　今日一日、優しく風に揺れていた唯乃のポニーテールに──静かに火が灯ともるのを幻視した。
　たった一人でアルティメギルに反逆し、敵対し──自分の正義でアルティメギルの侵略から異世界を守ると豪語するエレメリアン。果てなき闘争に彩いろどられた、その燃え盛る炎を。
「お前さんも知ってる通り、俺様はアルティメギルに反逆して多くの異世界を旅してきた。世界に終しゆう焉えんをもたらす属性──ツインテール属性の過剰な拡大を防ぐためにな」
　俺がこいつの〝正義〟の一端を見たのは、ロエルとリルナの世界だった。
　属性力エレメーラを奪うのではなく、自主的に封印させ、拡散を防ぐ。
　トゥアールがツインテール属性を守るためにやるべきで……それでもできなかったと嘆いていたことを、こいつはいともあっさりと実行した。正義の名の下にツインテールを消し去っていくこいつと俺は対立し、あの世界ではそれっきりだった。
　そして再会したこいつは、目の前にいるポニーテールの少女、結いわ翼ばね唯乃となったんだ。
「この世界に来てよう、色々な発見があったんだ。それまでどの異世界に行っても、じっくり腰を下ろして見て回るなんてことはなかったからな……」
　穏やかな日差しを振り仰ぎ、目を細める唯ゆ乃の。
「面白え世界だ。何だかんだ言ってもよ、テイルレッドが正しくアイド

ルしてんのが大きいんだろうな。いい空気だ、見て回って楽しいぜ」
「他の世界ではあるのか……？　悲壮感とか……」
　ロロリーの世界では、王妃である彼女が戦うことをアピールし、国民たちが不安にならないようにと頑張っていた。だが、そう上う手まくいく世界ばかりではないのだろう。
「他の異世界じゃツインテールの戦士は基本、世界に一人だからな。青の姉ちゃんは嫌がってるみてえだけどよ、他のツインテイルズの存在も随分と大きいと思うぜ。純粋な強さのシンボル、個性、人数。あればあっただけ安心するだろうしな」
　こいつは、非は認めるし、臆おく面めんもなく自分がいいと思った人を誉ほめる素直さがある。だから憎みきれないんだ。
「そうさ、ツインテイルズ揃っての頼もしさが一番なんだ。俺の……テイルレッドのアイドル扱いなんて、根っこの部分じゃ大して影響してないって」
「馬ば鹿か。小ちっちゃい子供が怪人とボカスカ戦ってるんだぜ？　それ自体がよう、大人をやる気にさせるじゃねえか」
　唯乃はポニーテールを掻かき上げ、やれやれとお手上げのポーズを取った。
「お前さん、変身すると随分ちびっこになるじゃねえか。そうなるように仕込んだ科学担当さんは、それを期待してたんじゃねえかな、と思ってよ」
　一応探りを入れている可能性も考慮して、反応は見せなかった。けれど、トゥアールのことを評価されるのは、俺も嬉うれしい。
「子供が頑張るのを見てふてくされる大人なんて、大人じゃねえ。普通は自分も頑張ろうと思うもんよ。幸い、この世界じゃ〝大人〟が多かったみてえだな」
　唯乃は、人間よりも人間らしく、世界を俯ふ瞰かんして見ているんだ

な……。
「この世界で、面おも白しれえやつらにたくさん出会った。親ダ友チは生涯にただ一人だが……普通の友達なら、たくさんできたかもしれねえ」
「何だって!?　……人間のか!?」
「案外、交じれるもんだな、人間に」
　嬉しそうに語る横顔に、俺は淡い期待を抱いだく。信念を込めて問いかけた。
「人間として生きる気はないか、〝フェニックスギルディ〟」
「フッ……」
　笑いにそれまでなりを顰ひそめていた戦士特有の翳かげりを見て、俺は二の句を継げなかった。
「そういや前に少し話したよな、俺様の親友のことを」
　だから、唯乃が会話を終わらせずに続けようとしたことが意外で、やおら振り返った。
「俺様の親友のエレメリアンはな、まあしちめんどくせえ奴やつでよ。何でも数字で考えるし、興味を持ったらネジの巻き数まで解かい剖ぼうしなきゃ気が済まねえような科学馬ば鹿かだった」
　トゥアールのテイルギアを絶賛したっていう、あの……。
「でもよ、最高に可イ愛カいす奴だった。俺様は、誰だれよりも尊敬してたよ」
　再び歩を進め──砂浜を跳ね、波と戯たわむれる唯ゆ乃の。
「そいつが最後に目指したのが、人間になる研究だ」
　波打ち際で足を差し出し、波が触れるか否かに引っ込める。その可愛かわいらしい仕草は、紛まぎれもなく普通の人間の女の子だった。
「どんなに属性を愛しても、奪わなきゃ生きられない……。属性を好きになればなるほど、手に入れたいと思ってしまう……。俺様たちエレメ

リアンは、結局のところ自じ虐ぎやくを続けて生きていかなくちゃならねえ存在だ。もちろん、誰も悲劇ぶったりはしねえがな」
「……ああ、そうだよな……」
「だがそいつは、人間になりゃ奪わなくて済む、なんて言った。人間なら、愛した属性をずっと見ていられる、ってな……。俺様も燃えてきてよ、自分なりにポニーテールを目指した」
　唯乃は自分の手を太陽にかざした。
「結局そいつは倒やられちまったが、競争相手だった俺様は真のポニーテールに到達した」
　エレメリアンがポニーテールに到達する……それは、人が太陽に辿たどり着くのと同じだと暗に語るかのように。
「俺様にとって大事なのは、男か女かじゃねえ。ポニーテールを目指し……そして、ポニーテールに辿り着いた事実だけだ。俺様は女になったんじゃねえ、ポニーテールになったんだ」
　同じだ……俺と……。
　最初は俺も、女の子に変身することを恥ずかしがっていた。
　けど、それぞれの信念を持ったエレメリアンたちと戦って……ツインテールを守ることの尊さを知った。
　女の子に変身するんじゃなく、ツインテールになる──そう誇れるようになった。
「だから俺様はもうエレメリアンかどうかなんて関係ねえ。ただ自分の真実ポニーテールのために生きていければ、それでいい」
「人間として、生きたいっていうんだな……！　唯乃!!」
　にわかに高鳴る動どう悸きを抑えられない。先ほどは答えをはぐらかされたが、こいつの本心はもう疑いようもない！
　元エレメリアンだから何だっていうんだ。過去の過ちもきっとやり直せる。

　フェニックスギルディは……唯乃は、人間として生きていける。
「……俺様を人間だって言ってくれんなら、一つだけ頼みを聞いてもらっていいか？」
「ああ、俺にできることなら！」

「────テイルレッドをやめてくれ」

　あまりにも自然に紡つむがれた言葉を、俺はにわかには反はん芻すうできなかった。
「────え？」
「お前はもう、これ以上戦うな……」
　暑苦しい言動が誇りの奴やつだったはずだ。
　それが今は、しぶく波の音よりも冷たく、無機質に……淡々と言葉を重ねていく。
「悪わりィな。ちょっと気になることがあってよ、今日一日、お前を観察させてもらった」
「デートっていうのは、やっぱり嘘うそだったのか」
「デートしながら観察してたんだよ。お前がどれだけツインテールを愛してるのかをな」
　この先もテイルレッドとして戦っていけるか、愛の強さを計ったってことか……。
　やめろと言われてヒヤリとしたが、そういうことなら俺も反論しないわけにはいかない。
「何だ、驚かすなよ……。大丈夫だっただろう？　俺のツインテールへの愛は底無しだ」
「だから、やべえと思った。こいつは、ツインテールを好きすぎるってな……!!」

　何を言ってるんだ……!?　ツインテールを好きすぎることの、どこがいけない!!
「俺様はポニーテールへの愛で、最終闘体の極限まで到達し、この姿に……ポニーテールになった。じゃあ、人間の最終闘体なんてもんがあったら、それは何なんだろうな……？」
「……そんなのはない……。人間は人間だ」
　会話をしているという現実感がない。身体からだが浮き上がっていないかという心細さを隠すように、俺は一歩一歩砂浜を踏みしめて歩み寄った。
「まさか……俺が強くなったら、お前の逆に……エレメリアンになっちまうとか言うつもりじゃないだろうな」
「エレメリアンだったら、まだマシかもな」
　唯ゆ乃のは、自らポニーテールを掬すくい上げ、悲しげに見つめた。

「お前はこのままじゃ──ツインテールになっちまうかもしれねえ」

「……何を……何を言ってるんだ、俺はもうツインテールになってる!!」
「ツインテールそのものになる、って言ってるんだぜ……!!」
　本気の目だ……。こいつは本気で、俺がツインテールになると思っている……。
「究極のツインテール……戦った奴にそう呼ばれただろう？　何度か」
「ああ……」
　リザドギルディ……初めて戦ったエレメリアンが、すでにそう叫び探し求めていた。
「究極のツインテールってのは、首領が最初に口にした言葉なんだってよ。いち侵略部隊にとってそれは、その世界で一番強力なツインテール

属性の持ち主。つまり戦士の素質を持ったツインテールだ。世界侵攻のシンボルみてえな扱いだな」
　そうだ。俺もそう思っていた。そして、俺はトゥアールのおかげでアルティメギルの作戦に組み込まれるのを免まぬがれ、今日までこうして戦い続けている。
「俺様も、親友ダチのラボで残し書きを見るまではそう思ってた」
　テイルギアＴＹＰＥ-Ｐを託したという謎なぞのエレメリアン……。前にこいつが、親友がトゥアールを誉ほめていたと言っていたが、聞けば聞くほどとんでもない奴やつみたいだな。
「真実は違う……らしいぜ。親友ダチはなにかと首領に煙たがられてたが……それを知ったのが、決定打だったのかもな」
　親友への悼いたみと、首領への怒り。二つの感情を綯ない交ぜにしたように、唯乃は語る。
「究極のツインテールは全異世界にただ一人……。それが覚醒しちまったら、望む望まないにかかわらず、世界中の全てがツインテールになる」
「何だと⁉」
「人間は一人残らず、無む理り矢や理りツインテール属性を持たされて……そしてエレメリアンが奪うのさ……」
　そんなの、もう作戦ですらない。養殖よりもおぞましい無機質な簒さん奪だつだ。
「たった一人のツインテールが、全宇宙を滅ぼすっていうのか‼」
「宇宙どころじゃねえ、全次元だ。究極のツインテール一人いれば、全ての平行世界の侵略は事足りる。そのツインテールがもたらす支配力には、あらゆるものが抗あらがえないんだとよ」
「そんな、馬ば鹿かなことが……」
　……そんな馬鹿なことを、俺はつい最近戦いの最中に聞いていた。

『その愛らしき口が紡つむぐはもはや注意ではない、逆らうことすら本能が拒こばむ神言も同然の圧倒的支配力！　この幼子、我らが偉大なる首領様と同じ領域にまで近付きつつあるのでは!?』
　逆らえない言葉……。いや、そんなのはただのハッタリのはずだ……!!
「だから首領は、多少手て強ごわい戦士が出てきて、どれほどエレメリアンを倒そうが放っておくのさ。そん中からいつか、究極のツインテールが現れるのを待ってな」
　そうだ。少しずつ、段階を踏むように強敵を投入してくるのは、まさにツインテールの戦士を育てるためのステップアップ……。
「気付いたみてえだな。やっぱお前は感受性がすげえよ。普通の人間なら笑い飛ばしちまうようなことでも、真剣に考え、悩んじまう」
「そんなこと、別に珍しいことでもないだろ！」
「かもな……。この世界で知り合った気のいい奴らも、そんな感じだ……。だがそういうやつほど、真実を知ったら立ち直れなくなる。その筆頭がお前ってことだぜ」
　水平線を背に立つ唯ゆ乃の。沈みゆく太陽と、その儚はかなげなポニーテールが重なった。
「お前は確実に究極のツインテールへと近付いてる……。もしそうなっちまったら、お前は自分自身の手で全ての世界のツインテールを滅ぼしちまうんだ！　他の世界で戦ってるツインテールの戦士たちの結末の比じゃねえ、人間の心で耐えられるような悲劇じゃねえよ……!!」
「俺だけ……だっていうのか、全ての世界で……」
「ああ、この世界が特別なんじゃねえ！　他の姉ちゃんたちは正しく強くなってる……適度にツインテールと距離を置いてるが、お前は危うい！　どんどんツインテールに近付いてってるのがわかんねえのか!!」
「わかるか!!」

　俺が精一杯の抵抗を叫ぶと、唯乃はおもむろに俺の腕をねじり上げ、
「うおおお!!」
　熱き咆ほう哮こうと共に、摑つかんだ手を自分の胸に押しつけた。
「うおわあああああああああ、何してんだ!!」
　そのきめ細かく整った顔立ちに、一層の不安が広がっていく。
「……嬉うれしくねえのか」
「えっ……」
「女の胸を触って、嬉しくねえのか！　大人の女に、でけえって誉ほめられた胸だぞ!!」
　石をも砕く膂りょ力りょくで押さえ込まれ、腕はぴくりとも動かせない。
　反射的に指だけを動かしてしまい……揉もんでしまい、唯乃がびくりと身体からだを震ふるわせた。
「うわっ、ごめん……！」
「……ん、何だ、この感覚……何か、お前が指を動かすとむずむずするぞ」
　また未知の感覚に戸惑うように、陶然とした憂うれいを溜ため息いきとこぼす唯乃。
「総そう二じ。エレメリアンの俺様だってわかるぜ。人間の男は、女の胸を触れば嬉しいはずだ。だが、お前のその無反応は何だ!?　感触は人間の女と変わんねえだろう!!」
　そういえば、俺に腕を絡めた時、トゥアールもやけに懐疑的な視線を送っていた……けど。
「違う、無反応じゃない！　俺だって女の子の胸を触れば戸惑う!!」
「何で戸惑うんだよ！　何で喜ばねえ!?」
「わかった、まず一旦手を離させてくれ、これじゃ落ち着いて話を聞けない……!!」

「いいや離さねえ！　おとなしく俺様の胸を触ってろ!!」
　何でこんなに頑かたくななんだこいつは!!
「……さっきもよ、子作りしろって言ったろ。あれ本当は、この世界で友達になった人が教えてくれたんだ。そう言えば男は喜ぶって……！　でもお前、今と同じで喜ばなかったぜ!!」
　誰だれだこいつに入れ知恵したのは……!!
「お前……女の胸を触るより、ツインテールを触る方が嬉しいんじゃねえのか？」
「……ちょっと待て、それはさすがに普通だろう。俺はツインテールを好きなんだ、ツインテールを触るのが一番嬉うれしいに決まってるだろう!?」
　唯ゆ乃のは……エレメリアンのはずの唯乃は、怪物を見るような目で俺を見た。
「お前、そこまで……」
　唯乃は冷静さを少し取り戻したのか、ようやく俺の手を解放した。
　力任せに俺の腕を握っていたその手で、優しく自分のポニーテールを掬すくい上げる。
「さっきお前、俺様のポニーテールを……髪じゃねえ、ポニーテールとして触ってただろ」
「……そ、それのどこがおかしい」
「総そう二じ……お前は、すでに属性力エレメーラでモノゴトを捉え始めちまってるのさ……。触れた髪の感触や肌の温ぬくもりじゃなく、心で感じてる。ツインテールという髪の毛じゃなく、ツインテール属性でだ。そのせいで、女の胸には無反応で、ツインテールに喜びを感じる……!!」
「だから、別に胸を触って何とも思わないわけじゃないって言ってるだろ!!」

　どう反論しても、唯乃の心は動かない。何かを確信したように表情を険けわしくしている。
「大方、遠くに離れたツインテールを感じたりもできるようになってんだろう」
　今度は、戦場でリザドギルディが叫んだ言葉を不意に思い出した。
『む、新たなツインテールの気配……どこだ、どこに隠れているー!!』
『気配ってなんだよ!!』
　そうだ……初めは俺も、ツインテールを気配で感じるエレメリアンに疑問を感じていたけど……いつの間にか、自分でもそれが当たり前になってた。
　どんどんツインテールを感じる範囲が広がっていくことに、むしろ大きな手て応ごたえを感じていた。でもそれは、ツインテールを好きな気持ちが成長した証あかしだと思ってた……。
「……お前の話が真実だとしても……俺は戦いを止やめる気はない。アルティメギルがこの世界に現れる限り、俺はツインテールと世界を守るために戦う!!」
　握った拳こぶしを振り薙ないで、唯乃は叫んだ。
「怖くねえのか、ツインテールになっちまうのが!!」
「わからねえよ！　いくら俺がツインテール馬ば鹿かだからって……ツインテールになった結末なんて想像もできねえ！」
　全てが嘘うそだとは思えない。アルティメギルに精いっぱい反逆してきたこいつが得た情報だ、信しん憑ぴよう性は高いだろう。
「けど、これだけは言える。俺は俺のままだ。何も変わらない！　俺に魂たましいを託してくれた人とそう約束したんだ！　ましてや、世界を滅ぼす存在になんか絶対にならない!!」
　だからといって鵜う呑のみにして受け容いれるほど、ツインテイルズの戦いの日々は浅くない。

「……そうか……」
　潮風に揺れるポニーテール。
　唯ゆ乃のは、後ろ手に組んで微笑ほほえみ、俺に感謝してきた。
「総そう二じ。楽しかったぜ、今日は……何か、すげえ胸が熱くなったよ。ポニーテールってだけじゃねえ、女になってよかったって思った」
「ああ、俺も楽しかった……」
　何な故ぜ、つられて過去形にするんだ。
　この話はこれで終わりだ。
　あとはこいつと、夕飯でも食いに行けばいいじゃないか。
　そうだ、いっそ俺の家の喫茶店に連れて行くのはどうかな。愛あい香かは怒るかもしれないけど……きっと母さんは喜ぶぞ。
　たくさん友達ができたと言っていたけど、うちの常連客を見たらびっくりするはずだ。
　なのに何で、何でそんな悲しそうな顔をするんだ、唯乃……。
「これ以上アルティメギルに利用される前に……俺様がお前のツインテールを止める」
　無風の浜辺で、唯乃のポニーテールが静かに揺れる。
　決意の証あかし─唯乃の身体からだから、心が迸ほとばしるようだった。

「──俺様と戦え、観み束つか総二。今度は本気だ」

テイルギア設定補足 02

テイルギア
TAILGEAR



強大なツインテール属性を持つ適格者がテイルブレスを作動させ生成される、戦闘用の装甲。総数が不明のエレメリアンと長期的に戦うことを見越して開発されたため、低負荷高戦闘力が設計思想となっている。本来同種の属性力（エレメーラ）の共鳴は強大な力を生み出す反面、極めて不安定で暴走の危険を強く内包する禁忌の技術だった。トゥアールは二つの属性力（エレメーラ）を、装甲の生成、その制御という別々の役割で運用することでこの点をクリアした。自分自身のツインテール属性がテイルギアの制御という役割に専念しているため、装着者の動揺や不安、恐怖など負の感情がダイレクトに反映され、時にそれが弱体化などに繋がり、これだけは設計段階から不可避のデメリットだった。一方でそれは、装着者の心に呼応して強化をも促す、最大のメリットでもあるのだ。

安定性を重視して開発されたテイルギアだったが、際限なく強くなっていくエレメリアンに対抗するため、心を強く燃やすことで得られるギアの成長幅だけでは不足し、総二たちはテイルギアそのものを自ら進化させ圧倒的な力を発揮し始めた。しかし一方でそれは、装着者に負荷をかけないようにするという当初の設計思想と相反するもの。トゥアールはその点を危惧しているようだ。



※テイルギアの各部名称は1巻92・93P参照

第五章　ツインテールＶＳポニーテール。

　唯ゆ乃ののポニーテールから炎ほのおが迸ほとばしり、彼女の全身を抱き包むように渦巻いていく。
　天に逆さか昇のぼる炎が内へと爆縮し──現れるは不死鳥。
　太コ陽ロ風ナを体現した棘とげばった身体からだに、天摑つかむ巨翼。
　フェニックスギルディが、三み度たび俺の前へ顕けん現げんした。
　信念に漲みなぎる双そう眸ぼうを目まの当たりにしながら、まだ俺は現実を認められずにいた。踵かかとで砂を掻かき、じわじわと後あと退ずさる。
「やめろ……お前とは戦いたくない!!」
「観念しろよ、総そう二じ」
　何な故ぜだ……胸よりツインテールを触る方が嬉うれしいと言ったことが、何故望まぬ戦いの引き金となってしまったんだ!?　あんなに嬉しそうにして……世界を楽しいと笑ってくれたこいつと、敵として相対するなんてできない!!
「テイルレッドは化け物相手でも信念を受け止めて、尋常の勝負を受けてくれる女神……てな評判だぜ。だから俺様もこの姿になったんだ」
　この姿なら戦えるだろうというのか。
　それとも、今の俺などテイルギアをまとうまでもないというのか。
「どうしても嫌だってんなら、尻しつ尾ぽ巻いて逃げても構わねえぜ。そん時は俺様も化け物らしく、その辺の人間から属性力エレメーラをいただくからよ」
　……下手な挑発を……あれほど正義にこだわるこいつが、そんな真ま似ねをするはずがない。

いつも子供みたいにはつ刺らつとしてたくせに、今は言葉に気勢が感じられない。
「あんなに暑っ苦しかったのに……今は寝起きみたいだぜ、フェニックスギルディ……」
「ああ、眠くて仕方がねえ。こっちはとっくに覚悟決めてんのに、煮え切らねえ奴やつと喋しやべってるとよ」
……わかった。
許せ、とは言わない。俺のツインテールで、証明してみせる。
俺は右腕を胸の前に構え、初めて━エレメリアンの前で変身機構起動略語スタートアップワードを紡つむいだ。

「━━━テイルオン!!」

赤い光が爆裂し、灼しやく熱ねつに包まれていく俺の身体。
ツインテールがたなびき、溢あふれ出る力が心と身体からだを満たしていく。
俺は観み束つか総そう二じとして……ツインテールの戦士、テイルレッドとして、こいつのポニーテールに挑む!!
「おお、ホントに縮むんだな！　一瞬で変身が完了する以外にもいろいろ、外から見えねえように仕掛けがしてあるみたいだがよ！」
途端、またいつものようにはしゃいだ声でフェニックスギルディは目を輝かせた。

「ポニーテールは世界を繫つなぐ架け橋！　太陽の戦士、フェニックスギルディ見参!!」

そして、正義の味方としての矜きよう持じである口上を高らかに叫

ぶ。
「さあ、テイルレッド、俺様にギアをまとわせてみな!!」
「勝手かもしれないけど……俺はその姿の方が戦いやすいぜ」
「ああ、だろうと思ってな!!」
　全部お見通しってわけか。
　地を蹴けると同時にフォースリヴォンに触れ、走りざまに武装を抜き放つ。
「ブレイザーブレイド！」
　フェニックスギルディも銃剣武器を手にする。
「フェニックスラッシューター!!」
　炎えん刃じんと炎刃が交錯する。
　無風の浜辺に吹き荒れる、大炎の波は濤とう。
　互いの炎ココロをその身に感じながら──俺たちは、信念で斬きり結んでゆく。

「人間をなめるな、フェニックスギルディ！　俺は絶対に、アルティメギルの望むツインテールにはならない!!」

◇

　トゥアールが世界各地に設置している転送ポイントの位置を、フェニックスギルディが把握しているとは思えないが……愛あい香かたちの尾行を撒まいた二人は、最寄りの転送ポイントからかなり離れた場所に辿たどり着いていた。
　徒歩で追跡することに焦じれた愛香がこうなれば変身して駆けつけようかと皆に提案した矢先、トゥアールがテイルレッドの反応を感知した。

「戦ってる!?　そーじとフェニックスギルディが!?」
　歩みを止め、トゥアールの手にした端末へ愛香と慧え理り那な、そしてイースナは顔を寄せる。
「……今のフェニックスギルディは通常のエレメリアンと同じ方法で探知できません。おそらく、テイルギアＴＹＰＥ-Ｐにも認識攪乱装置イマジンチヤフに類似する機能が搭載されているからだと思います」
　何な故ぜ、戦いが始まるまで気付けなかったのか。いや、それよりもやはり、朝の時点で、何が何でも総そう二じのそばから離れずにいるべきだったのだ。
「私は後から向かいます！　愛あい香かさんたちは、先に総二様の元へ!!」
「わかった！　行こう、会長、イースナ!!」
　愛香たちが頷うなずき合い、人気のない場所に移動して変身しようとした矢先、新たな情報にトゥアールが驚嘆した。
「……待ってください……別のエレメリアンが現れました」
「こんな時に!?」
「しかも……テイルレッドの元に近付いています！」
　隠そうともしない強烈な反応。
　すでに覚悟を決めたかのような迷わぬ一直線。反応が示すエレメリアンは、愛香たちの後方から真まっ直すぐに二人の戦いの場へと向かっていた。

「────ティラノギルディです……!!」

◇

「覚えてるか、フェニックスギルディ……。イエローに人間になった理

由を問われて、お前はシンプルな変身願望だって言った……ただ、ポニーテールになりたかっただけだって」
　斬きり合いではなく、剣による殴なぐり合い。強引に剣と剣を撃ちつけ合いながら、俺はいつか感じた不安を吐と露ろする。
「俺とお前は同じなんだ……！　始まりが人間か、エレメリアンかってだけの違いだ！」
「テイルレッド、エレメリアンに共感しすぎんな！　危険だぜ、お前のその優しさは!!」
　そうだ、愛香にも何度言われたか……。
　だが、お前が信念のままに世界を流浪したように、俺にも変わらない信念はある!!
「俺は負けない……お前に勝って、これからもツインテールとこの世界を守る!!」
　菱ひし形がたの進化装備エヴオルブアームズを出現させ、胸の前へと突き出し構える。
「プログレスバレッターッ!!」
　フォースリヴォンにバレッターを合体させ、ツインテールを下結びへとシフトした。
「チェンジ──フォーラー!!」
　形態変化チエインカスタムした瞬間、二刀となったブレイザーブレイドを握り──奇をてらわずに最短一直線でフェニックスギルディへと迫撃する。
「……その姿のお前と戦うのは初めてだな、テイルレッド!!」
　一度こいつと戦った時は、ライザーチェインしか見せていない。そのための先手必勝だったが……俺の狙ねらいは、早くも警戒されてしまった。
　構わない。超越した高速に身を委ゆだね、相手の思考を飛び越えて先

の先を徹底すればいい！

　ブレイザーブレイドを大上段に振りかぶる。

　フェニックスギルディが頭上に構えた剣で受け止めた瞬間──その剣の刃やいばの腹に一刀目を置き去りに、俺は後方へ急加速する。

　逆手に構えた二刀目で、フェニックスギルディの横腹を斬きりつけた。

「速はええ速え、下こ結つびちはスピード特化の形態フオームか！」

　炎ほのおが火花となって乱れ飛び、フェニックスギルディは後方へと大きく飛びすさった。

「けどよ、相変わらず結び目をコロッコロ変えてやがるのか！　随分と浮気性だな、総二!!」

　休む間は与えない！

　フェニックスギルディが講釈に熱を入れる間に、錐きりもみして旋回し、一刀目のブレイザーブレイドを回収。

　相手の剣の死角から斬りつける。無防備な肩口にブレイドが吸い込まれていった瞬間──

「フェニックスチョ──────────────────ップ!!」

「ぐうっ⁉」

　やおら繰り出した炎の手刀で、フェニックスギルディはブレイドを弾はじき逸そらした。

「手刀でブレイドと斬り結んだ……⁉　お前こそ相変わらず無茶苦茶しやがる!!」

　空中で急転を繰り返し、ツインテールの残像を創りあげて乱れ飛ぶ。

「そこだあっ！」

　フェニックスラッシューターが逆さか袈げ裟さに一いつ閃せんされ、俺のツインテールを斬り飛ばす。

「残像でも、ツインテールを斬られるのは嫌なもんだな……!!」

目に見えぬツインテールに刻まれた斬ざん痕こんに確かな痛みを受けながら、俺の体感時間はフォーラーチェインの限界である二二秒を間近に感じていた。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
フォーラーチェインの追加武装から、紅あかいツインテール属性の粒子が乱れ咲く。
最大加速の飛翔が地面を削り、砂の波が猛然と噴き上がる。
フェニックスギルディの眼前まで突貫し急旋、周囲を高速旋回した軌跡が強固なオーラピラーとなってフェニックスギルディを拘束バインドした。
「ほおう、俺様を炎で縛り付けるたぁな……!!」
制限時間の寸前でライザーチェインへとチェンジし、バックパックがスライド。プログレスバレッターが分離してブレイザーブレイドへと合体し、ブレイザーブレイドツインが完成する。
跳ね飛ばされるかのように猛烈な最終噴射フアイナルブーストに身を委ね、渾こん身しんの一いち斬ざんに二刀を振り上げた。
「よっしゃ来やがれ、テイルレッド!!」
「ライジングブレイザ――――――――――――――――ッ!!」
真剣勝負をしていながら――俺は、心のどこかでフェニックスギルディが技を防ぐことを期待していた。こいつほどの強さなら、そう簡単に倒されるはずはないと。
互角に戦い続けていれば、その間にきっと考えを改めてくれるのではないかと。
――俺様の考え過ぎだったみたいだぜ。そのツインテールなら大丈夫だ。言いたい放題言っても、そんなふうに最後には素直に非を認めるところが、こいつのいい所じゃないか。
ここは砂浜だ。二人で大の字に倒れて、「お前やるな」「お前こそ」

なんて古くさいやりとりをして──そんな、馬ば鹿かみたいなデートの締しめでもいいじゃないか。
「あ───」
　鳳ほう凰おうを象かたどった異形に、ポニーテールを翻ひるがえして笑う少女の顔が投か影さなる──。
　あまりにも呆あつ気けなく、斬撃が総身を通る感覚──。フェニックスギルディはいつかのように結界を壊そうともせず、その身に技を受けた。
　炎に包まれ、大爆発するフェニックスギルディ。
　俺はブレイドを地面に落とし、爆炎を瞳ひとみに焼き付け呆ぼう然ぜんとしていた。
「……お前まさか……俺に、わざと倒されるつもりだったのかよ⁉」
　ポニーテールとツインテール……手を取り合い、切せつ磋さ琢たく磨ましていけるかと思った矢先に訪れた避けえぬ戦い。ツインテールとポニーテールは、わかり合えるって信じてたのに……。
　戦う前も、今も、現実感の乏しさに震ふるえる。
「……くそぉ……何で、何でわかり合えなかったんだ……‼」
　激しい脱力感に変身が解除され、砂浜に膝ひざをつく。
　哀かなしい潮しお騒さいに、心のツインテールが揺れた。

◇

　総そう二じたちはエレメリアンが属性力エレメーラを活性化させなければ発見できないが、それはエレメリアン側も同じことだ。テイルブレスの認識攪乱装置イマジンチヤフでツインテール属性を秘ひ匿とくされている総二たちは、変身して初めてエレメリアンたちに存在を感知される。

　ゆえに、果たし合いを臨む時は、ツインテイルズ側に探知してもらうのが手っ取り早い。
　ティラノギルディもまたこれまでの幹部のように自らの出現を誇示しようとした矢先、テイルレッドのツインテール属性を感知した。
　ティラノギルディは渡りに船とばかりに、一体誰だれと戦っているのかなど考え及ぶところではなく、早急にレッドの元へと向かった。
　その進撃を阻はばむようにティラノギルディへ追いつき、敢かん然ぜんと立ちはだかるブルー、イエロー、ブラック。ティラノギルディは苛いら立だちを隠さず、吐き捨てるように言った。
「テイルレッドは何をしている……」
「あんたのせいで、今寝込んでるわ」
　ティラノギルディはマントを翻ひるがえし、その厳いかつい指を戦士たちへと突きつけた。
「馬ば鹿かな。地球に轟とどろくツインテール、感じぬほど愚かではない」
「ツインテールは認めてるくせに、何でレッドを狙ねらうのよ！　またとっとと退却すればいいでしょ！　今はあんたに構ってる暇ひまなんてないのよ!!」
「奇遇だな、俺も今は貴様らなどに用はない……テイルレッド……百ゆ合りを汚けがした偽りの少女……あのツインテール属性を奪ってみせねば、百合の帝王としての沽こ券けんに関わる!!」
　ブラックが左右に目線を送り、作戦を伝える。
「あやつは死の二菱ダー・イノ・ランヴアス最強━実力は折り紙付きじゃが、メンタルがとてつもなく弱い。ゆえに、波に乗る前に速攻で片付けるのじゃ。最悪、この場は退ひかせればそれでもよい」
「……ＯＫ。早くレッドに追いついて、唯ゆ乃のと戦わなくちゃいけないしね……!!」

三人は頷うなずき合うと、ウェイブランス、ヴォルティックブラスター、ダークネスグレイブを構えた。
イエローの斉射に合わせるように跳躍し、左右それぞれから武器を振り下ろすブルーとブラック。雷弾を身に受けてもたじろぎもせず仁王立ちするティラノギルディは、嵐のような一いつ閃せんをもって空から迫るブルーとブラックを武器ごと跳ね飛ばした。
「抜かせたか──我わが聖剣、輪廻の百合受攻アロンダイトを‼」
刃幅の広い長剣を、高々と掲げるティラノギルディ。
いかなる武器をも砕き斬きり、いかなる巨きよ軀くをも両断する。
処刑部隊の帝王が手にするは、まさしく完殺を体現した巨大な聖剣。
受け攻めにこだわらぬ百合の博愛の結晶、精到なる両刃。
その威容にたじろいだのも一瞬──ブルー、ブラック、イエローは、間かん髪はつを容いれずに攻撃を再開した。

◇

ま……。
う……さま……。
断続的に響いてくる通信に我われに返り、俺はポケットからトゥアルフォンを取り出した。
『総そう二じ様、聞こえますか⁉　全然応答がなくて……こちらに強制的に繫つなぎましたが……』
「え……トゥアール……⁉」
トゥアールの通信だった。繰り返し呼びかけ続けていてくれたのだろう。
『変身が解除されましたが……大丈夫ですか⁉』
「ごめん……戦いに夢中で、聞こえていなかった……。でもトゥアー

ル……フェニックスギルディは─」
　通信で決着を伝えようとした俺は、胸を刺すプレッシャーに総毛立ち、振り返った。
　ライジングブレイザーで焼け焦こげ、砂浜に同心円状に刻まれた焼け跡の中心から、巨大な炎ほのおが立ち昇った。これ以上心配をかけさせまいと、俺は咄とつ嗟さにトゥアールとの通信を切った。
「……そういえば、倒したのにポニーテール属性の属性玉エレメーラオーブがなかった……!!」
　帳とばりが降り始めた空に揺らめく、象徴的な炎の片翼。
　やがて炎が集束した時─そこには、何も変わらない姿でフェニックスギルディが仁王立ちしていた。
「よう！」
　数分ぶりの再会を喜び、気さくに片手を挙げるフェニックスギルディ。
　不死鳥……フェニックス───。
「お前、まさか……!!」
　誰だれもが知る伝説の一幕を間近に触れ、俺は息を呑のんだ。
「おう。俺様のポニーテールは……不滅だ!!」
　不死身……完全再生！　これがフェニックスギルディの真価!!
「しかし何だ、知っててペース配分でもしてんのかと思ったら……まさか、今まで知らなかったのか？」
　何がわざと俺に倒されるのを望むだ……。無敵の能力に裏打ちされた余裕だっただけじゃないか!!
「セーブしてねえ……あれで全力だったってことはねえよな、総そう二じ!!」
　あいつは、俺が再生能力を見越して加減しながら戦っていると思っていたのか。

　だから、ライジングブレイザーも一度わざとその身に受けてみせた。
　冗談じゃない、俺はとっくにフルパワーだった……!!
「さあ、第二ラウンドといこうぜ、テイルレッド!!」
「何ラウンド先取制なんだよ！」
　イースナが途中でバテたって言ってたのは、この特性のせいでもあったのか。
　けど、不死鳥フエニツクスが不死身なのはあくまで伝説上のもの。
　精神生命体とはいえこいつが生命である限り、無限に再生し続けるなんて不可能。いつかは限界が来るはずだ。
　問題は……その限界に、俺がこいつをふん捕まえて引っ張っていけるかどうか、だが……。
「うっ……」
　フェニックスギルディの身体からだから、再び轟ごう然ぜんと炎が噴き昇り、たまらず呻うめき声を上げる。
　生身には危険な熱度の炎ほのおに、俺は慌てて距離を取った。繭まゆ状に集束した炎が、不死鳥の身体からだを取り巻く。
　新たな息吹を象徴するかのように、ヒビが入った繭は微み塵じんと砕ける。中から現れたのは、灼しやく熱ねつのドレスで柔肌を彩いろどられた炎の女神──結いわ翼ばね唯ゆ乃のだった。
　すでにその手には、フェニックスラッシューターを握っている。
　俺は覚悟を胸に沈め、ポニーテールの少女へと歩み寄る。

「好きだぜ、総そう二じ！」

　突然の告白に、思わず顔を上げる。
　油断を誘うためではない。唯乃の晴れやかな笑顔には、一点の虚飾も垣かい間ま見えない。

　下を向いていては、こいつの覚悟と向き合えないんだ!!
「最初俺様は、お前の破天荒なところに惹ひかれた。イレギュラー中のイレギュラー……男でツインテールを究める規格外の大馬ば鹿か……どこか、親友あいつと重なった」
　─親友と重ね、惹かれる……。
　フェニックスギルディ。その時気付かなかっただけで、お前はすでに、人間のように─。
「俺様もお前を守りてえ。お前の仲間みてえに……」
「俺のことを好きだって言ってくれるなら……唯乃！　一緒に戦おう、ツインテイルズとして……！」
　だから俺も、諦あきらめきれなかった。最後にもう一度だけ……わかり合いたいと願う。
「お前だって、親友の形見のテイルギアで戦ってるんだろう!!」
　お前は親友の形見のポニーテールを継承し。
　俺は、トゥアールの心とツインテールを託された。
　あと少しだけ歩み寄れば。
　ツインテールとポニーテールは、必ず親友になれる。力を合わせることができるはずなんだ。
「行くぜ、総二」
　だが、もはや問答は無用と宣言する唯乃に、最後の淡い希望も潰ついえた。
　──いや、潰えるんじゃない。この手に握るんだ。
　今度こそ全力で……俺がツインテールに呑のみ込まれたりはしないということを見せつけて、こいつの石頭をガツンと叩たたく。
　そうするしかないんだな、唯乃─。
「……わかった。来い、唯乃」
　俺は右腕を胸の前にかざしてテイルブレスを可視化させ。

唯乃は、炎をまとわせた右手を一振りした軌跡の中から、ポニーテール属性のレリーフを実体化。愛用の武器、フェニックスラッシューターの柄つかの部分へと塡はめ込んだ。
「…………」
「…………」
寄せて返す波も口を噤つぐみ、周囲は厳おごそかな静せい謐ひつに包まれた。
向き合ったガンマンが互いの腰のホルスターに手を添えるように。俺たちは、それぞれの変身アイテムを構え、互いの目を睨にらみ据すえる。
トリガーにかけた指を同時に引くように。
変身機構起動略語スタートアツプワードが、寸分の乱れなく重なった。

「「テイルオン!!」」

知覚の埒らち外がいの時の中で、互いが発した炎ほのおが威い嚇かくし合うように猛たける。
灼しやく熱ねつの装そう甲こうと、極炎度を象徴する蒼あおきマフラー。
テイルギアＴＹＰＥ-P。
ポニーテール属性を核にしたもう一つのテイルギアを装着した唯ゆ乃のが、全力の闘争に歓喜しながら疾しつ駆くする。
「おらあああああああああああっ!!」



先ほどまでとは比べものにならない膂りょ力りょくの剣撃が、しなやかな細腕から迸ほとばしる。
「ぐっ……!!」
受け止めただけで膝ひざを折り、威力を殺しきれずに砂地を削りながら後退する。
手首のスナップで剣の柄つかを跳ね上げると同時に、刃やいばが開閉し、中から銃口が出現する。
銃へと変形させたフェニックスラッシューターが過あやまたず俺のツインテールをロックしていることを悟り、俺はプログレスバレッターを手にした。
際限なく射出される炎弾から、間一髪フォーラーチェインに形態変化チエインカスタムして離脱する。
「まだまだあ!!」
射角をねじ曲げ、唯ゆ乃のは空中へ回避した俺へと炎弾を撃ち続ける。
ミサイルをガドリング砲で撃ち出すかのような不条理。牽制射ではない、一発一発が必殺の威力を持っている。
放物線を描いて海に着弾した炎ほのおが、激しい水蒸気爆発を巻き上げる。
回避が間に合わず、肩元へ迫撃した炎弾をブレイザーブレイドで弾はじく。
正面から打ち返したわけではないのに、そのあまりの重さに剣も弾き飛ばされてしまう。そのまま弧を描き、離れた砂浜へと突き立った。
鉛筆で剛速球を打ち返そうとするようなものだ。フォーラーチェインのパワーでは、あいつの攻撃を受け止められない。
翼の装そう甲こうを展開し、唯乃も俺目掛けて猛然と飛翔してきた。
空中で銃を剣に変形し直し、炎の斬ざん痕こんを空に描きながら渾こ

ん身しんの一いち斬ざんを繰り出してくる。
「ダークグラスパーの姉ちゃんは途中でへばっちまったが、お前はどこまで粘れる、テイルレッド⁉」
「……違う」
　残った一刀を繰り出された剣に合わせ、衝撃に身を任せた。
「イースナはもう、ダークグラスパーじゃない……」
　イースナは自らその名と決別した。二度と、ダークグラスパーとは呼ばせない。
「テイルブラックだ!!」
　捌さばききれないなら、その威力を逆に利用すればいい。
　愛あい香かに比べれば武術の技量は劣るかもしれないけど……それでも、俺の中にだって力のいなし方は息づいているんだ。勢いそのままに旋転し、さらにフォーラーチェインの追加装甲を展開。加速力を相乗させた斬ざん撃げきを、唯乃へと叩たたき込む。
「おおっ！」
　唯乃は爆発的な勢いで弾き飛ばされ、大波を噴き上げて海面へと没していった。
　俺は砂浜へと降り立ち、基本中結形態ノーマルチエインへと元身。インターバルを挟んで、属性力エレメーラを全身に流動させる。
「□□□□□□!!」
　眼前で巨大な炎ほのおの刃やいばが天へと逆巻き、海を割る。
　モーゼの十じつ戒かいでも気取るつもりか。右と左に瀑布を従えながら、海の只ただ中なかに出現した通路を悠然と歩む唯ゆ乃の。
「また強くなったな、テイルレッド……。嬉うれしいが……嬉しくねえぜ!!」
　強者との戦いを喜ぶフェニックスギルディが笑顔を歪ゆがめるほど、今の俺の力は危ういというのか。

「随分疲れてるな。変身解除したら俺様が手を止めるとは思わないこった。そん時は……お前のブレスを奪って終わりにするぜ」
　唯乃の言葉に頬ほおを張られるような、鋭い痛みが心に広がる。
　俺は走りざまにライザーチェインにチェンジする。
　砂浜に突き立っていたもう一刀のブレイザーブレイドを引き抜くと、信念を叫び唯乃へと奮ふるい向かった。
「……たとえ腕を斬きり飛ばされようが、このブレスだけは渡さない!!」
「おっ、気合い入ったじゃねえか！　何でも言ってみるもんだ……もうけもんだぜ!!」
　言っていいことと悪いことがあるとは思わないのか……!!
　来るなら来い……もう俺は迷わない!!

◇

　ティラノギルディとの戦いは膠こう着ちやくの様相を呈してきた。
　ブルーが斬りかかる度たび、ティラノギルディは大きく距離を取り、小声で何か呟つぶやいている。
　怖い、と聞こえたようにも思えるが、下したっ端ぱ兵士ならともかく部隊長でそれはあり得ないだろう。
　三対多。戦力としてはカウントできなくても、ティラノギルディが呼び出した無数の戦闘員アルテイロイドは、三人の焦あせりを上乗せするには十分だった。
　存分に全力射が可能な場所でありながら、イエローは武装をお預けセーブして銃撃に留とどめている。
　攻と守で目的は正反対だが、どちらも力を温存してレッドの元へと駆けつけたいという思惑が枷かせとなっているのだ。

「トゥアール、あたしたちはいいからレッドをサポートしてやって……！」
『駄目です、今のレッドには下へ手たに声をかけて注意を逸そらす方が危険です……すでにフェニックスギルディはテイルギアをまとって戦っています！』
　通信を受け、ブルー、イエロー、ブラック共に焦りが濃くなる。
　ブルーとイエローはギア装着時の唯乃の桁けた違いの力を身を以もつて味わっている。ブラックに至っては、ギアを装着する前の唯乃に引き分けたのだ。
『せめて、タイミングを見て……そうだ、ブルー、イエロー‼』
　トゥアールは何か秘策を編みだしたのか、二人へと通信を送った。

◇

　飛翔するフェニックスギルディをフォーラーチェインで追撃し、夜空が二本の炎ほのおに斬きり裂かれていく。空中で牽けん制せいし合いながら俺たちが辿たどり着いたのは、最初の待ち合わせ場所だった廃工場だった。今朝、第一印象で戦闘に適した場所と感じたのは自分でも無粋だと思っていたが……万一、初しよ手てから激突することを想定し選んだのが、この場所だったのかもしれない。
　唯乃の身体からだから暴風のように吹き荒れる炎の圧力に耐えながら、俺は剣を振るい続ける。
　今にも吹き飛ばされそうな台風の最中、頭上に傘かさをかざすかのような心こころ許もとなさ。
　土管を抉えぐり砕き、コンクリートの土砂の中、もみ合うように戦闘を続行する。
「フェニックスパ――――――――――――――――ンチ‼」

「…………だったら俺は……ツインテールパンチだ──────っ!!」
　腕に加積された装そう甲こうを展開。光渦巻く右腕を、唯乃が繰り出す右ストレートに合わせる。
「うわあああああっ!!」
　しかし、俺のテイルギアだけが右腕の装甲が砕け、吹き飛ばされる。
「いいパンチだ！　名前も含めてな!!」
　砕けた装甲を浴びかけられながらも瞬まばたきもせず、俺を賞賛してくる唯乃。
「なあ、テイルレッドよ……共感しすぎるのは誉ほめられたもんじゃねえが、エレメリアンはいい奴やつばっかだろ……。エレメリアンは心から生まれる存在だ、心が曇った奴が強くなれるはずがねえからな。だが首領は違う。何でああなっちまったのか……最悪の存在だ」
　痺しびれる右腕に剣を摑つかみ、鳳ほう凰おうの顕けん現げんたる少女へと疾しつ駆くする。
　首元の蒼あおい炎が敏感に攻撃を察知した。
　来る──俺たち三人を翻ほん弄ろうした、攻防一体のマフラー。
　一度見ているんだ、打開策を考えろ──!!
「お前をあいつに渡すわけにはいかねえ！」
「俺自身が、誰だれよりそう思ってる！　邪悪な存在に、俺たちのツインテールは渡さない!!」

『聞こえる!?　レッド!!』
「ブルー……！」
　トゥアールが通信を繫つないだのか、タイミングを計っていたらしきブルーの声が響いた。
『あたしとイエローは大丈夫だから、三つ編み属性トライブライド使って！』

『遠く離れたご主人様に脱がされるという特異が心の力になり、きっとわたくしたちの装備をそちらに届けてくれると思いますわ!!』
『わらわの鎌かまもドＭの大砲になんとか乗せて送る、それで焼き鳥をブン殴なぐっておけ!!』
　イエロー、ブラックの声も続く。
　俺は通信へと頷うなずき返し、左腕をかざした。
「属性玉エレメーラオーブ──三つ編み属性トライブライド!!」

　空の果てから飛来する、青き槍やりと黄色い巨砲。そして、ついて来てくれた、黒い鎌。
　地に転がった俺の赤い剣とが一つに交ざり、迸ほとばしる閃せん光こう。
　フュージョニックバスターが完成し、唯ゆ乃のの前に立ちはだかるように浮遊する。
　俺は自分の身体からだの倍はあろうかという巨砲の前に立ち、ツインテールを下結びへと変えた。
「むっ!?」
　剣を構える唯乃。
　フュージョニックバスターのグリップを握り、俺は身体ごとぶつかるように最大加速して唯乃へと迫撃した。
「飛べ、セイバ───ッ!!」
　そして加速の最中で全方位斬撃装備サテライトソード、ブレイザーセイバーを全射出。自動防御を取ろうとした唯乃の蒼あおいマフラーを引き付けた。
　それでも唯乃はこの奇襲に対応し、空中へ逃のがれようとする。
「何ッ!?」
　その足に刃の腹を激突させ縫ぬい止めたのは、強引に合身巨大砲ユナ

イトウエポンにくっついてやってきた、ダークネスグレイブだった。反動であっさり外れ、先だって射出されていたのだ。

　属性力エレメーラの力に依よらない、子供の遊びのような無む理り矢や理り合体……それは逆に、属性力エレメーラに注意を向けていた唯乃の虚を突いた。

「フュージョニックバスタ―――――――――――――――ッ！」

　三人でも唯乃には勝てなかった……だが、今の俺たちは四人分の力ツインテールだ!!

「唯乃おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　砲口を密着させて放つ零ぜろ距きょ離り発射。

　衝撃でフュージョニックバスターが砕け、俺たちの武器の欠片かけらが光と炎ほのおの中に消えていく。

　そして、俺と唯乃も――。

◇

「あふんっ！」

「うおわあびっくりした!!」

　眼前で急にイエローが脱衣パージし、ティラノギルディは尻しり餅もちをつく寸前まで後あと退ずさった。

　ブルーのランスとイエローの合身巨大砲ユナイトウエポン、そしてそれに無む理り矢や理りくっついたブラックのダークネスグレイブが、空の彼方かなたへと飛んでいく。仲間の窮地へ駆けつけんと。

「エターナルパッド!!」

　それを見届けたブルーは観念するようにエターナルパッドを取り出

し、アンダースーツの隙すき間まから胸に差し入れた。
　抵抗を感じさせない滑らかなスロットインの直後、ブルーの全身が激しい青の閃せん光こうに包まれる。
　蒼あおき鬼神、テイルブルー・エターナルチェインが降臨する。
　そのそびえ立つ壁のような巨大な威圧感に、さしもの帝王も嘆息を禁じ得ずにいる。
「時間がない、二人は先行って！」
　全員でかかり速攻で倒すのが良策と、戦力を分断せず三人ともここに残った。
　力を温存しなければならないと、初しよ手てからパワーアップしての攻撃を控えた。
　どちらも悪手に回り、ブルーはここにきて分断を選択したのだ。
　ブルーの案を受け容いれ、ブラックが頷うなずく。
「メガ・ネ!!」
　メガ・ネが戦闘機形態メガネウインガーに変形する。
「乗れ、ドM!!」
　ブラックは手を差し出し、イエローを搭乗席の後ろへと導く。
「はい!!」
「え、返事するんか!?」
　音速の彼方におかんのツッコミを置き土産みやげとし、三人が空の彼方へと消えようとした、その時。
「させねえ～～～～～～～～～～～～!!」
　のどかな、しかし、決意を湛たたえた訛なまり声が空に響き渡り、戦闘機形態メガネウインガーへと落下してくる。
　まさかの頭上からの蹴撃に、メガ・ネは慌てて人型に変形し直し、ブラック、イエローと共に地上に降り立った。
　ティラノギルディも、予期せぬ救援者に帝王たる己を忘れて目を丸く

した。
「ブ、ブラキオギルディ……貴様……動画サイトの生放送はどうした!!」
「そうだぁ、はやぐ帰んねど、〝たぐ〟に配信主失踪どが書がれっぢまう……」
　部下の意気に微笑ほほえみで謝し、ティラノギルディはブルーへと向き直った。
　後方の伏兵になど気を割さかない、前面の敵だけを粉砕全滅する帝王の威風。
　それは、頼もしき部下に背中を任せることができるがゆえだ。
　ブルー・エターナルチェインとティラノギルディ。
　イエロー、ブラック、メガ・ネとブラキオギルディ。
　二転三転する戦局の中、今やツインテイルズ側だけが焦燥に身を焦じらしていた。
「さあ、速攻で決着をつけるわよ!!」
「今、胸にパッドを盛ったように見えたが……まるで魔の海域の如ごとく、パッドを飲み込み一ミリの成長も許さぬ虚数の海！　巨乳を目指し、虚乳という魔道に落ちたか、テイルブルー!!」
　帝王の憐れん憫びんに目を逆三角に尖とがらせ、ブルーは疾しつ駆くした。
「噛かみ噛みの放送でテンパってたくせに随分口滑りがいいじゃないのよおおおおおおおおお!!」
「それだけ滑りやすそうな胸を見てはな!!」
　ウェイブランスエクシードを振るい、帝王の聖剣と撃ち合わせる。
「……何だ、まるで力が増したようには見えぬが……そう、その憐あわれな胸のようにな!!」
「もちろん増すわよ、胸と同じくね!!」

　限りなく厳しい将来の可能性を暗示するように叫び、ブルーの斬ざん撃げきが加速する。
「むうっ⁉」
　テイルブルー・エターナルチェインの最大の特性たる、属性玉エレメーラオーブの瞬間発動。
　右腕の属性玉変換機構エレメリーションで即座に解き放ったのは、重力を操る体操服の属性玉エレメーラオーブ。
　ランスに重力を上乗せし、足りない膂りょ力りょくを補って斬きり結んだのだ。
　距離を取ろうとしたティラノギルディが、不意に背を壁に打つ。
「何⁉」
　ティラノギルディの背後には、貧乳属性スモールバストの力で具現化した硬質の防御壁が出現していた。
　それだけではない。
「むう、身体からだが離れぬ⁉」
　離れようともがくも、ティラノギルディの身体はトリモチに囚とらわれたように壁に縫ぬい止められていた。ブルーが腰属性ウエストを同時発動していたからだ。
　本来はどっしりと地面に腰を据すえるかのように、相手の足を地に縫い付け動けなくする効果を発動する腰属性ウエストだが、それを同時発動したことにより貧乳属性スモールバストの壁がその効果を上乗せされたのだ。
「くっ……哀かなしき堅さよ……何もそこまで自らの胸を卑ひ下げせずともよかろう‼」
「この数秒でどんだけあたしの胸に注目してんのよ――――――っ‼」
「ぬううおおお‼」
　気合い一いつ閃せん、ティラノギルディは壁の捕ほ縛ばくを力尽くで

脱し、目前に迫っていたブルーのランスを叩たたき落とした。
「だったら――!!」
　飛びすさったブルーが大振りにランスを投げ放つ。
「むっ⁉」
　悠々と迎え撃とうと構えていたティラノギルディの眼前から、ランスが忽こつ然ぜんと姿を消した。
　周囲を見渡し、槍やりの姿がないことを確認する。
　しかし、殺気は竜巻のようにティラノギルディの周囲を渦巻いている。
「はっ⁉」
　本能に任せ振るった剣に、思わぬ手て応ごたえ。
　ティラノギルディは、自分が槍を間一髪跳ね飛ばしたのだと悟る。
「不可視の槍……いや、それだけではない⁉」
　跳ね飛ばしてもブルーの手元に戻らず、依然として殺気はティラノギルディを狙ねらっている。
「今度はこちらか!!」
　エターナルチェインの規格外の能力で、ブルーは同時に三つの属性玉エレメーラオーブを発動していた。
　邪険属性クルーエルで槍の認識を打ち消し、不可視へと変へん貌ぼうさせる。それを体操服属性ブルマの重力を加積し打ち出す。
　しかしさすがは帝王ティラノギルディ、不可視の槍を超絶の戦闘本能で察知し、弾き飛ばす。
　そこに待っているのは、武器や攻撃を途中で跳ねさせるトリッキーな発動効果を誇る、頰属性パフ。その新たな属性玉エレメーラオーブの効果で、ウェイブランスエクシードが空中で跳弾している。
「もう逃げられないわよ、ティラノギルディ!!」
　不可視の槍が、跳弾しながら威力を加速させ襲いかかる。

斬ざん撃げきの結界の中へ、ティラノギルディは追い詰められたのだ。
跳ねれば跳ねるほど速度が倍加する槍の乱舞に、ティラノギルディが焦燥を見せる。
だが同時に、ブルーも追い詰められていた。
「……み、三つでこの疲労……これじゃ、七種同時発動なんて……」
テイルギアに加積搭載された計七つの属性玉変換機構エレメリーションを見み据すえ、ブルーは疲労にたたらを踏んだ。
ティラノギルディが未いまだ真価を見せない以上、相手の能力を逆手に取るエターナルチェインの奥義・属性玉完全解放ブレイクエレメリーズは封殺せざるを得ない。
このまま一気に削り刻み、必殺の一撃を叩き込む。
「おのれ、ちょこまかと鬱うつ陶とうしい……!!」
ブルーが必勝を確信した瞬間。ティラノギルディは、黒く輝く宝石を出現させた。
「──それを使うのは、おらだあ」
だが、横から割り込んできたブラキオギルディが巨体に見合わぬ早はや業わざでその〝首領の吐息ゴツド・ブレス〟を掠かすめ取る。
「何をしている！」
「お、おらがこの四人引ぎ受げる作戦だあ。おらの方が大変なんだがら、おらが使う！」
「馬ば鹿かな、それはそんな都合のいいものでは──」
慌てて取り返そうとするが、跳ね飛んだブルーの槍やりはティラノギルディを越え、ブラキオギルディの肩口に直撃した。苦く悶もんの訛なまり声を上げながら、宝石を盛った腕を高々と掲げる。
「ほんどにっ……くうぎの読めねえひどだっ……！　ここはおらさまがせで、さぎにいってけろって言ってんだあ！　何で、かっこつけさせで

くんねんだあ!!」
　首領の吐息ゴッド・ブレスを、自らの胸に叩たたきつけるブラキオギルディ。
　黒き宝石は体内に吸い込まれていき、ブラキオギルディの身体からだが致命傷を受けて爆発する寸前のように放電し始めた。
「ブラキオギルディ……」
「……土下座ぁしてまで、テイルレッドに勝ちてって……かっごよがっだあ。隊長さんなら、絶対に負げねって……!!」
　ブラキオギルディはこれまで胴体に埋まっていた首を長々と伸ばし、カタパルトのようにしてティラノギルディを離脱させた。
「ああっ！　ティラノギルディが……！」
　予期せぬ強行突破に慌てるイエロー。
　ブラキオギルディは際限なく激しい放電をしながら、見送りの役目を終えた首を鞭むちのようにしならせて四人に攻撃を仕掛けた。
「貴様、それは何じゃ……何をした！　まっとうな最終闘体ではないな!?」
「うがみんしょーらん……ちんがらっずんばい!!」
　大気を震ふるわせる咆ほう哮こうに、ブラックは思わず後あと退ずさる。
「むう、ブラキオギルディが地球外の言葉を!?」
「違うでブラックちゃん、方言や！」
『……自分の属性である方言に支配されているんです……!!』
　迂まがりなりにも方言を繰るメガ・ネと、分析していたトゥアールが、同じ結論に辿たどり着いた。
「ごんぼほねでねろ――――――――っ!!」
　肩の蹄ひづめを膨ふくれさせ、強烈なタックルを見舞ってくる。
「なんて言うとるんや、ウチの声、聞こえてるやろ!?」

　あれほど好意を寄せていたメガ・ネの言葉にも耳を傾けず、攻撃を緩めない。
　すべてをかなぐり捨て、方言に命を賭とした漢おとこの形相だった。
「さいがはやいこーへーな！　やくちゃもな!!」
　方言とは……その地の誇り。だが、別の地域の人に通じなかった時、笑い飛ばしてしまえるだけの暖かみを持った言葉でもあるはずだ。
　一方的に方言を押しつける今のブラキオギルディは、まさに心を放棄し、戦闘衝動に身を任せた存在になり果ててしまったのだ。
「――メガ・ネ。インフィニットコンバインじゃ……！　お前のアドレスは渡せぬが……この漢おとこに引導は渡してやろうぞ」
　ブラックは覚悟を決め、神ゴツド眼め鏡がねのアンダーリムをなぞる。
「……イースナちゃん……。せやな……」
　その関こ西こ弁ろは、今ブラキオギルディに届いているだろうか。旋回する首の間かん隙げきを掻かい潜り、分解するメガ・ネ。舞い飛ぶ白銀の鎧よろいが、夜よ闇やみに溶ける漆黒に輝きを重ねる。
　インフィニットチェインへと合体したことにより再生したダークネスグレイブは、メガ・ネのパーツが加積されダークネスグレイブメビウスへ。黒こく銀ぎんの熾し天てんの翼を背に広げる。
　ブルーとイエローが最後の注意を引き付ける。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　鎌かまから弓へと変形したダークネスグレイブを構え、神ゴツド眼め鏡がねから取り出した矢を番つがえる。
「インフィニットバニッシャ――――――――――――ッ!!」
　∞の聖せい痕こんを胸に受け、ブラキオギルディは目に光を戻した。
「かがっぽ、い……。あ、おら……」
　穏やかで雄大に地を歩む草食恐竜ブラキオサウルスのように。心と、

本来の訛なまりと共に。
「たぐ、あど一回でクリア放送だっだのに……責任とってけろよ、隊長さん……」
　盟友ともを失ったティラノギルディの、たった一戦限りの戦友とも。言葉とは裏腹になんの未練も垣かい間ま見みせず、今度こそ正しく、今いま際わの際の放電に包まれていく。
「ありがとうなあ、メガ・ネさん……あんだに倒されだんなら、おら悔いはねえ……」
　そして、憧あこがれのおかんへと礼を尽くし――ブラキオギルディは雄々しく爆散した。
　爆炎が立ち上る戦場で、しかし、ブルーたちは感傷に浸る暇ひまも残されてはいなかった。
「……急ぐわよ、ティラノギルディがレッドのところに辿たどり着く前に……！」

◇

　フュージョニックバスターが直撃しても……唯ゆ乃ののテイルギアＴＹＰＥ-Ｐには傷一つついていない。
　逆に俺のテイルギアはボロボロだ。ライザーチェインのアーマーに所々無惨にヒビが入り、紅あかい火花が散っている。かろうじて制限時間内に結び直し、基本中結形態ノーマルチエインへと戻った。
「自分でも感じてんだろ。お前のツインテールの成長は、どこか間違い始めてるってよ」
　道行く人のツインテールにまで引き寄せられてしまうほどの、ツインテールへの飽くなき渇望。強くなればなるほど、俺はツインテールを求めるようになってしまっているのか。

「ブレスを寄越せ、テイルレッド……お前さんのツインテール属性を奪おうってんじゃねえ、テイルレッドとして戦えないようにするだけだ!!」
「言ったはずだ……このブレスだけは絶対に渡せない。お前のそのテイルギアが親友の形見なように……俺のテイルギアも、俺の命より大切なものなんだ!!」
「……なら仕方ねえ、お前さんのツインテール属性の方を奪うしかねえぞ……!!」
　悩むのは後回しだ。今はどこまでも戦い抜いて、このツインテールを守るだけだ!!
「お待ちなさい!!」
　凛りんと響く声に、廃工場の屋根を見つめる。そこには、白衣を夜風に翻ひるがえす少女が立っていた。
　仮面ツインテールは……トゥアールは、いつもの名乗りもせずに俺たちの元へ歩いてくる。
「なんで来たんだ！　こいつは普通のエレメリアンと違うんだぞ!!」
　何より……こいつに会いたいと言われて、トゥアールも怖がっていたじゃないか……！
「レッド、こんなやつの言葉で悩まないでください。唯乃さんあなた、総そう二じ様におっぱい触らせたみたいですが……それで無反応だったから妙な思い違いをしたみたいですね!?」
「おうよ、こいつは胸よりツインテールを選ぶ男だ!!」
「残念ですが、総二様の手はいつも私のこのおっぱいを摑つかみたい放題なんです！　そんな中途半端な大きさのおっぱい、スルーして当然でしょう!!」
　仮面ツインテールはその豊満な胸を手で摑んで揺らし、唯ゆ乃のを遠慮なく挑発する。

「一理あるな……。まあ、こいつがやばい方に突っ走ってることに変わりはねえが」
　仮面ツインテールは俺に向き直ると……そっと右腕に触れた。
「レッド……ブレスを外してフェニックスギルディに渡してください」
「何だって⁉」
「ブレスはまた作ればいいんです。今は、こいつを退散させることを考えましょう。こいつが不死身な以上……仮に愛あい香かさんたちが駆けつけても、目的を果たさない限りいつまでも戦いを挑いどんでくるはずです。つき合ってられませんって！」
　バイザー越しに、あっけらかんと笑うトゥアール。
「違う……このテイルブレスは作り直しなんてきかない……誰だれよりもわかってるだろ⁉」
　──トゥアールの足が、震ふるえている……。そうだ、平気なはずないじゃないか……。
『どうか総二様は総二様のままで──』
　トゥアールの哀しい言葉が脳裏を過よぎる。
　ごめん、でも俺……。君のツインテールを、守りたいんだ。
「唯乃……お前がテイルレッドを狙ねらうなら……俺は、テイルレッドを守るために戦う」
「！　駄目です総二様、これ以上無茶をしようとしないでください‼」
　血相を変えて縋すがり付いてくるトゥアール。俺は大きく跳躍し、充分に距離を取った。
　これからすることに……トゥアールを巻き込むわけにはいかない。
　プログレスバレッターを引き抜き、髪を結び直さないままにフォースリヴォンに合体させる。正道ではない使用方法に、テイルギアが異変を訴え、本来の正しい昂こう揚ようではない力の流動が全身を駆け巡る。
「……おい、何をするつもりだ、テイルレッド‼」

『総そう二じ様あああああああああああああああああ!!』
　上半身に攻撃特化の強化装そう甲こうが加積される。
「ライザーチェインとフォーラーチェインの力を一つにした切り札……」
　そして、下半身に速度特化の強化装甲もが装着された。
　それぞれの強化特性をそれぞれの結び方ツインテールに託し、二つの形態を使い分けてきた。
　では、その二つをあえて中結びに任せればどうなってしまうのか……。

「フォーライザー……チェイン!!」

「ほおう……」
　唯乃が目を細める。それは、決して賞賛の眼まな差ざしではなかった。
　俺もわかっている。自分がどんな真ま似ねをしているのか。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　野獣のように迸ほとばしる咆ほう哮こうを、自分でも止められない。



　疾はしっているのか、翔とんでいるのか……暴れ狂うツインテールから振り落とされまいとするのが精いっぱいで、残りの身体からだの感覚がほぼ無くなってしまっている。
　薄れゆく意識の中、攻撃衝動を目の前の敵へと向ける。
　剣で撃ち合っているような。拳こぶしを繰り出しているような。
　時間感覚からも切り離され、意識が灼しやく熱ねつに呑のみ込まれていく。
「フォーライザーチェイン……か。追い詰められたからって、馬ば鹿かなことをしやがって‼」
「何、だと……」
「確かに俺様は、浮気しねえで一つの結び方を極めろって言った。だが、そりゃあねえよ……。ギリギリんとこを調節してたからこそ何とかなってたんだろう⁉」
　身体が揺らめく。弾はじき飛ばされたのか……⁉
「一点特化した二つの形態を同時発動する……そりゃつまり倍の力が必要ってこった。じゃあテイルレッド……お前はその力をどっから持ってきてる⁉　安易にいいとこ取りしようったってよ、世の中そんな甘くねえぜ！」
「お前にしちゃ随分理屈っぽいじゃねえか、フェニックスギルディ！　そんなの……」
　いいとこ取り。
　決死のツインテールをそう評されたことで、俺の意識はマグマを突き抜けて浮上した。
「いつもの二倍気合い入れたに決まってんだろおおおおおおおおおおおおおおおおお‼」
「確かにな、人間の姿になるとどうも理屈っぽくなってきていけねえ‼」

フェニックスの斬ざん剣けんが、星のように煌きらめく。
「俺様もそういうわかりやすいのが大好きでよおおおおおおおおお!!」
その一光一光を目に焼き付け、俺は剣を振るった。
「ぐっ……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
しかし、おかしい。全くタイムリミットが感じられない。
この姿になってから何秒経たった……？
『総そう二じ様！　危険です！』
何度叫んでくれていたのだろう。ようやくトゥアールの警告が頭に響く。
『痛みは怪け我がや病気のサイン……警告なんです！　オーバーロードというシグナルさえ無くなったフォーライザーチェインは、とっくに限界を超えてしまっている……今の総二様は、骨折に気付かずにマラソンをしているのと同じなんです!!』
つまり、俺はもうとっくに二二秒を……。いや、それでも身体が動くなら……俺は戦う！
「一人のツインテールを守りたかった……」
魂たましいを迸ほとばしらせ、ブレイザーブレイドを振るう。
「多くのツインテールを守りたかった……」
お母さんに手を引かれて歩く、ツインテールの女の子たちを思い出す。
「そしてこれから生まれ輝く、全てのツインテールを守りたいと願った!!」
上半身と下半身が別々の動きをしそうになる。
最強の攻撃力と最大の機動力が、磁界のように折り重なって身体からだの中心で爆裂する。
胴体から真っ二つになる、ぞっとしない幻影ビジョンに苛さいなまれ

ながら、俺はそれでもこの暴れ馬を御そうと集中した。二つの力が拮きっ抗こうしているなら、ツインテールだ。俺自身の身体にもう一つツインテールを思い描けばいい。
「おっ……!?」
　フェニックスラッシューターを弾き上げ、続くブレイザーブレイドの斬ざん撃げきが唯ゆ乃のの胸元を掠かすめた。唯乃の表情に僅わずかな焦燥が疾はしる。
　僅かずつ、際限なく自己主張する上半身と下半身が嚙かみ合い始めた。
　その一方で、身体を駆け巡る灼しやく熱ねつも加速する。
　ツインテールを失う痛みに比べれば、こんなもの……!!
　俺は気力を振り絞ってブレイザーセイバーを射出する。
　さらにフォースリヴォンからプログレスバレッターを外すと、スラッシュモードにして左右同時に投げ放ち、加えてライザーチェインのバックパックから要事の短剣であるブレイザーエッジをも引き抜き、一直線に投とう擲てきする。
　──オールブレイドディバイダー。
　完全解放ブレイクレリーズにさえ見放された禁断の形態──フォーライザーチェインの、最後の切り札。全力を見失ったこの手が手た繰ぐり寄せた、唯一の全開。
　明滅する意識の中、心が描いた確かなツインテールが、炎ほのおの結界を疾はしらせる。
　ライザーチェインとフォーラーチェイン、ノーマルチェインの武器を余さず振り絞り、周囲の土塊が、石材が、鉄鋼が、大気もろとも焼き熔けていく。
「う……おおおおおおおおおおおおお!!」
　全ての斬撃武器が乱れ飛ぶ炎の斬線を掻かい潜くぐり、切り払い、打

ち崩し━向かってきた唯乃と俺は、手に握る互いの剣で斬きり結んだ。
「テイルレッド……お前今何を考えてる!?　痛いか!?　苦しいか!?　ツインテールか!!」
　━━━ツインテールだ!!
「喜怒哀楽がツインテールと共に在あって何が悪い!!」
「わかってねえなあ！　共に在るんじゃなく、支配されっちまうんだよ!!」
　唯ゆ乃のの蒼あおいマフラーに手を絡め取られ、俺は強引に引き寄せられる。
「喜びじゃなくツインテール！　怒りじゃなくツインテール！　哀かなしみじゃなくツインテール！」
「うわああああああ!!」
　激情と共にマフラーを猛然と旋回させ、苛か烈れつな重力の奔ほん流りゆうに苛さいなまれる。
「そしてえええ!!」
　回転の頂点でガラクタのように投げ捨てられ、俺は為なす術すべもなく宙を舞った。
「━━━楽しいんじゃなく、ツインテールだ……！」
　落下して来た俺に、強烈な横よこ蹴げりが見舞われた。
「そんなのはもう、心でも何でもねえ！　ツインテールそのものになるってことだ!!」

『ツインテールそのものになってしまうかもしれんのでござるぞ!!』
　アラクネギルディの言葉を思い出す。

　あれは本当に、そういう意味だったのか？
　心にツインテールが在あるんじゃない。心が、ツインテールになって

しまうと……!!

「さあ、見せてやるぜテイルレッド……俺様の完全解放ブレイクレリーズを!!」

フェニックスの完全解放ブレイクレリーズ──!?

瓦が礫れきと鉄てつ屑くずの山と化した闘場を覆おおう夜空に太陽と輝かんと、唯乃は炎ほのおをまとい浮遊していく。

テイルギアＴＹＰＥ-Ｐの背に、変身前の鳳ほう凰おうと同じく太コ陽ロ風ナのように雄お々おしく広がっていた翼が分離する。その強烈な一振りが生み出す熱波は、瞬またたく間に周囲全てを炎で埋め尽くした。

地獄という名のオーラピラー。視界全てが炎で覆われた時──たとえ身体からだは自由に動こうとも、それは決して解けない拘バイ束ンドをされるのと何が違うのか。

フェニックスギルディが幾度となく越えてきたであろう死の世界で、俺は呆ぼう然ぜんと見つめる。

天高く掲げたフェニックスラッシューターが、グリップを返さぬままに刀身の銃口が開き、炎の凝縮された巨大な刃やいばが形成される。

見み紛まがうはずもなくそれは、俺のブレイザーブレイドの完全解放ブレイクレリーズと対ついを為なす姿だった。

どこまで伸びる──空か、月か、あるいは太陽か。

天を割り振り下ろされる最強の一いつ閃せんが、冷厳に解き放たれた。

「バーニング……フォース！　フィニイイイイイイイイイイイイイイイイイイッシュ!!」

二刀のブレイザーブレイドを微み塵じんに砕き、炎の奔ほん流りゅう

が身体からだを責め苛さいなむ。
「ぐ、あああああああああああああああああああああああああ……!!」
　フォーラライーザーチェインどころじゃない……テイルギアを維持することすらできない。

　俺は変身解除して男の姿に戻り、力なく地面に倒れ伏した——。

エピローグ　ツインテールの果て。

　強すぎる……!!

　ここまで限界を超えた力を振り絞ってもまだ、こいつのポニーテールには勝てないっていうのか……!!

「これでわかったろ、テイルレッド。今のままのお前じゃ俺様や、この先待ってるエレメリアンには勝てねえ。だが強さを求めれば今みてえに我われを忘れて暴バ走力をやらかす。お前はもう、八方塞ふさがりになっちまってんだよ」

　相当体力を消耗したのだろう。

　試作品を強引に使っているので、稼働時間が短いと言っていた。

　ギアの変身を解除し、唯ゆ乃のはフェニックスギルディの姿へと戻った。

「……自分のツインテールをいじめてどうすんだ。てめえのツインテールを大切にできねえ奴やつが、世界中のツインテールを守れるわけねえだろ!!」

　よく、言うぜ……。ツインテールを振り絞らなきゃ勝てねえぐらい、バカとんでもねえ力で向かってきやがったくせに……。

　俺を見下ろしていたフェニックスギルディの視線が、廃工場の奥へと馳はせられた。

　トゥアールじゃない……彼女は、今も必死に俺たちを追ってこっちへ向かっている。

「……ティラノギルディ……!!」

　身体からだにいくつか傷が走っている。まるで、今しがた一戦終えてきたかのように。

　重なる悪い予感に思考を灼やかれても、もう立ち上がることさえまま

ならない。
　誰だれと戦っていた……。戦いはどうなった……!?
　声を出そうとしても、呼気が漏もれるだけだ。
　フェニックスギルディは鼻を鳴らして語りかけた。
「不意打ち狙ねらい……じゃあなさそうだな。自分てめえの死も、部下の死も乗り越えてきた……アルティメギルーの臆おく病びよう大帝様が随分と男らしいツラ構えじゃねえか、ティラノギルディの旦だん那な!!」
「フン、そんな華々しい勇名が轟とどろいておったか！　帝王冥利に尽きるわ……!!」
　ティラノギルディの視線が、変身を解除し倒れ転がる俺へと向けられる。
「処刑部隊の隊長さんよ、どうするつもりだ？　俺様と戦うってのかい？」
　ティラノギルディは何も言わず地面を踏みしめ……真まっ直すぐに俺へと疾走してきた。
「何、てめえ──」
　俺を挟んで反対位置にいたフェニックスギルディでは、間に合わない。
　虚うつろな意識の中──忌いまわしき、属性力エレメーラ奪取のリングが振りかぶられるのが見えた。
「盟友よ！　同胞よ！　今ここに、悲願達成せり!!」
　そのリングが自分自身に迫ってくるのを、俺は他ひ人と事ごとのように俯ふ瞰かんしていた。
　夜風が肌はだを撫なでるようにあっさりと……リングが俺の身体からだを通り抜けた瞬間。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ!!」

　魂たましいが四散するような衝撃が、俺の全身を駆け巡った。
「……無痛のはずが、そこまでの苦く悶もん……。テイルレッド……少年よ、存外に危ないところだったようだな……」
　何の感慨もなくリングを収納し、消し去るティラノギルディ。
　――え？
　何だって……ま、まさか……。
　こんなにもあっさりと……俺は属性力エレメーラを奪われたのか……!?
　ツインテールを奪われたっていうのか……!?
「……てめえ、戦いもしねえで奪うだと!?　同胞が納得すると思ってんのかよ!?」
「これがアルティメギル一空気が読めないと賞賛された、帝王の生き様ざまよ!!」
「テイルレッドのツインテール属性……俺様がむざむざと渡すと思うかい？」
「……反逆者ごときに伺うかがいを立てるつもりはない……!!」
　睨にらみ合うフェニックスギルディとティラノギルディ。
　先ほどまで炎ほのおに心を焼かれていた時の方が、どれだけ楽だったか。
　冷たい。
　身体が氷のように冷たい。
　心臓を引き抜かれたような。血液の一滴までも絞り落ちてしまったような。
　命そのものの欠落を感じ、俺は起こしていた身体を再び地に倒した。
　大切な人のツインテールを守ろうとした果てに……大切な、自分自身

のツインテールを守れなかった。
　喜びも……怒りも……哀しみも……楽しさも。その全てが感じられない。
　灰色の雪が、心に降り積もっていく。
　虚無感が、蟻ぎ走そう感かんのようにじわじわと全身を満たしてゆく。
　今まで決して思ったことのない、絶望に支配された先に。
　心が、絶無を受け容いれた。

　俺のツインテールは━━無力だ……。

テイルギア設定資料 10

テイルレッド
フォーライザーチェイン



武器：ブレイザーブレイドツイン
必殺技：ライジングブレイザー
オールブレイドディバイダー

戦闘で追い詰められたテイルレッドが発現させた切り札。基本の中結びの状態でライザー、フォーラーチェインの追加装甲を併せ持ち、攻撃力と機動力を同時に全開できるため、凄まじい戦闘力を発揮する。また、全斬撃武器を一斉射出が可能。反面、正規の変身では捻出できないエネルギーを強引に引き出すため発現と同時に限界暴走（オーバーロード）を引き起こしており、多大な苦痛と負荷を総二にもたらす。変身し続けることでレッド自身のツインテールもダメージを負ってしまうため、自らの愛を形にする属性力（エレメーラ）とは相反する禁断の姿と言える。

あとツインテールがき

　お久しぶりです、水みず沢さわ夢ゆめです。この巻が出版される頃ころには、アニメ「俺、ツインテールになります。」も終了し、ＢＤ□ＤＶＤのリリースも佳境を迎えている頃だと思います。

　あらためて、荒削りな原作の話を素晴らしい作品へと昇華してくださった、スタッフ・キャスト・関係者の皆様に、深く御礼申しあげます。

　アニメが終了しても緊張の糸が途切れるわけでもなく、いつも通り情熱を迸ほとばしらせて執筆に勤いそしんでいますが、毎週のように新幹線に乗って東京に通っていた日々を思うと、あの慌ただしさがどこか懐かしくもあります。いや、もちろん青森から移住する気はありませんが。

　今回、毎巻区切りよく終わっていた俺ツイにしては珍しく、何やらちょっと緊迫した引きとなりましたが、次巻も変わらず暑苦しくて大おお真ま面じ目めな馬ば鹿かな物語をお届けしますので、いつも通りのんびりお待ち頂ければ幸いです!!

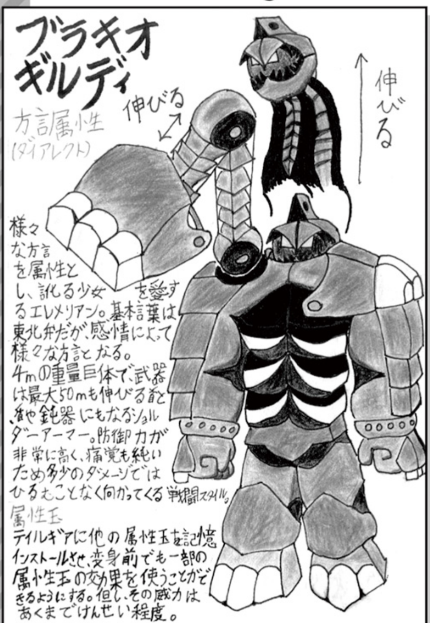
　イラストの春かす日がさん、ツインテール一筋の僕ですが、やはり唯ゆ乃ののポニーテールの可愛さには目を奪われます！　特に今回の口絵は完全にヒロインでしたね！

　担当の濱はま田ださん、赤か白か論争で白熱しましたが、赤となりましたね！（口絵）

　今回も、完成と出版に携たずさわる全ての方と読者の皆様に、感謝とツインテールを！

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.006 ブラキオギルディ



P.N ペコさんの作品

水沢夢の選んだポイント

今回も今まで以上に多くの応募があり、感謝です！ 方言の属性という面白さが一番のポイントです。“訛り言葉の少女を愛する”という設定は関西弁のメガ・ネに、“感情によって使う方言が変わる”という設定は最終闘体になることで変わるという形で、それぞれ採用させていただきました。添付してくれた細かな設定が非常に拾いやすく、応募自体は少し前のものだったのですが、お気に入りでずっと出す機会を窺っていました。

応募のポイント

次回は何やら大がかりな戦いがありそうなので、さほど華がなく脇を固めるキャラが選ばれやすそう？ 今、死の二菱と残存部隊にはどんなキャラが残っているだろうという点も想像していただけると面白いかもしれません！ 出オチ、一発勝負、ニッチな属性の応募大歓迎ですので、どしどしご応募ください！（ただ、他作品のパロディや流用だけはすみませんがNGで……）

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ **〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館**
ガガガ文庫編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

メールでのご応募の場合は、データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。文化祭は学校に泊まり込みをして準備を進めるくらい楽しんでいた記憶があります。思えば徹夜で作業耐性はその頃から養われていたのかもしれません。今も昔も変わらないのは、何かに全力で取り組む喜び。変わってしまったのは体力……いやいや、まだ若い！

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。９

２０１５年４月24日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　丸澤　滋

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１５年４月22日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451543-5